

ぼざろ世界で転生者が
トラウマと向き合うま
で

ハルカゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校入学時に原作知識を思い出した男オリ主。

結束バンドと仲良くなり、STARTYでのバイト生活の傍ら、原作の名シーンを拝もうと計画を立てるが——思うようにいかない話。

※アニメ範囲外のネタは極力抑えています。

注意事項はタグをご確認ください。(恋愛要素はオリ主↓原作キャラまで)

旧題：へぼっち・ぎ・ろっくを生で見たい転生者の奮闘

目次

85

転生者だけど勇者じゃない	1	カラカラ頭で踏み出して	96
記憶が戻っても今まで過ごした人生の成		優しさも過ぎれば毒となる	105
果はかわらない	5	堅牢なる扉の試練	114
時は過ぎた(イケボ)	13	理解不能な感情を求めて	127
丸まるぼっち	20	閑話 6月上旬の3ページ	138
ギターは大事。外見も大事	30	移り変わる空模様	147
お代は20000円になります	39	思い出の詰まった1枚を	156
ぼっちが安住の地を得た日	48	心に置かれたパンドラの箱	167
三步進んで、二歩下がる	57	幻のような一瞬の雷鳴	179
閑話 天使とぼっちとマイペース	70	つないだ手 離さないで	188
後藤さんの生態に詳しい? 畔博士		オーデイションライブ	202
		見守る星、箱の中の満月	213

転生者だけど勇者じゃない

教室の一部が静まり返ったような気がして、何気なくそちらに視線を向ける。

視線の先に、奇抜な恰好をした女子生徒を見て、

（——ああ、これだから友達の人でもできなかつたのか）

と思った瞬間、僕は自分が転生者であることに気がついた。

「ぼっち・ぎ・ろっく」は、いわゆるきらら系と呼ばれる漫画作品だ。

きらら系ではあるが、一般にイメージされるようなふわふわ日常系といった作品ではなく、ガールズバンド系の成長物作品に、顔芸や狂気といったトッピングをふんだんにまぶした、かなりロックな作風をしている。

登場人物はだいたいやべー奴といっている。中でも主人公がかなりやべー奴なうえ、バトル漫画でもないのに死んだりしている。物理的な顔面崩壊やら質量をもつイメージナリーフレンドとかどうなっているのやら……。

そんなやばい作品だが、バンドや人間の成長物語としての軸はしっかりしていて、前世の自分はとても好きだった。

アニメ化の際は素直に喜んだし、それが想像以上の素晴らしい出来栄であったのもとてもありがたかった。

漫画で表現しにくい音楽要素の描き方もさることながら、アニメ化にあたっての再構成のうまさ、アニメオリ描写での膨らませ方など、良かったところをあげればきりが無い。

……前世知識の振り返りはこのくらいにして、そろそろ現実に戻るべきだろう。

今日は高校の始業式。

普通なら話し声がそこかしこから聞こえるはずの、事実さつきまでそうだった教室は沈黙で満たされている。

その偉業(?)を成し遂げた、クラスメイトと思われる女子生徒の容貌には見覚えがある。

「ぼっち・ぎ・ろっく」の主人公——後藤ひとりだ。

後藤ひとりというキャラクターを一言で表すなら、得意分野を不得意分野で帳消しどころかマイナスにしている残念少女だ。

容姿に恵まれ、ギターの腕前はプロ級、本当に大変な時には周りを勇気づけられるような芯の強さ……ここまではまさに主人公の風格といえる。

ところが恵まれた容姿は伸びっぱなしの髪や雑な服装、姿勢の悪さなどで発揮され

ず、ギターについても人見知りのため、人前での演奏がまともできない。芯の強さも日常においては発揮されず、シヨックをうけるとすぐ顔面崩壊してしまう。

さらには陰キャ・コミュ障・独特なセンスのトリプルコンボにより数々の奇行を繰り出しては、気持ちの悪い笑い声を漏らすこともしばしば…。

結果、後藤ひとりには友達がない。

友達がほしいという意欲はある。中学時代の黒歴史から逃れるため、片道2時間かかる高校に通うほどの行動力もある。

だが自分から話しかけにくい勇気が持てず、努力の方向性が明後日の方に行く傾向があるためか、友達づくりの努力が実を結ぶことはなかった――

――そんな間違った努力の例がここにある。

基本装備であるピンクの芋ジャージ。加えて星型メガネと付け髭。『祝 おめでと
う』と書かれたタスキ。

これが後藤ひとりの今日の恰好だ。メガネやタスキは明るい人のイメージなのだろうが、盛大にすべっているうえ、全体的にダサイ服装と絶望的にマッチしていない。

……こんな鮮烈な高校デビューをすれば、入学して1か月たつてもクラスメイトとろ

くに話ができなくても無理はないだろう。

話は変わるが、今世の自分は今まで転生者であることを自覚していなかった。

特に秀でた能力があるわけではなく、将来の進路も漠然としていて、友達もいないわけじゃないがクラスの中心レベルとは程遠い。

高校の始業式という節目の時でも、新しく目標をつくるとか、人間関係を広げるとかしようとは思わず、中学時代からの友人と適当にだべっていた。そんな人間だ。

そんな人間が、絶賛悪目立ち中の初対面コミュ障女子に話しかけられるだろうか…？

(……ムリ、ムリデス。絶対に変な目で見られる)

こんな空気の中で話しかける勇気はない。

何事もなかったかのように話し声が再び聞こえはじめた教室の中で、ほとりいっほ畔一保はそう

考えて。

話しかけられ待ち中の少女後藤ひとりから目をそらし、中学校時代の友人とおしゃべりに戻るのであった。

記憶が戻っても今まで過ごした人生の成果はかわらない

妙な空気や小さなトラブルがあったものの、始業式はつつがなく終了した。

秀華高校では始業式の後、午前中いっぱいホームルームの時間が設けられている。教科書の配布、部活や委員会についての説明、クラス内の交流などを行うためである。

そして現在、クラス内交流の一環として自己紹介が行われているのだが……。一保は話をろくに聞かず、考え事にふけていた。

(さっきの後藤さんちよつとかわいそうだったな……。あの恰好じゃ仕方ないけど)

考え事の内容は後藤ひとり——始業式前に小さなトラブルを起こした女子生徒——についてだった。

トラブルといっても大した内容ではなく、先生から服装を注意されただけのことだが……後藤ひとりは一気に青ざめて「えっ、あつ、はい……すみません……。」と鳴き声をあげてしまっていた。(かろうじて作画崩壊はしていなかった)

せっかく用意した推定高校デビュー用アクセサリーも、役目を果たせないまま鞆に封印。これでは単に高校入学早々の黒歴史誕生を招いただけである。

まあ入学早々、始業式を控える中でタスキやら面白メガネなどを装着していれば目を

つけられるのは当然だろう。本人としてはふざけているわけではなく、必死に考えて準備した結果なのだろうが…。

そんな一幕の後、後藤ひとりとはどんよりと暗い雰囲気をただよわせはじめ、周囲にいる生徒もそのオーラにより元気をなくしていた。

まだ何事か言いたげだった先生もその様子は予想外だったようで、気まずそうに生徒を体育館に（※始業式は体育館で行われる）誘導していた。

（やっぱり声をかけるべきだったかな…。でもあの空気はきつい。重苦しいっていうか鬱つて言葉が実体化したような感じが…）

一保としては今後のこととも考え、励ましの言葉なりかけようかと思っただが…：…残念ながら空気の重さに耐えきれなかった。他のクラスメイトも誰一人話しかけなかった（からかいの言葉すらなかった）あたり、ぼっち気質ここに極まれりといったところである。

クラスメイトの中に来たーん！ とした陽の者がいれば話は違ったかもしれないが、残念ながらこのクラスにはいなかった。もっともそんな陽キャに話しかけられたら後藤さんが消滅していた気もするが。

〈学校の七不思議／始業式の間に消える生徒〉なんていうI Fの話はさておき、

後藤さんは今どんな様子だろう…？ と考え、2つ隣の席を見てみると、なんだか様

子がおかしい。

どんよりとした空気こそもう霧散しているが、今度はやたらとポケットの中や鞆の中を確認している。なんか腕が6本に見えるけど目の錯覚だよね……

(何かを探している？ 何を探しているのかは分からないけど大丈夫かな。そろそろ後藤さんの番だけ……)

アニメとは違つて心の声が聞こえたりはしないので、はたから見ても何を考えているのか分かりづらい。転生特典で読心能力とかもらえていたらよかつたのだが、念じてもそれっぽいや力は感じられないし。

逆に念を送る方はどうか？ と試してみるが、そちらもさっぱり手応えがない。

あ、後藤さんの動きが止まった。見つかつたつて感じじゃないからあきらめたっぽい
か……？

ちょうど前の人の自己紹介も終わりそうだし、どんな自己紹介になるか楽しみ——

「あつ、後藤ひとりです。えっと、その……。とつ得意なこととか……。うっ。いつ、いじょうです……。」

——みじかつ!? え、それで終わりでいいの？

先生も朝のことがあったからか気まずそうに「あー、うん。次は前の席にいつて佐藤」って流してるし、まばらに聞こえる拍手も明らかに義理っぽくてすぐく気まずい…。でも高2の時の自己紹介とかもつと張り切っていたのに、高1ではこれだけっていうのはちよつとおかしいような気もする。

そういえば高2の時（原作）はカンペ見ながら自己紹介してたんだっけ。さつき探していたのはそれかな？ カンペがないのに気がついてパニックだった結果がさつきの自己紹介なのかもしれない。

せつかく自分の過去を知らないところについて片道2時間かかる高校に進学したのに、初手で黒歴史つくっていたら意味ないじゃん…。

再びどんよりとした空気を放ち始めた生き物から目をそらし、違うことを考えることにする。

自己紹介を聞いてもいいんだけど、知ってる人も多いしあまり興味がわかないな。今後、結束バンドや原作にどう関わっていかを考えてみようか。

「ぼっち・ぎ・ろっく」で主人公の後藤ひとりが所属するバンド——結束バンド——は、下北沢のライブハウスSTARRYを拠点に活動していくことになる。秀華高からはそんなに遠くないので通うのに不自由はないが、学内でクラスメイトAをやっているだけだと接点がほぼないに等しい。

原作シーンは楽屋で行われることも多いし、バンドミーティングなんかも部外者や一介のファンだと参加は難しいだろう。そうなるとバンドメンバー入りするなり、関係者枠なりに入らないといけないのだけど……

(音楽とか学校以外でやったことがないし、そもそも女性4人のバンドに男性1人参加ってハードル高すぎる。)

というわけでバンドメンバー入り路線はなし。あとは関係者枠だけど、具体的にどうすればなれるのか――

- ① STARRYでバイトして結束バンドのメンバーやスタッフさんと仲良くなる
 - ② 結束バンドの誰かと親しい関係になり、その縁からバンド内に潜り込む
 - ③ ファン0号もとい古参ファンとなり、準レギュラー的なポジションを獲得する。
- ――だいたいこんなところかな。1つずつ考えてみよう。

① STARRYでバイトして結束バンドのメンバーやスタッフさんと仲良くなる
方向性としては悪くない感じもするけど、いかんせん音楽系のスキル皆無なのがきついなあ……。専門的な話とか全然ついていけなさそうだし、なんでこいつライブハウスでバイトしてるの? って感じになりにかねない。

そもそもSTARRYってバイト募集しているのかな。なんか身内の紹介でしかし

ていないイメージがあるんだけど…。望み薄だけど一応保留。

② 結束バンドの誰かと親しい関係になり、その縁からバンド内に潜り込む

普通の友達じゃ楽屋とかまで入れてもらえないよね。

いや、音楽趣味仲間とかなら入れるかも？ どうして記憶が戻る前の自分は音楽やってなかったのかな。こうなるってわかっていれば楽器練習とか原作キャラに会いにいったりとかしてたのに…。

過去に戻れたり…もしないか。原作知識以外に転生者っぽい能力が全然ないんだけど神様どうなっているんですか？ ってそういえば神様に会った記憶とかないや。

転生チートについてはさておき、普通の友達以上の関係…親友か恋人？

恋人なんてそうそうなれやしないし、喜多さんや虹夏ちゃん——先輩だし伊地知さんの方がいいか——相手ならともかく、山田先輩や後藤さんとはあまり付き合いたいと思わない。

ビジュアルがよくても性格面が…ね。

親友を目指すにしても、学校が違う2人は接点をもつのも難しい。

後藤さんは会話が続き気がしないのもあるし、下手に交流してイベントフラグが折れるとやばい。例えば1話で公園に行かなくなるとか、ギターを学校に持つてくることなくなくなるとか…。

喜多さんは学校も同じだし、友達が多いコミュ強だから仲良くなれそうに見えるけど、彼女は彼女で難敵に思える。

中学校が一緒だったから交流関係とかも知っているのだけれど、女子はともかく男子とあまり親しげにしている様子はなかったんだよね。あまり話をしないってわけじゃないんだけど、一定ラインより内側に踏み込ませない感じというか、距離を測るのがうまいというか…。

つんけんしているわけじゃないのに、恋愛する気はないのが伝わってくる感じ。バンドメンバー紹介してくれるほど親しくなるのは難しそう。

結論としては全員ムリってことで終了ですかね。女の子に生まれて喜多さんの親友になりたかった…。

③ファン0号もとい古参ファンのポジションを獲得する。

古参ファンになることは難しくなさそう。後藤さんや喜多さんからチケット買ってライブにいき、そのままファンになればいい。うまくいけばファン1号さん2号さんみたいな感じの準レギュラーになれるかも。

ただ結束バンドのまともなライブってアニメ8話までお預け（※オーディションは部外者入れない）だし、序盤のシーンに関われないのはちよつと残念。

さらにはえばファンになったとしても、楽屋に入れてもらえるような気安い関係にな

れるかは別の話。それができるコミュニケーションがあるなら誰かと親しい関係になれるような気が……

あれ？ 選択肢全部ダメじゃない？

時は過ぎた（イケボ）

……なんか選択肢が全部つぶれたような気がしたけど、もう一度よく考えてみることにしよう。

学校の違う2人や、クラスが違う上に色々と事情を抱えている（ギターの腕前とか）喜多さんとはともかく、後藤さんなら仲良くなるのは不可能じゃない。むしろ今まで友達いなかったんだし、ちよつと交流するだけで仲良し認定されそう。

イベントフラグ踏めずに原作崩壊の懸念はあるけれど、結構先の知識まであるんだし、しっかりとサポートしていけばなんとかなると思う。

後藤さんが結束バンドに誘われるまでおよそ1か月。その間に交流を深め、公園で伊地知さんが後藤さんをSTARRYに連れていく時、一緒についていく。

あとは後藤さんとの他のメンバーの間をとりもつ間柄として存在感を示しつつ、バンド関係者みたいなポジションを獲得する。

……うん、いいんじゃないかな。

第一話での公園フラグを折らないようにするために何が必要だろうか？

まず後藤さんがバンド女子アピールとしてギターを持ってこないといけない。これ

は文化祭ライブ、あるいはバンドを組みたい欲求がもとになっているから、バンド未結成の状態であれば確実に持つてくると思う。

あとは放課後に後藤さんを公園に行かせつつ、僕がついていくには……

学校ではギターを持ってきたことにふれない、もしくは軽く流すのがいいかな。それでアピール失敗した後藤さんが公園に行くところを尾行し、公園で話しかける。

しばらく話していれば伊地知さんが見つけてくれるだろうし、そうなれば結束バンド結成は約束されたようなもの。

よし完璧……と自画自賛する。忘れないようにノートにメモしておこう。

公園とかでどう話しかけるかについてはまた考えるところとして、次に後藤さんとどう仲良くなるかだけ……

ちらり、と視界の端で後藤さんの席を見る。

後藤さんの席は2つ隣だ。広い教室の中では近い方だけれど、もうちよつと近ければと思わざるをえない。隣同士なら仲良くなる口実にもなるし、授業中とかに気軽に話しかけられたんだけど……

転生モノならこういうのって隣同士になるもんじゃないの？ まあ後藤さんは力行、

僕は畔ほとりで八行だから仕方ないのかな。席替えもしないっぽいから、この距離感でなんとかするしかない。

話しかけるきっかけはどうしようかな？

後藤さんは自己紹介で趣味とか全然話していなかったから、共通の話題が見えてこない。やっぱり始業式の時に話しかけるべきだった。あの時なら「怒られて大変だったね」とか「服、恰好よかったよ（嘘）」とかなんとか言えたのに…。

（まあ1回や2回話したところでどうにもならないだろうし、後悔しても仕方ないか。継続して話せる話題とかないかな……と、）

——考え事をしていたところに、自己紹介の順番が来てしまった。

まあ適当に済ませておけばいいかな。友達は中学校から上がってきた面々で十分だし、今更何かアピールしたいこともないし……

僕の自己紹介は終わったけれど、クラス全員終わるまではまだ時間がかかりそうだし。えっと、さっき考えていたのは……後藤さんに話しかけるネタについてだっけ。ちよつと思いつかないから保留にしよう。

次に考えるのはSTARRYでのバイトについて。

やっぱりお友達採用のイメージが強いし、音楽素人がいきなり行って採用されるのは難しそうな感じ——逆に言えば結束バンドのメンバーと友達になった後でなら、わりと簡単に働けるんじゃないだろうか。

つまるところ逆転の発想だ。結束バンドのメンバーと知り合い、仲良くなるためにバイトを始めるのではなく、ある程度仲良くなってからバイトを紹介してもらい、一緒に働く中でさらに仲良くなる（あるいは原作シーンを拝む）作戦である。

（あとはバイトをする、あるいは続ける名目をどうするか……）

金銭的な事情でバイトを探していて、何か紹介してほしい…と頼んでみるのも一つの手だけれど、ちよつと格好悪いし、何かもう一押しほしい気がする。

バンドメンバーならライブ代の名目で働けるんだけど……あ、

ライブ代というワードをきっかけに、一気に色々解決する秘策を思いついた。

継続して働く理由になり、後藤さんに話しかけるネタにもなる。結束バンドの他のメンバーとのコミュニケーションにも役立つと一石三鳥の秘策、それは――

（ギター始めよう！ 楽器やつていれば話の種になるし、後藤さんに教わるようにすれば交流もしやすい。「my new gear…」回を見るに楽器趣味ってお金がかかるし、バイトをしたくない理由にもなる！）

なんで思いつかなかったのか。「ぼっち・ぎ・ろっく」は音楽系作品なんだし、音楽をすることが攻略の糸口になるのは当然じゃないか。

お小遣いは十分たまっているから、あまり高いギターを選ばなければ予算上も問題な

し。店員さんに聞けばベースを間違って買ったりはしないだろうし、早めに買いに行こう。

ギターの腕前は……バンドするわけじゃないから上手くならなくてもいいんだけど、できれば喜多さんみたいに指の皮が硬くなるまで練習したいかな。なんとなく弾けると恰好よさそうだし、面白かったら続けてみよう。

一つ問題なのは、後藤さんがギターを弾けることを僕は「知らない」ということだ。

もちろん原作知識で知っているけど、原作知識は秘密にしておきたいからうっかり話さないように気をつけていかないと…。

なるべく早めに聞き出せるといいな。直球で聞くのはまずいから、音楽趣味をそれとなくアピールして後藤さんに興味をもってもら……あ、

そこまで考えたところで、僕は自分の失敗に気が付いた。

そう、音楽趣味アピールをするのに絶好の機会がいつきあつたことに。

(自己紹介の時間終わっちゃったじゃん！ さっき言っておけばよかった……)

頭を抱えたくなるが、周りから変な目で見られそうなので自重しておく。

自己紹介は適当でいいや……なんて軽く流したけどんだ失敗だった。

まあ席は近くだし、友達と雑談していれば耳に入るかな、と自分を慰める。次の機会

は逃さないように頑張ろう。

周りの様子に注意を向けると、そろそろ自己紹介も終わりが近いようだ。他に考えておきたいことがないか、ノートを見ながら考える。

……完璧な計画だと思っていたけど、後藤さんと仲良くなれるかがちよつと不安かな。

始業式・自己紹介と2度もチャンスを逃しているし、ギター以外に話しかけるネタも思いついていない。このままだと1か月で仲良くなれるかは微妙かも。

あまり干渉しすぎて第一話フラグが折れないようにはしたいけれど、STARRYについていくことすらできないってのも困る。

そんなに仲良くななくてもSTARRYについていける口実はないかな……と灰色の脳細胞を働かせて考えた結果、僕はある委員会に立候補することを決めた。

その委員会とは――

ホームルームの時間も終わり、生徒たちがそれぞれ帰路についていた。

速攻で帰宅する者、近くの席の人とおしゃべりする者、周りの様子をうかがいつつ荷物をまとめる者、以前からの友達同士で集まる者……。

色々な生徒がいる中、こんな会話をしているグループがあった。

「いっちー、何かあつたん？」

「え？ 何かつて？」

「いや委員会のこと。中学の時は保健委員だったじゃん」

「そうそう、いっちーが文化祭実行委員に立候補した時びつくりしたよ。居眠りしそうだったのを目、覚めちゃった」

「あー、高校生になったし何か新しいことを始めてみようかと思つてさ。文化祭の時期以外は忙しくなさそうだし……」

——そんな会話を聞きながら、とある桃色の髪をした少女は、誰とも話さず、目を合わせることもなく教室を出ていった。

これから始まる高校生活に、全く希望を持ってないままに。

丸まるぼっち

5月。空は青く透き通るようで、雲一つない。

高校入学から1か月の間に、後藤ひとりとはぼっちちゃん、いっくんと呼び合う仲となり、ギターの腕前もぼっちちゃん指導のもとメキメキ上達、あとは結束バンド形成の時を待つのみとなっていた――

――そうなっていれば良かったのだが。

どんよりと曇った空を見上げながら、畔一保はため息をついた。

実際のところはどうかになっているのか、現状を整理してみよう。

結束バンド（3人体制）形成前にやっておきたいことは3つ。

①ギターを練習してある程度弾けるようになる――Clear!

ギターは始業式の日、ためていたお小遣いを使って買った。

価格は4万円くらい。痛い出費だったものの、あんまり安いのだと見劣りしちゃうかもしれないし……多少は見栄をはっておきたい。

もっと高いものにしようかなって迷ったけれど、さすがにお小遣い前借りとかまでする気にはなれなかった。

練習の成果は、ぼちぼちといったところ。

難関と言われるFコードも弾けるようになったし、コードチェンジなんかもそんなにもたつかないでできるようになった。

曲の演奏となるとなかなか上手くできないが、まあ1か月だし、こんなものかな。

指の皮も硬くなってきたし、対外的にもギター練習してる感は出てると思う。アピールでできる機会があればしておこう。

いずれは青春コンプレックスアニメ「ぼっち・ぎ・ろっく！」OP曲とか弾いてみたいな。とはいえ楽譜はないし、記憶の中のメロディーを譜面にするのも難しい。

でもお試しで音を鳴らしながら歌ってみると結構楽しいので、地道な練習に飽きた時は、モチベ回復も兼ねて演奏している。

目下の悩みは、母親が心配そうな目で見てくることかな……

作詞作曲は別の人だから。グレたいとか、鬱憤ためこんでいたりとかそんなこと思っ
てないよ！

②後藤さんからギターを教わる……Failed!

ギターの練習は順調だけど、後藤さんに教わるのはうまくいっていない。

……というか未だに後藤さんからギターができることを聞き出せていないんだよね。ギターについて話題に出してみても――

<case1>

「この前ギター買って、練習しているんだ」

「えっ、あつ、はい。ギターを……」

「でも練習地味だし、近くにできる人がいなくて大変なんだよね……」

「あつ、そうなんです……」

「……………」

「……………」

「何もいってこない。この流れは失敗かな？」 いずれは一緒に演奏できる人も見つけないなって思っているんだ。いい人が見つかるといいんだけど……」

「一緒……バ……ブツブツ」

（あつ、ぼっちタイム入っちゃった……今日は撤退しよう）

<case2>

「それで、ギターの話なんだけど……。最近Fコード練習しててさ……」

「あつはい……」

「よく言われているだけあって難しく、誰か上手い人に教えてほしいなーと思ってるんだ……ど……?」

(ぐりやあ……)

(え、いつの間にか後藤さん溶けてるし。なんで？ 今の話のどこに地雷があった……?)

——こんな有様である。

ギターの話はもうしない方がいいのかな……?

完膚なきまでに失敗だけど、練習の約束は必須事項つてわけじゃないんだよね。

今は無理せず、喜多さんが約束を取り付けるのを待つてからまた試してみよう。

③後藤さんと友達になる……Clear?

最後に、一番重要な後藤さんとの関係について。これは判断が難しい。

1か月間、色々コミュニケーションをとろうと頑張ってきた。挨拶に始まり、休み時間や朝の時間に話しかけ、友達との会話でギターについて話してみることでそれとなくアピールし……これは失敗だったみたいだけど。

でも「あつ」「うっ」みたいな鳴き声や、単なる相づちっぽい言葉以外のリアクションがろくに引き出せない。

結束バンドのメンバーはなんだかんだ普通につきあえていたから甘く見てたけど、1年ぼっち体質は半端なかった。お願いだから一人の世界に入らないで……

アニメみたいにモノローグが聞こえたりしないかな。そうすれば「後藤さん側からどう思われているのか」が分かるのに……

でもずっと友達いなくて飢えてるわけだし、これだけ話しているなら友達か友達(仮)くらいには思われているかなって予想している。

(……現状としてはこんなところか。気がかりな点はあるけど問題なさそう?)

ネットを出てるSTARRYのライブスケジュールによると、結束バンドがライブをするのは明日だ。

ついに物語が動き出すと思うとわくわくするなあ……

明日の作戦は、なんと少しでも成功させるぞ!

——畔一保がそんなことを考えていた日の夜のこと。

金沢八景のとある一軒家、2Fの部屋、押し入れの中にて。

小さな暗い世界の中で、ギターの悲しげな音色だけが鳴り響いていた……

（――押し入れより愛をこめて。作詞作曲『後藤ひとり』）

即興曲での弾き語り（声は出ていない）を終えた少女・後藤ひとりは、自分の高校生活を振り返って、落ち込んでいた。

（高校生活が始まってはやゝか月、未だに友達といえる相手はゼロ。せつかく県外の高校に通っているのにどんどん黒歴史ができていく……）

そう。一保の予想とは裏腹に、後藤ひとりは一保のことを友達とは思っていないかった。

毎日挨拶や会話をしているし、友達（仮）くらいには思われているはずと高を括っていたが、実際にはクラスメイト（A）くらいの認識である。

もともと、一保の予想がまったく的外れだったと言いつい切れない。後藤ひとりにとっては「よく話すクラスメイト」ですら人生初の存在であるし、とある思い込みがなければ友達認定していたかもしれない。

その思い込みというのは――

（畔くんは陽キャ。自分とは違う存在……話しかけてくるのは、近くに浮いているクラスメイトがいるから気をつかって話しかけているだけ……）

——畔一保が陽キャであるというものだった。

後藤ひとりとは、家族以外の他人と関わることを苦手としている。

その中でも陽キャなど、自分の陰キャっぷりを自覚させられてしまう相手は特に苦手であり、相手との間に心理的な壁を作り出してしまふ。

そういったタイプの人が後藤ひとりの友達になるためには、多少なりとも強引に距離をつめ、心の壁をぶち壊す必要がある。

もちろんただ強引に迫ればいいというわけではないが、距離感がつかめず、手探りでのお話を繰り返すばかりでは、到底仲良くなることはできない。「あまり仲良くなりすぎて行動が変わるといけないから気をつけよう」などと一歩引いた立場で接していれば尚更だ。

逆に、苦手とするタイプ以外であれば、仲良くなれるハードルはだいぶ下がる。

同類（陰キャ）認定、友達がいらない、目をあわせられないなどの要素があれば、（後藤ひとりにとつては）親近感がぐぐーんと増すことだろう。

本来ならば、畔一保はこちら側に属する。

しかしながら、とある行動がそれを阻んでしまった。

その行動とは——文化祭実行委員に志願したことである。

陰キャにとってイベントの実行委員というのは苦行である。

イベントの実行委員に陰キヤが紛れ込んだ場合を想像してみよう。周りはイベントを盛り上げようと、意気揚々・元氣澆刺とした陽キヤばかり。「何か盛り上がりそうなアイデアある人々？」などの質問がきても、陰キヤに氣の利いたことを答えることはできない。

何も発言せず疎外感を味わうか、突飛なことを言つて場を白けさせ”企画会議を盛り下げた賞で死刑”となるか……いずれにせよ地獄でしかない。(注：個人の感想です)

実行委員という処刑台に進んで上がる人は、間違いなく陰キヤではない。畔一保は実行委員に立候補した結果、自分と違あつう存在陽キヤ……と後藤ひとりに思われ、壁をつくられてしまった。

そして、陽キヤ認定されたことがさらなるすれ違いを招いた。

陽キヤ(本当は違うが)がギターを始め、一緒に演奏する人を見つけないといった時、ひとりが想像したことは――

(……きつと畔くんはそのうちバンドメンバー集めて、文化祭でライブする気なんだ……。実行委員として、文化祭を盛り上げることに貢献して、拍手喝采をあびて人気者に……うらやましい……こういう人が青春ソングとか世に出すんだらうな……私だってライブしたいのに……同じクラスにライブがいるなんて……)

――憧れのバンドを組み、文化祭でライブをして喝采をあびるクラスメイトの姿で

あった。

青春コンプレックス輝かしい青春を体現したものの劣等感・渴望・衝動など発動待ったなしである。バンドに自分が加わるイメージが持てないのが悲しい性か…。

今ではギターの話になるとまともに聞くこともなく、一人の世界に引きこもる有様である。

閑話休題。

学校生活のことを考えてぐずぐずと溶けていた後藤ひとりだったが、しばらくすると「ぐへへ…。うへへ…。」などと笑い始めた。

(…………でもギター始めたばかりなら腕は私の方が全然上だよ…。 ネットでも評判いいし……ギター勝負したらみんなあつと驚くだろうなあ……)

後藤ひとりの脳内では、文化祭ライブで畔一穂のバンドが場を盛り上げたあと、次に登場した自分の演奏で観客が総立ちになり、拍手喝采と、ひとりコールが鳴り響く——なんて光景が繰り広げられていた。

ひとしきり妄想を楽しんだあと、いい気になったひとりはギターを手に取って弾き始めた、

先程とは打って変わり、気分良さそうな音色が鳴り響く。

そうだ、ギターヒーロー名義の動画アップしなきゃ——とパソコンを操作するひとりの頭には、ギターを弾くクラスメイトのことなど、もはや残ってはいなかった。

ギターは大事。外見も大事

朝8時。

いつもはもうちよつと遅くに登校するのだが、どうにも落ち着かなくて早めに来てしまった。

今日は、ギターを持ってきている。

音楽アピールのため……というのも1つの理由だが、万が一、後藤さんがギターを持つてこなかった時に備える意味もある。

ギターは伊地知さんとの縁を繋ぐ、大切なアイテムだからな。大事にしないと。

まだ来ないかな……と教室の入口に視線をやるものの、後藤さんの気配はない。

ギリギリまで来ないことの方が多くから、まあこれで普通なだけけど。

でも、話しかけられ待ちするなら、早めに登校した方がチャンスが増えるよね……。そこまで考えてないとか？

そんなことを考えながら後藤さんを待つているうちに、友達も登校してきた。

普段はゲームやアニメの話がメインだけど、僕がギターを持ってきたから、今日は

そつちの話題が中心になっている。

話しながら入口の方を見ているけど、後藤さんは姿を見せない。じりじりと時間だけが過ぎていく。

(まだ来ないのかな？ この分だと朝は話す時間が——お、)

始業5分前になるうかというところで、ようやく主人公後藤さんの登場だ。

いつものジャージ姿ではなく、バンド女子(?)の格好をしている。よしっ。

内心ほっとしながら後藤さんを見ていたけれど……教室の中に入ってこないな。

様子も明らかにおかしい。入口で石像のように固まっているし、なんか青ざめるといふか、顔が崩れかけている。

(何かアニメと違うな……? いったいどうして……こつちを見るような——)

と、そこまで考えたところで気がついた。

後藤さんの視線の先にあるのは、僕のギターだ。

Q. 人気者になろうとギターを持ってきたら、他の人が既にギターを持ってきていて、ちやほやされています。どうすればいいですか? (神奈川県Gさん)

A. 先を越されちゃったね。諦めよう! (ギタ男先生)

「——今の僕の状態って、後藤さんのプランそのものじゃん!？」

ヤバイヤバイ……! このままでは後藤さんが、放課後になる前に灰になってしまう。急いで軌道修正しないと。でもどうしたら……)

必死に打開策を考えていると、肩を小突かれて我に返った。

友達に「ほら、行つてこいよ」「良かったな、頑張れ」などと言われながら、後藤さんの方に押しやられる……

何の話をしてるんだ? お前らとしやべっている場合じゃないから助かるけど……

まあ今は気にしないでいいか。

(対処法はまだ浮かばないけど、とりあえず後藤さんを椅子に座らせようかな。このままじゃ倒れそうだし……)

~~~~~

(終わった。私の高校生活……)

私、後藤ひとりとは迫りくる魔王群くんを見ながら、自分の拙い計画が崩れていくのを感じていた。

(まさか畔くんと行動が被つてしまうなんて……。2番煎じ……後追い……所詮、陰

キヤは陽キヤの影に生きる運命……)

学校にギターを持ってきたら、みんなが話しかけてくれて、バンドに誘われて、文化祭ライブをしてちやほやされる…?

今にして思えば、なんて穴だらけの計画だろう——明るい陽キヤなギタリストと、根暗でコミュ障な自分。バンドを組むとき、どっちを選ぶかなんて分かりきっている。

(あつ腕を掴まれた…。これでもう逃げられない……)

腕を引かれて教室の中へ。促されるまま席に座る。

畔くんも自分の椅子を持ってきて近くに座った。これは長話(※ひとり基準)をするときのパターンだ…。

もう家に帰りたい。注目を奪おうとしてすみません…:お願いだから解放してください……

(あつ、お金払ったら帰してくるかな…? みかじめ料…:財布の中身で足りなかつたら……)

「ギター持ってたんだね。もしかして、結構前からやってたりする?」

「あつ……えっ?」

財布を渡して見逃してもらおうとしたら、なんかギター歴を聞かれた。

……:これはどういう意味だろう?

畔くんより長くやっていないことは知られない方がいいよね…。よし、誤魔化そう。

「いつ、いやこれついこの間——」

「指の皮が硬くなっているし、前から何かしてるんじゃないかなって、思っていたんだ。ギターやってたんじゃないの？」

「——あつ……さんねんくらいです」

誤魔化そうとしたけど、失敗…。

な、生意気だつて思われたよね。どうしよう、ギター没収とか——

「3年もやってるんだ！ ギター似合ってるよ。格好いい！」

——えへ、なんかほめてくれた。あれ？ もしかして思っていたよりいい人？

あ、ギターやグッズのおかげでイケ女子に見えたりするのかな。もしかしてこのま  
ま一緒にバンドやろう！ とか誘われちゃったり……

「良かったら、今度ギターのコツとか教えてくれないかな？」

「えへへ…わかりました……。えつ？ あつ、その……」

「じゃあそろそろ先生がくるから。また後でね」

「あつ、はい……」

……はしないか。なんか勢いに任せて、変な約束をしちゃった気がする…。でも「ギターを持ってきて話しかけてもらおう作戦」すごい！ さつそく一人話しかけてくれたし、今日中にはクラス全員と話せていてもおかしくない——

——なんて思っていたのがフラグだったのか。

朝のひと時以外、誰にも話しかけられることはなく……帰りのHRの時間を迎え、私は机に突っ伏したのだった。

くくくく

寝たふり……もしくは意気消沈か。

机に伏せた後藤さんを視界の端でとらえつつ、友達との会話で時間をつぶす。

(正直、だんだん元気を失っていく後藤さんを見るのは胸が痛んだけど……必要な犠牲だから、うん)

とりあえず、これで軌道修正はできたと見ていいかな…？

あとは公園に行くのを見届けるのみ。

もし行かないようであれば誘導する必要があるから、気づかれないように尾行しよ

う。ピンクのジャージは目立つし、見失う心配はあまりないだろう。

しばらくたって、ノロノロと動き始めた後藤さんにあわせて、教室を出た。

校舎を出たところから尾行を始めているが……どうやら介入の必要はなさそうだ。

アニメの絵を参考にして、行き先候補となる公園を事前に調べておいたのだが、ふらふらとまっすぐそちらの方向に歩いている。

公園に入ったのを見届け、近くの自販機でコーラを購入する。

……女の子が走っていくな。母親も一緒だし、そろそろいいタイミングかもしれない。  
い。

公園の入口からそつと中の様子をうかがうと、

(……いた。後藤さんだ。視線は仲良し家族の方に向いてるな)

仲良し家族を見て、シヨックを受けている後藤さんがいた。

今なら気づかれずに、後藤さんの近くまで行けるだろう。

親子連れが立ち去った後、いよいよ正念場だ——と気を引き締め、後藤さんの背後で  
タイミングをうかがう。

狙いは、後藤さんがスマホを取り出し“ギターヒーローの動画を見る”時。まだ……



まだ………今、

「後藤さん、何してるの?」

「あつ、ぴえっ!」

突然話しかけられたことで、ブランコがガシャンと音をたて、スマホが地面に落ちる。一瞬だったけど、後藤さんの体が細くなったように見えた。

「大丈夫? 驚かせてごめんね」といいながら、スマホを拾って渡す。ちらりと画面を確認すると、ギターヒーローの動画が見えた——これで、後藤さんと”ギターヒーロー”を結びつける根拠が一つできたな。

今後の布石を打っておけたことに満足するが、今日の本題はそちらではない。

驚かせたお詫びとして、さっき買ったコーラを渡しつつ、会話の糸口を探る。伊地知さんがくるまで場を持たせないと……

「ごめんね、突然話しかけて……」

「あつ、いえ……。そつそれでなにか……?」

「うん。学校で”また後で話したい”って言ったじゃん?」

「あつ、うう……」

目ぞらしモード  
いつも通りな後藤さんと話していたら、なぜか涙目になりながら財布を差し出してきた。

……なんで？

「えつと……。これは何？」

「どっ、どうかお納めください……」

「ジューズ代はいらないよ？ ただのお詫びだからね、気にしないで」

「えっ、あっはい……」

相変わらず行動が謎すぎる……。モノログが見れる機能はまだですか？ 今すぐ実装して下さい。

というか後藤さん、震えながら財布を握りしめていないで、早くしまってくださいな。なんかこの絵面イジメみたい——

「あっ！ ギター——！！ ……つてなにこれ。カツアゲ？」

あっこれやばいやつ……

お代は2000円になります

「……ってなにこれ。カツアゲ？」

あたし、伊地知虹夏。 下北沢高校の2年生。

今日は結束バンドのデビューライブをするはずだったんだけど、急にギターの子から「バンド辞めます。本当にごめんさい」なんてロインが送られてきて、音信不通になっちゃったの。

それで急遽、サポートギターをしてくれる人……あわよくば逃げたギターの子が見つからないかと思って、秀華高の近くに来たあたしは、とんでもない場面に出くわしてしまった。

ひとけ  
人気のない公園。

涙目で財布を差し出す女の子と、それを見下ろす男の子。

どちらもギターケースを持っているから、一見すると軽音部かバンド仲間かな？ っ  
て思うけど……2人の間の空気は重苦しい。友達っぽく見えない。

ギターは気になるけど、それは後回し。まずは真相を確かめないと。

「——つて勢いで失礼なこと言っちゃってごめんね。2人はどういう関係なの?」

「友達です、友達! すみませんこれカツアゲとかじゃなくて、財布はそう、コーラ代を払おうとしただけだと思います。な、後藤さん?」

「えっ……。あつはい、カツアゲじゃないです」

「……そうなんだー。お邪魔だったかな?」

「いえ全然、そんなことないです」

「あつ、いえ……」

う、嘘くせえ〜!

露骨に「やばいところ見られた」つて顔に出てるよコレ。後藤さん(?)は返事が弱  
弱しいし、何か怯えている様子で俯いているし。

……うん、これはもう決まりかな。後藤さんを助け出して、あとなんとかサポートギ  
ターをお願いできないか聞いてみよう。

あたしが方針を固め、後藤さんを連れ出すべく口を開こうとした時——推群定一イジメ保男  
が先に話し始めた。

~~~~~

(やばいコレこのままだと置いていかれる)

気まずい沈黙の中、僕はそう予感した。

伊地知さん、一応笑顔ではいるんだけど……なんか作り笑顔っぽい感じが出ている。アニメで見た時は、もっと屈託のない、明るい笑顔だったのに。

誤解もとけていなさそうだし、このままだと「あたし後藤さんに頼み事があって、ちよつと席を外してくれない？」ってルートになっちゃう。

(会話は流れに任せるだけじゃなくて、自分の望む流れに誘導していくもの……ここはとにかく、主導権を伊地知さんに渡さないようにしないと)

僕が知る限り最もコミユ力の高い人の教えを参考に、作戦を練る。

伊地知さんから発言させたらまずい。こちらから話を振っていこう。

「ところで、ギター」って叫んでいたけど、ギターを探していたの？」

「あ……うん、そうなんだ。それであたし、そっちの子に——」

「そうなんだ！　ギターを探しているの？　それともギタリストの方？」

「え、えつと……。サポートギターをしてくれる子を探していてね。2人とも、腕前の方はどうか？」

「僕は初心者だけど、後藤さんは3年くらいやってるみたいですよ」

「ぴえっ!? いやあのそれは……」

後藤さんのギター歴を明かすと、伊地知さんの顔がぱつと明るくなった。かわいい。

後藤さんが突然鳴き声をあげたが、よくあることだ。

そのまま伊地知さんは、「そうなんだ! よかった〜!」と言いながら、ブランコを囲む柵を乗り越え、後藤さんに駆け寄る。

あ、手を握ってそのまま立ち上がらせた。いい光景だ。感動的だな。だが――

「あたし、下北沢高校2年で伊地知虹夏いじちにじかっていうの。後藤さんってフルネームはなんて言うの?」

「あつえつうっ……」

「? ごめん、うまく聞き取れなくて……どうしたの?」

――無意味だ。

なにせ相手は後藤重度のコミュ障ひとり。こんないきなり迫られて対応できるはずがない。

まあ自己紹介くらいはできるかと思っただけで、流れとしては問題ないな。

「後藤さんは引つ込み思案で、時々ひとりの世界に引きこもっちゃうんですよ。フルネームは後藤ひとりです」

「そ、そうなんだ…。あのね、ひとりちゃん! 実はあたしとても困ってます。今日ラ

ライブの予定だったんだけど、ギターの子が突然やめちゃったの。それで、ひとりちゃんにサポートギターをお願いしたいんだけど、どうかな!？」

「あつ……ライブ……? あつ……えつ……?」

順調に後藤さんが振り落とされているな。

伊地知さんは目をつむっているから気づいていないけれど、後藤さんの顔はもう崩壊寸前になっている。学校での様子から、これだけ詰め込めばキャパオーバーになるのは分かっていてた。

——よし、ここで仕上げといこう。

「後藤さんがギターをするなら、僕もついていっていいですか? 後藤さんのギター

を聞いてみたいですし、様子も心配なんで……」

「えっ!? ……うーんと、チケット代とかで2000円かかるんだけど、大丈夫?」

「大丈夫です。……後藤さんはしばらく戻ってこなさそうですし、行きますか?」

「……うん。時間も押しているし、もう行かないとね」

ミッシェンコンプリート。よくやった自分。

伊地知さんとは距離を感じるけど、とりあえず一緒に行く流れにはできた。2000円は痛いかもしれない。必要経費ってやつだ。

伊地知さんが後藤さんの手を引きつつ、歩き出す。後藤さんはまだトリップ中。僕は2人の後ろからついていく。

……未だに名前も聞かれてないな。道中で距離を縮められるといいんだけど。

~~~~~

時は過ぎ、STARRYのある下北沢駅についた。

道中、ようやく名前を聞かれたり——行き先のライブハウスのことを聞いたり（知っているけど）——なかなか戻ってこない後藤さんを復活させる手はないか聞かれたり（唐揚げって効くのかな？ 分からん）——と色々あったが、そこそこ話したこともあって、少しは距離が縮まってきたと思う。たぶん。

（……さっきから伊地知さん、こっちの方を見ないな）

まあ後藤さんがようやく現世に戻ってきたことだし、伊地知さんとしては後藤さんとお話して、距離を縮めたいのだろう。

こちらとしては、原作コンビの交流を見れて満足だけれど……このまま微妙な関係だと、楽屋入りできるか心配になる。

「ひとりちゃんは下北沢に来たことある？」



「あついえ…。初めてで……」

「そつかく。いいところだよ、カフェとかライブハウスとか、色々あつてね」

「あつはい……」

アニメよりちよつとだけ、後藤さんが声を出せているような……？

マンガよりの世界なのか。もしくは1か月間、僕と話してきてコミュニケーションがったのか。

「さつき畔くんにも話したんだけど、今日行くライブハウスはSTARRYっていつてね」

「あつはい」

「最近オープンしたんだけど、うちのおねえちゃんが店長しててね」

「あつはい」

「……だから気楽な感じで大丈夫だよー！ 緊張しないで！」

「あつはい……」

コミュニケーションあるのかと思っただけ、気のせいだったか。後藤さんが「あつはい」しか言わないから、会話が盛り上がらない……。

あ、伊地知さんがこつちを見た。ちよつと困っているのが見て取れる。うんうん、後藤さんとの会話って苦勞するよね……。

伊地知さんの視線がそれたのをいいことに、後藤さんが伊地知さんの匂いを嗅いでいる。

実際いい香りがするし、嗅ぎたくなるのは分からなくもないけど……気づかれたらドン引き案件だね。ちようにどいいしフォローするか。

「伊地知さんはなんの楽器をやっているんですか?」

「私はドラムだよ。畔くんはギター初心者なんだよね? どれくらい練習してるの?」

「1か月くらいですね。最近ようやく曲が弾けるようになったような……なっていないよな?」

「あははっ。まあ1か月で曲が弾けてるなら十分じゃないかな。バンド組んだりはないの?」

「うーん、検討中です」

少し伊地知さんの明るさが戻ってきた。頑張れ、後藤さんのオーラに飲まれちゃダメだ。

ここで伊地知さんは、鼻息が荒くなつた後藤さんに気がついたようで「ごめん、歩ペース早かった?」と、振り向いていた。

——そのまましばらく伊地知さんが話し続け、そろそろライブハウスにたどり着くかという時。

後藤さんの発言が、空気を凍らせる。

「私は武道館をも埋めた女……」

「えっ!？」

「いついや、なんでもないです……」

「そ、そう……」

——それから誰も口を開くことはなく、

僕たち3人は、ライブハウスの入り口にたどり着いた。

## ぼっちが安住の地を得た日

「ついた！ この下だよ」と言いながら、虹夏ちゃんが階段を下りていく。

ずっと握られていた手が離されるのを感じ、安心と不安が一拳に押し寄せてきた。

（手を離れたのって、階段だし危ないからだよな？ でも気持ち悪いって思われていたら…。さつき変な発言をして空気を凍らせちゃったし、ずっと手を握られていたから変な汗が出てるし。

やっぱり頼む相手間違えたって思ってるのかな。畔くんも一緒だし、あっちの方が良かったって思ってるかも……）

あ、でも数段下りたところで虹夏ちゃんが振り返って、私のことを呼んでくれた。階段の下の方は魔境にしか見えないけど……虹夏ちゃんと一緒なら入れると思う。

階段を下りると、左の壁にライブの告知やフライヤーが貼ってあった。これが生のライブハウス……！

虹夏ちゃんに続いてドアをくぐると、そこには居心地の良い空間が広がっていた。

（暗い………圧迫感………私<sup>押し入れ</sup>の部屋と同じ………）

あ、また虹夏ちゃんが手を握ってくれた。よかった、気持ち悪いって思われたわけじゃなかった。

繋いだ手から伝わる体温が、くすぐったくて、落ち着かなくて……でも心地よい。

「落ち着く……」と声を漏らすと、虹夏ちゃんから不思議そうな目で見られてしまった。危ない危ない、また変な発言をして、虹夏ちゃんを困らせないようにしないと……

(みんな根暗そう……。バンドって怖そうなイメージあるけど、所詮は影の女、陰キヤの集まり……あ、でも虹夏ちゃんは違うか。明るくてかわいいし、優しいし、学校の人気者って感じ……でも大半は私の同類だよね)

虹夏ちゃんが色々説明してくれるのを聞きながらそんなことを考えていると、スタッフさんの1人が挨拶してきた。

ピアスゴリゴリ、服装もオシャレで、ダウンナーな感じだけどイケイケな大人の女性……私の同類だなんてとんでもない。うう……

~~~~~

後藤さんが「い、イキってすみません……」なんて言いながら、伊地知さんの背中に隠れてしまった。

伊地知さんが「急にどうしたの!? だいじょうぶ?」と驚きながら、後藤さんを落着かせようとしている。

僕は原作知識があるから状況がわかるけど、そうでないと意味不明だよね。

(でもなんか、後藤さんと伊地知さんの距離が原作より近い気がする…。庇護欲がわいてるのかな?)

仲良くなれているのは結構だけど、頼むからこつちのことも忘れないでくれ…。

いや忘れられていた方がいいのか? そのままフラフラと背後霊のようについていけば楽屋に潜入……いや無理だな。だって2人だけならともかく——

「やつときた」

——もう1人いるわけだし。

山田リヨウ。結束バンドのベース担当。

性格はマイペースなクズ、唯我独尊の極み。後輩に金をたかり、金がなければその辺の草を食み、嘘や仮病はお手のもの。

音楽に関しては真摯で実力もあるが、友達にはなりたくないタイプだ。顔がいいので、学校では人気があるようだけれど……

伊地知さんが、後藤さんや僕のことを(忘れられてなかった)紹介するのを聞きなが

ら、そんなことを考えていたが……なんか山田さんに見られている気がする。

いや、無表情だし分かりにくいけどなんか観察されているような……気のせいだよな？　ここで見るべきは後藤さんの方だろうし。

後藤さんはすっかり伊地知さんの背中に居ついたようで、体半分くらいを出しながら「ご、後藤ひとりです。よろしくお願ひします……」と名乗っている。

初手謝罪するんじゃないかな？　そんなにそこ安心するのか……。

山田さんは伊地知さんに変人呼ばわりされて、嬉しそうな反応をしていた。

「店長が時間まで練習しとけて。あと虹夏が勝手にライブハウス抜け出したこと、怒りながら買い出しに行った」

「ひい、嘘?!　帰ってくる前にスタジオに行こう!」

あ、ついにこの時がきたか。

よし、このまま着いていって――

「あ、畔くんはその辺でゆっくりしてて。そのうち他のお客さんもくるから――いけないか。やっぱり。」

流れとしては予想していた。

そもそも原作では、自分の友達をスタジオに入れたりはしていないのだ。(描かれて

いないだけかもしれないが)

後藤さんの友達——下手をすると友達ではない——も入れることはないだろう。もし後藤さんが僕にべったりとかなら、入れてくれるかもしれないが……後藤さんはどう見ても、伊地知さんの方に懐いている。

(公園でのファーストコミュニケーション失敗が痛すぎる。後藤さんの好感度も思っただより稼げていなかったし、伊地知さんが手を繋いだままだから、交流をアピールすることもできなかった……)

本来想定していた流れとしては、後藤さん+僕のペアを作った状態で、伊地知さんに着いていくつもりだった。会話や後藤さんの奇行のフォロウをすることで、後藤さんのお世話係”として印象付ける狙いである。

しかし、実際には伊地知さん+後藤さんでペアができてしまい、僕はおまけのような立ち位置になってしまった。これでは狙い通りになるはずがない。

(状況は悪いけど……手札がないわけでもない。伊地知さんの疑念も、後藤さんの奇行を見て少し薄れているはず)

ここは正面から頼み込む!

今日何度目か、意を決して——僕は口を開いた。

「あの、すみません」

「うん？ どうしたの？」

「いえその、僕もスタジオに入れてもらえないでしょうか？」

「ええっ!？」

伊地知さんが大声を上げたため、周りの視線が集中する。

「あ、すみません」と伊地知さんが頭を下げたあと、申し訳なさそうな表情でこちらを見てきた。

「あのね……これから音合わせや、本番でやる曲のリハとかするから、なるべく3人で練習したいの。ごめんね、外で待つてくれないかな？」

「すみません……。でも僕、文化祭の実行委員をやつてて、演奏前の準備や機材とかにも興味があるんです！ 後藤さんのギターも近くで聞いてみたいですし、お願いできませんか？」

「うーん、でもなあ……」

「1曲分、1曲だけでもいいので！」

頭を下げて頼み込むが、伊地知さんとしては断りたいのだろう。煮え切らない態度だ。

やっぱり厳しかっただろうか——と諦めかけたところで、思わぬ援護射撃が入った。

「別にいいんじゃない？」

「え、リヨウ!？」

「彼、ギター持つてるみたいだし、1曲くらいなら聞かせてあげてもいいと思うけど」
……山田先輩！

クスだなんて思つてすみませんでした。どうかそのまま説得してください！

「うっ…。ひとりちゃんはどう？」

「あっはい、別にいいです……」

「……はあく。分かったよ。1曲だけね」

最後にイエスマン後藤の後押しもあり、伊地知さんはついに陥落した。

や、やったぜ……！

~~~~~

(よく分からんやつだな……)

あたし、伊地知虹夏は謎群の人物んを見ながら、そう考えていた。

(はじめはとんだクス男かと思つたけど、話してみた感じだとまともに見える……で

もリヨウも外面はまともだしなー。それを考えるといまいち……時々、強引なところを感じるし）

ひとりちゃんとの関係にしたって、友達と言ってる割に、そんなに仲良く見えない。異性だからつてもあるだろうけど、それにしたって距離感遠くないかな？

（まあひとりちゃんもエキセントリックな性格みたいだし、何かの拍子にあのカツアゲ現場？ が生まれたのかもしれないけど……）

——やっぱりどうにも信用できないかな。

おのれリヨウめ……とジト目を向けてみるが、本人はいたって通常運転、どこ吹く風だ。

……まあ考えるのはこのくらいにしておこう。

いよいよひとりちゃんとの初演奏なんだし、こんな気持ちでやるのはもつたいない。

（3年間もやってるんだよね。リヨウもうまいし、もしかしたら私が一番下手だったり……？ いやそれならそれで、上手な人と演奏できるチャンスってことだし、ポジティブにしよう！）

——このあと、まさかのド下手つぶりに驚愕することになるとは予想もせず、

あたしは演奏を始めるのだった。

## 三歩進んで、二歩下がる

「ド下手だ……」

「えうっ」

伊地知虹夏天使の無慈悲な一撃により、後藤妖怪ひとり退治された。

なんか依存しかけてたっぽいし、余計にダメージは深かっただろう。南無……

「ああごめんね、つい本音が……じゃなくて、あの、独特なセンスが光ってるっていか……その、えつとね、ごめん！」

「虹夏、フォローあきらめたね」

「あつうう……ミジンコ……」

床に倒れた後藤さんが、ミジンコのようなポーズをとった。

これがプランクトン後藤……ついに生で見れたかと思うと感動的だなー。

伊地知さんが慰めようと近づくと、後藤さんはびくつと震えて逃げ出してしまった。

「えっ……？」と伊地知さんがショックを受けたような顔をしている。さっきまであんなに懐かっていたのにね。でもそれが後藤さんなんだ……

（学校で仲良くなるうと褒めてみた時なんか、しばらくすると元の態度に戻るんだ

よなあ……)

褒めるとバターののように柔らかくなり、厳しくするとガラス細工のごとく砕け散る。おだてれば警戒心皆無の生き物になり、我に返ればまたオドオドしはじめる。

猫のように気まぐれなんて言うが、後藤さんは猫よりよっぽど扱いが難しい。まあそれに適応できるのが《結束バンド》のだけけれど。

シヨックで固まっていた伊地知さんだったが、しばらくすると我に返り、スタジオの外に飛び出していく。

追って外に出て、ホールを見渡してみるもの……見慣れたピンク色はどこにもない。

「どうしよう……。ひとりちゃん帰っちゃったかな。あたしのせいで……」

「落ち着いてください。たぶん帰ってはいないかと」

「えっ本当？ ……どこにいるのか分かる？」

ちよつと泣きそうな声で聞かれる。

まあ僕の助けがなくてもそのうち見つけられるのだろうけれど、ポイント稼ぎのチャンスを逃す手はない。

「あの扉の向こうにいると思います」

「あの扉って……楽屋のこと？」

「はっ」

原作知識の通りになるなら、ステージ横の楽屋に、後藤さんがいるはずだ。

そして楽屋——正確にはそのゴミ箱の中——にて、後藤さんは発見された。

「本当にいた！」と伊地知さんが驚いている。エスパームみたいなものだし、そうなるのも分かる。まあ、あんな自信満々に断言して外れていたらすごくカッコ悪いので、いてくれて助かった。

どうして分かったの、なんて聞かれたらどうしようかな？

まあ勘つてことにしておけばいいだろう。実際は“知っていた”というだけだが。

「ひとりちゃんお願い！ 今日は大変なライブなの。箱から出てきて！」

「あつうっ……ムリ、ムリです……」

「だいじょうぶ、だいじょうぶだから。即席バンドだししょうがないって。あたしだつてそんなに上手くないし」

「私はうまい」

「うう……」

伊地知さんが箱から出てくるように懇願しているが、後藤さんは箱の中で震えるまま

だ。

さらには「え、MCでもお役に立てないので……ハ、ハラキリショーでもしましょうか、あはは……」などと言って笑っている。奇行レベル上がってきたな。

伊地知さんと山田さんの頑張りを眺めていたら、伊地知さんが助けを求めてきた。

「畔くんもお願い！ ひとりちゃんを元気づけるの、手伝ってくれないかな？ ……

あ、コンビニで唐揚げ買ってくればいい？ さつき話してたよね」

「あーそれはですね……。効くかどうか分かりませんが、効いたとしても、ライブに出る勇気がつくわけではないかと……」

「そっか……。なんかいい手はないかな？」

「うーん……」

唐揚げはアニオリだし、本当に効くのか分からないんだよな……。事前に試しておけばよかった。

継るような目で見られても、これといってアイデアは浮かばない……。というか「ぼっち・ぎ・ろっく！」のファンとして、重要な局面は原作メンバーで乗り越えてほしいんだよね。

……まあ、多少手を貸すくらいならいいか。自分の立ち位置を作りたいたら、引つかき回している責任もあるし。



ゴミ箱に近づき、「後藤さん」と声をかける。ここでかけるべき言葉は……

「ねえ後藤さん、伊地知さんに無理やり連れてこられて、迷惑だった？」

「い、いや！ そんなことないです……。バンドはずつと組みたくて、でもメンバーを集めるのも……。誘ってもらうのも勇気が持てなくて……」

うん……。誘ってほしいアピールとかくるかなと思つて、対処法を考えていたのに全然なかつたね。

伊地知さん、流れ弾で「うぐつ」となっている場合じゃないよ、頑張つて。

「ふだんはカバー曲をネットに上げたり……」

「普段は何弾くの？」

「あつ、誘われたときにすぐ弾けるようになって、売れ線バンドの曲はだいたい……」

「え、すごつ」

……もう大丈夫だろう。

一歩下がつて、輪から外れる。ギターヒーローの話題になり——後藤さんが立ち上がり——完熟マンゴーが生まれるまで。僕は気配を消して、3人の様子を堪能していた。

——空気壊れるからできなかつたけど、写真撮りたかつたな。

くくくく

「それあだ名じゃなくない!? ……あれっ、畔くんは?」

ひとりちゃんとの会話に夢中になっていて気がつかなかったけれど、さつきから全然会話に加わってない。

横を見てもいない、後ろ——いた。なんで壁際まで下がってるの?

畔くんにひとりちゃん呼び名について聞いてみるも、後藤さんとか呼ばれてないらしい。それどころか、畔くん以外に話しかける人はほぼ皆無だとか。何それ……涙が出てきそう。

「ひとりぼっち……ぼっちちゃんは?」

「おま、デリケートなところを」

「ぼぼぼ、ぼっちです!」

「喜んでるし……」

涙が出てきた…。

ともあれひとりちゃん改めぼっちちゃんが、ライブに出てくれる気になって一安心

……なんていうほっこりした気分は、ぼっちちゃんの質問で打ち砕かれた。

「あつあの、バンド名って……？」

「うっ」

「結束バンドだよ」

結束バンド——リヨウはシャレた名前だつて気に入っているみたいだけど、シャレはシャレでもダジャレの方だし、絶対センスおかしいから！ 変人めえ…。

（友達にバンド名聞かれた時も、え……？ みたいな反応されたし、そのあと面白い名前だねーなんて気をつかわれて……絶対変えてやる。そうだぼっちちゃんや畔くんはどう思つて——）

ぼっちちゃんはリヨウに、「いい名前だよね」なんて聞かれて頷いている。畔くんは……いい名前だなーなんて思つていそうな顔をしている。

なんで!？ まともなセンスを持つてるのはあたしだけなの？

（まさかあたしのセンスがずれて……いやそれはない。友達みんな微妙な反応だし）  
この変人どもめ……と睨むが、全く効果がない。

なんか疲れたな。ライブ前なのに……って、

（時間は？ あ、もう練習する時間はないな……。そろそろ準備しないと）

リヨウとぼっちちゃんにも声をかけ、準備にとりかかる。

あとは畔くんだけ……

(やっぱり謝った方がいいよね。色々……)

公園で、畔くんが財布を差し出されていた光景を思い出す。

普通ならあんなの、カツアゲかイジメにしか見えないけど……ぼっちちゃんの性格がわかるにつれ、誤解がとけてきた。

最初は、ただの気弱な女の子だと思っていて、

武道館をも埋めた——なんて言っているところで、違和感を覚え、

そしてハラキリショーだの言いだしたのを見て、確信した。

(ぼっちちゃん、だいぶやばい子だね。財布を差し出していたのも、なんか変な妄想をした結果なんだろうな……)

ちよつと2人の距離感が遠く見えるのも、しょうがないことかもしれない。

思えば最初から誤解だつて言っていたわけで……。それなのに、

(あたしちよつと冷たい態度だったし、それでいてバッチリお世話になつて……。ライブの出来もちよつとアレな感じになりそう。これじゃあ今日のこと、嫌な思い出として残つちやうかも。それは嫌だな……。なんかお詫びとお礼しなくちゃ、でもどうすれば……?)

ライブ前に考え事とかしてる場合じゃないのに——と思いつながらも頭を悩ませていると、リヨウと畔くんの会話が聞こえてきた。

「じゃあ僕は、客席の方に行きますね」

「ん、応援よろしく」

「任せてください。あ、チケットまだ買ってないんですけど……」

「それなら受付にいつて、当日券一枚・結束バンドつて言えば大丈夫」

「分かりました。それじゃ、頑張つてくださいいね」

——チケット代！ それだ！

あわてて「待つて！」と言いながら、扉を開けようとしている畔くんに駆け寄つて、腕をつかんで引きとめた。

「え、伊地知さ——!?!」

「あのね、やっぱりチケット代は、関係者つてことでただでいいよ。色々迷惑をかけたし、助けてもらつたし……」

「え……? いいんですか?」

「うん！ そのかわり、次のライブも来てくれると嬉しいな」

「……! もちろんです!」

良かった。これで肩の荷が下りた。

……なんか畔くん顔が赤いような？ この部屋暑かったのかな？

「もしスタツフさんに声をかけられたら、あたしの名前出していいから。あ、ロインも交換しない？」

「あ、ありがとうございます。よろしくお願いします」

「よろしくね。ぼっちちゃんも——」

畔くんとロインを交換して、ぼっちちゃんとも……と振り向いたら、完熟マンゴーがしなびていた。ダンボールなのに。

「ぼっちちゃんどうしたの?! 頑張つて——！」

「あつうつ……眩しすぎる……」

「今、次のライブの約束したばかりなんだよ。気合い入れて、ね——」

「つ、次……」

あ、ちよつと復活してきた。

畔くんはちよつと心配そうにしていたけど、時間も迫ってきてるし、客席の方に行つてもらおう。リヨウは何して——スマホ？

「リヨウ、何してるの?」

「店長に報告」

「ひいつ。チケット代のことばらしてないよね?」

「してない。ほら、準備するんでしょ」

ぐ、どういいう報告をしたのか問い詰めたけれど、確かに今は準備しなきゃ。

ライブ頑張ろう。これが、夢を叶える第一歩なんだから——

~~~~~

客席側に戻った僕は、結束バンドの3人が、機材のセッティングをしているのを見ていた——叫びそうになるのを抑えながら。

（や、やったあああ——！ 色々トラブルがあったけれど、結果的には総取り成功！

伊地知さんとも仲良くなれて、関係者枠もゲットし、アニメ1話の幻のライブも拝める！）

公園で最悪な場面を見られたときは、本当にどうなるかと思っただけ。冷たい空気にながら頑張った甲斐があった。

さっきの伊地知さんもかわいかったな。さすがアニメキャラ。ちよつとドキドキした。

（これからSTARRYでバイトして、アニメで描かれなかった時のバイト風景を拝んだり……オーディションライブも生でみたいよね。うーん、夢が広がるなあ）

ステージの照明がつき、伊地知さんのMCが始まった。

演奏は素人の僕でもわかるくらいイマイチで、ステージのマンゴー仮面がライブハウスの空気をぶち壊し、客席の反応はどうみても良くなかったが――

――それでも僕は、終始笑顔でそのライブを楽しんでいた。

夢のライブが終わり、次のバンドに交代となる。

交代といっても、すぐに次の演奏が始まるというわけではないらしい。機材のセッティングなんかをしているみたいだ。

（結束バンドのライブは終わったし、もう帰ってもいいんだけど……。どうしようかな？）

いや、たしかもうイベントあるんだっけ？

楽屋の扉を見ていると……。あ、後藤さんが飛び出してきた。そのまま脇目もふらず、出口に一直線。階段を駆け上がったいった。

もう見るものはないかな。楽屋にもう一度入るのは目立つだろうし……。帰ろう。

いや。楽しい1日だったな。

——その日は浮かれ気分のまま、家に帰った。

今日のことを思い返していたらなかなか寝付けず、翌朝は寝坊しかけて、授業中も居眠りしそうになっていた。

そんな風にぼんやりしていた僕は、気がつかなかったのだ。

後藤さんにだけ——結束バンドのミーティングについて、連絡がきていたことに。

閑話 天使とぼっちとマイペース

(うう……どうしよう……)

お昼の学校。次が最後の授業ということで、少し浮足立った教室にて。
私、後藤ひとりは深刻な悩みを抱えていた。

始まりは昨晚のことー

初ライブを終え、(いつの間にか)正式なバンドメンバーとなり、女の子から初めて口インでメッセージを受け取るなど、様々なイベントにより浮かれきっていた私のもとに……虹夏ちゃんからメッセージが届いた。

《今後のバンド活動について話し合いたいから、明日の放課後、STARRYに集合ね！》

《1人だと心細いなら、畔くんも一緒に大丈夫だよ》

《よろしくね(スタンプ)》

STARRYはまだ行きなれてないし、雰囲気も怖いから1人だと心細いのは確か

…。

扉を開けた途端、変なものを見る目で見られたらと思うと中に入れなくなりそう。扉の前で立ち尽くして、そのうち干物になっちゃう自分の姿が目には浮かぶ……

いやそもそも、おしやれダウン下北沢を一人で歩く時点でだいぶきつい。ここは虹夏ちゃんのアドバイス通り、畔くんに付き添ってもらいたいところだけど……

(でも私からメッセージ送ったことなんてないし、今日、完熟マンゴーを見られたばかりなのに……)

は？ あんなダンボールライブを見せておいて、また着いてきてほしいとか言ってるの？ なんて言われたら爆発四散してしまう気がする……

いつそほとぼりが冷めるまで学校休むとか……いやここは勇気をだして……なんて転がりながら考えていたら、背後から突然声をかけられた。

「お姉ちゃん、また何かあったの？」

「ヒウエアツ！ ふ、ふたり。どうしたの？」

「おやすみなさい言いに来た」

悩んでいるうちにだいぶ時間がたつたらしく、気がつけばちよつと遅めの時間だった。

ふたりにおやすみを言った後、もう一度スマホを手に取るが……ダメだ。もう指が動

かない…。

（こんな時間にロインするのは迷惑だし、やめた方がいいよね。うん。きっと明日また話しかけてくるだろうし、怒ってなきそうなら聞いてみれば…。）

——なんて思っていたのに、今日に限って話しかけてこない！

横目で畔くんの様子を確認するが、机に突っ伏したまま動かない。

というか休み時間ずっと寝てるような…。授業中はギリギリ起きてるみたいだけど。

（や、やつぱり昨日のライブが下手すぎて怒ってる…？ 話すつもりはないって意思表示なんじゃ…。ほ、放課後はダツシユで逃げよう…。）

そんなことを考えた私は、最後の授業が終わってすぐに席を立ち、下北沢に向かい…。

想像していた通り、扉の前で立ち往生した。

虹夏ちゃんとリョウさんがSTARRYに来たことで、なんとか私も中に入ることができた。

適当なテーブルを囲んで座ると、虹夏ちゃんが「一人でこれてえらいね。よくがん

ばった!」なんてほめてくれた……えへへ、私頑張った……って、

(違う! よく考えたらほめられ方が⁵歳児歳児と同レベル!)

虹夏ちゃんの中の私ってどうなってるんだろう……? なんて疑問に思うけど、聞いた
らショック受けそうだし聞かないでおこうかな…。

「ミーティング始めるよ」と言つて、虹夏ちゃんが鞆から何かを取り出した……ス
ケッチブック?

「とりあえず、お題にそつて話していこうと思うんだ。まずはこれから……じゃーん、
『好きな音楽の話』」

「略してオトバナー」

「お、オトバナ……?」

虹夏ちゃんが音頭をとり、リヨウさんが追従する。なんでわざわざ略すんだろう……?
虹夏ちゃんの好きな音楽はメロコア系、リヨウさんはテクノ歌謡とか(虹夏ちゃん曰
く嘘)らしい。私の番が回ってきたけど、好きな音楽か……

「せ、青春コンプレックスを刺激する歌以外ならなんでも……」

「ん? 青春コンプレックス?」

虹夏ちゃんの疑問の声をよそに、私の心がコンプレックスにより暗黒面に落ちていく

……

闇に落ちた私のもとに、イマジナリーフレンドギタ男くんが現れて、話し相手になってくれた。

青い海、仲のいいカップル……そういったものから目を背け、ギタ男くんとバンドについて語りあっていると……突然ギタ男くんが消え去った。

(……!?) あれ、なんか美味しそうなおいがする。これは……唐揚げ?)

「良かったー。ぼっちちゃん戻ってきた」

「おー。虹夏やるじゃん」

いつの間にか現実世界に戻ってきたみたいだけど、なにがなんなのかわからない……。

目の前には、かわいいお弁当箱が置かれていて……? 唐揚げ、お米、レタスにトマト、

玉子焼き……シンプルなのに輝いて見える。

まさしくお手本のような手作り弁当。それがどうして私の前に……?

「それ、朝作っておいたの。良かったら食べてみて?」

「あっはい……。えっ?」

虹夏ちゃんの言葉に耳を疑う。

わ、私なんかがこのお弁当を食べていいの……? 家族と先生、あと親戚以外の手料理

なんて初めて……

夢に違いないと思って頬をつねると、普通に痛い。痛いということは夢じゃない……?

（現実こんなことが起きるなんて…… あ、味わって食べよう。こんな機会、もう一生ないかもしれないし……）

「いついたきます」

「ふふつ、喜んでくれて良かった」

「……虹夏、私の分は？」

「え、ないけど……」

幸せをかみしめながら、お弁当を味わう。冷めちやつているのに、なぜかとても美味しい。

虹夏ちゃん料理もできるんだ。優しくて家庭的で、私のことをよく甘やかしてくれる……。

「私も食べたい」

「昼間もあたしの唐揚げ食べたでしょ！」

「でも小腹がすいてきたし。ねえぼっち、唐揚げ1個ちょうだい」

リョウさんの言葉に、ピタリ……とお弁当を食べる手がとまる。

嫌だ、あげたくない。唐揚げあと2個しかないのに。最初で最後かもしれない、友達が作った手料理なのに……

断固たる決意を持って断るべく、リョウさんを見るけれど……無表情で見つめてくる

リヨウさんが怖くて、すぐに目をそらしてしまう。言葉が出ない。い、威圧感が…。

——その後、抵抗（してない）むなしく、唐揚げをとられてしまったのは言うまでもない。

お弁当を食べ終わって、ミーティング再開となった。「次の議題は……うーん、どうしようかな…?」と虹夏ちゃんが悩んでいる。

そんな虹夏ちゃんをよそに、リヨウさんが話しかけてきた。

「ぼっち」

「はっはい、なんででしょう…?」

「これでぼっちと私は同じ釜の飯を食べた仲だから。つまりマブダチ」

「えっ!? リヨウずるい!」

言葉は聞き取れたけど、言葉の意味が理解できない…。

マブダチ……マブダチってなんだっけ…? あっ親友って意味か……親友?

左を見る。リヨウさんはマブダチと言ってくれた。お弁当を分け合った仲。つまり

友達。

右を見る。虹夏ちゃんはお弁当をくれて、色々優しくしてくれて……友達と言ってい

い、はず。

……いい、いつの間にか友達が2人も！ バンド組んで、友達もできて、これはリア充と言っているのでは……！

「うへへ……リア充ぼっちです……」

「よくわからないけど、なんか元気になったね」

「私のおかげ」

「ドヤるな！ まあ、ぼっちちゃんが元気なうちに、この話題いつてみよつか」
にやける私をスルーして、虹夏ちゃんがスケッチブックをめくる。

どんな話題かな？ まあリア充となった私なら、どんな話題もパーフェクトに……

「次は『学校の話』だよ！」

「略して、ガコバナ」

「あっはい……」

学校ネタを脳内検索するが、嫌な記憶の詰まった引き出ししか見つからない……。とりあえず無難な定番ネタで乗り切ろう……

「ふ、二人は同じ学校で……？」

「そうだよ！ 下高の同級生」

「家から近いから選んだ」

「あつ下北沢に住んでるんですね……」

「こんなおしやれタウンで過ごせるの、すごいなあ……」

私も下北沢で育っていたら虹夏ちゃんみたい……なれるわけないか。私だし。

「ぼっちちゃんは秀華高だよ。この辺じゃないの?」

「あついえ、県外で、片道2時間かけてます……」

「えっ?」

「2時間……」

「なんでそんな……ごめん! 今のなし、忘れて!」

虹夏ちゃんの疑問の声で死んだ魚の目になりかけたけれど、すんでのところで持ちこたえた。

誰も自分の過去を知らないところに行きたかったなんて、どう言っても盛り上がる気がしないよね……察してくれてありがとうございます。

「あの睨ってやつとはよく話すの?」

「あつはい。だいたい毎日……」

「そうなんだ! 昨日の感想とか、何か言ってた?」

「あつ今日は1回も話してないです……」

やっぱり怒らせてしまったのでは……なんて思ってたけども、
なんだか虹夏ちゃん不思議そうな顔をしている。

な、なんだろう？ おかしなことを言ったつもりはないんだけど…。

「うーん、ぼっちちゃんは見てなかったと思うけど……畔くん、結構楽しんでるように
見えたんだけどなー」

「えっ…?」

「虹夏はロイン交換してたよね。何か来てないの?」

「一応《今日は楽しかったです。これからよろしくお願いします》とは来てたよ」

「ふうん……」

虹夏ちゃんとリョウさんが色々話しているけど、なんだか耳に入ってこない…。

畔くんが楽しそうにしていた? あのライブで…?

(出来は悪かったのに、なんだかかちよつと嬉しいな……)

畔くんは、コミュ力高くて、ギターも弾けて、文化祭ライブもしそうで……私のアイ
デンティティが崩壊しそうになる日が続いて、どうにも苦手意識が強かったんだだけ
…。

この前ライブしたことで、バンドマンとしては私の方が一歩リードできたわけだし

……あまりコンプレックス感じなくていいのかも。もうちょっと自信をもって、向き合ってみようかな？

「畔くんって歌はどう？ 聞いたことある？」

「えっ？ くっクラスでカラオケいった時は、評判良かったとか……」

「虹夏。彼、入れるつもりなの？」

畔くんが新メンバーになったらどうなるんだろう……？

頭の中でシミュレートしてみる……ボーカルって目立つし、注目の的になるよね。虹夏ちゃんたちともあつという間に仲良くなって……あ、私がどんどん薄くなって消えちゃった……。

未来予想での自分の末路に、俯いてプルプルと震えてしまう。に、苦手意識が……

「うーん。畔くんが女の子なら迷わず勧誘するんだけど、男の子だしなあ……」

「男女混合バンドは、恋愛関係でこじれて解散つてのが定番」

「いやそれ偏見だから！ きちんと活躍している人達もいるでしょ」

あ、リヨウさんは反対っぽいし、虹夏ちゃんもそんな乗り気じゃないみたい。

良かった。私のアイデンティティは守られた……。

虹夏ちゃんがスケッチブックを手にとる。

「どうやらガコバナは終わりみたい…？ よし、次の話題は頑張るぞ。」

スケッチブックがめくらられて、今度は『バンドの話』と書かれたページになった。

「ちょうどいいし、次はバンドの話ね」

「結論だけ言うと、女性のギターボーカルのことを入れたい」

「あつそうなんですね」

「およ？　なんか今日、珍しく積極的だね…？」

「眠いし、早く終わらせよう」

「おいこら」

リヨウさんが虹夏ちゃんにツッコまれてるのを見ながら、さっきの発言について考える。

女性ボーカル限定ってことは、ガールズバンド路線でいくんだよね。ガールズバンドといえば、夢とか、恋の歌みたいなの…いい、嫌だけどここで空気壊したくないし、賛成ムードを……

「あつ恋の歌、最高ですよね……べつ……」

「凄く嫌そうな顔！　大丈夫だよぼっちちゃん、ガールズバンドつてのを前面に出して売りたいわけじゃないから」

「恋の歌とか嫌なら、ぼっちが歌詞書いたら？」

「それいいね！　ね、作詞大臣やってみよ？」

「あっはい、任せました……」

なんか勢いで作詞担当になってしまった…。まあ中学校まで休み時間は図書室で過ごしてきたから、なんとかやれるはず……

でも、ならなんで女性限定なんだろうっていう疑問は、虹夏ちゃんが説明してくれた。

「まあガールズバンドじゃなくてもいいんだけど、男女混合だと着替えとか、色々大変らしいんだよね。リョウじゃないけど、恋愛で関係がこじれて……なんて話もないわけじゃないし」

「実力があるなら考えなくもない」

「な、なるほど……」

2人の話にうなずく。恋愛はともかく、着替えとか大変そうなのは分かるかも…。

虹夏ちゃんが「まあギターはできなくても大丈夫。これから練習すればいいだけだし

……」なんて話しているのに相づちをうちながら、ミーティングは続いていった。

~~~~~

(……まあ女性限定にしてる一番の理由は、別にあるんだけど)

虹夏とぼっちが話すのを見ながら考える。

本音では、音楽性があれば男だろうと全然かまわないのだが――

(虹夏目当てで加入しようとするやつが多すぎてうざい)

虹夏は学校ですごいモテる。

かわいくて、面倒見がよく、人当たりもよいとなれば当然のこと。自分もそこそこ人氣があるが、ふらふら集まる男の数は、圧倒的に虹夏が上。

それなのに当の本人は、向けられる感情にさっぱり気が付いていない。店長虹夏の姉とも協力して排除しているが、親友でなければ見捨てているところである。

虹夏にアピールするため、音楽雑誌やギターを買ってくる奴も、そう珍しくはない。まあちよつとつつけばすぐボロがでるのだが……。

そんな奴を入れても意味はないので、バンドメンバーは女性限定ということにしているのである。

(ギタボ探しが振り出しに戻ったのは残念だけど、ぼっちが見つかったのは良かった。腕はともかく、个性的なのが実にいい……。気に入った)

虹夏が「ギタボ探し、がんばろー！」などと掛け声をあげるのに適当に合わせる。

……虹夏、緊張してる。そろそろあの話題にいくのかな。

「最後は『ノルマの話』だよ。もう一息だから、頑張ろうね！」

「あっはい」

「……………」

学校で、スケッチブックを用意しながら悩んでいた虹夏を思い出す。

だいぶ眠くなってきたけど、もう少し頑張るか。面白いものが見れそうだし――

「ノルマ代とか諸々の経費がかかるから……お金を稼がないといけないの」

「はい……………えっ?」

ギギギ……………と音を立てそうな動き方で、ぼっちが顔を上げる。どうやら察してしまっ  
たようだ。

そんなぼっちを優しい目で見つめながら、我が親友は裁きを下した。

「だからぼっちちゃん、バイトしようね」

「バイトオ!?!」

今日一番の大声をあげて、ぼっちが気絶する。

それを見て慌てる虹夏を見ながら、満ち足りた気分で、夢の世界に旅立った。



## 後藤さんの生態に詳しい？ 畔博士

——6限の途中で意識を失って、気がついたら放課後だった件

誰もいない空っぽの席を見て、僕は嫌な予感をひしひしと感じていた…。

いや、一応気にはなっていたのだ。バンドミーティングって今日じゃなかったっけ？  
なんて思ったりもした。

でも眠いし、だるいし…放課後に後藤さんを捕まえれば大丈夫だろう…なんて  
思った結果が、これである。

ロインを見直してみるが、何の連絡もきていない…。

後藤さんを追いかけるのは……なしだな。呼ばれてないのにおしかけるとか、一  
歩間違えればストーカー呼ばわりされそうだし…。

そもそも結束バンドのミーティングが、今日じゃない可能性もある。アニメではライ  
ブ翌日とはつきりしているが、漫画の方では単に“明日”とあるだけ。

明日、学校で後藤さんに確認しよう。まだ希望はあるはず…。

次の日。

教室についた僕は、後藤さんが登校するのを待っていた。

(よし、後藤さんがきたぞ。すぐに話を——)

後藤さんと話をするため席を立つが……珍しく後藤さんの方からこっちに来る。動きが速い、リアルで見たことのない俊敏さを感じる…。

出鼻をくじかれた僕に向かって、開口一番、後藤さんが言葉を発した。

「ああああのつ畔くん！ バイトを休むうまい口実とか知りませんか!？」

「えっ……」

「もしくは働かないでお金を稼ぐ方法とか、お、教えて下さい！」

言い終えるとそのまま土下座してきた。うわあ、人生初のリアル土下座をみてしまった…。

周りから嫌な視線を感じる…。でもそんなことより、話の内容が問題だ。これは明らかに、ミーティング回が終わっているとしか思えない。やっぱりやらかしてしまっただけ…。

どうか……どうか……などつぶやく後藤さんのそばに、座り込む。

ノロノロと後藤さんが顔をあげ、縋るような眼差しを向けてくるけど……ごめん、それには応えられない。

「後藤さん」

「はっはい」

「そんな都合のいいものはないよ」

「あつうつあつ……」

後藤さんは希望を失い、死んでしまった。これ床に放置するわけにもいかないよね……。

仕方ないので後藤さんを席に戻し（まだうわ言をつぶやいていた）僕も自分の席に座る。希望を絶たれたのは僕も同じなんだよね……これからどうしよう？

時は流れ、授業中。

スマホの画面を見ながらため息をついた……。ミーティングに呼ばれなかったのは、後藤さんとのセット扱いをされていないということだろうか？

あくまでミーティングの主体は後藤さんなので、後藤さんのフォロワー役として必要とされなければ、僕が呼ばれないのは当然だろう。やっぱりアピール失敗していたか……よくよく考えてみれば、伊地知さんとも仲良くなれたのか怪しいものだ。

ロインのトーク履歴は1画面におさまる程度。その程度のやりとりしかしていない。なんで仲良くなれた気になってたんだろう……？ 関係者枠でいいって言ってくれた

時の、伊地知さんの笑顔にやられていたのかな…。

これからどうするか悩んでいたら、スマホが震え、通知が表示された。通知の内容は……伊地知さんからのメッセージ!?

あわててロインを見ると――

《ちよつとぼつちちゃんについて色々聞きたいんだけど、良かったら会えないかな?》  
《今日の放課後とか空いてる?》

まだ希望は残っていた!

急いで伊地知さんにメッセージを送る。さつきまでの鬱々とした気分が一気に晴れたような気がする。早く放課後にならないかな……

残りの授業を上空ですごし、迎えた放課後。

僕は、STARRYの扉の前にたどり着いた。

ちなみにロインで《一人できてね》と言われたので、後藤さんは一緒ではない。

というか、伊地知さんに呼ばれた話を後藤さんにしたら「あつ……ぺちよ」って言うて動かなくなってしまったので、来られるはずもない。

ぺちよっていったら、アイデンティティが崩壊する音だけれど……。喜多さんの出番は

まだなのに、どうしてあんな音がしたのだろうか？ それとも似たような音のバリエーションでもあるのだろうか。

後藤さんの生態について考えながら中に入ると、伊地知さんとリョウさんが待っていた。

チケット販売前ということもあって、人の数はまばらだ…。あ、星歌さんもいるな。この前は結局会わなかったから、ちよつと得した気分になる。

「あ、こつちこつち。来てくれてありがとう！」

「こんにちは。伊地知さん、山田さん」

「ん」

伊地知さんは明るく、山田さんは気だるげに迎えてくれた。

後藤さんについての話ということだけけど……こちらとしては、STARRYでのバイトに繋げていきたい。そういう方向性の話ならいいな。

用意されていた飲み物を一口飲むと、伊地知さんが話し始めた。

「話つて言うのは、ぼっちちゃんの学校での様子とか聞きたくてね」

「学校ですか？」

「うん。その……ぼっちちゃん、あまり学校の様子とか話しくそうだったから……」

ああ、まあそうですね…。

ガコバナは即行で終了したはずだし、本人には聞きづらいだろう。今まで話したことがあるのは……後藤さんがぼっちしてることくらいかな。

他に話すこと……ほぼほぼ暗いネタしかないんだけど。悪口みたいになりそうで嫌だな……。

「授業はまじめに聞いてます。ノートもきれいにとってるみたいです」

「お、意外と優等生タイプなんだ!」

「そうですね……。ただ、授業で名前を呼ばれると固まっちゃいます……」

「そっかー。まあ想像できるかなあ」

「あと……お昼はいつもどこかに消えます。教室では食べづらいそうで……」

「そ、そういう子いるよねー。うん……」

「さすがぼっち」

伊地知さんの笑顔がどんどんひきつっていく。無理に笑うより、ツツコミいれてくれた方がこっちも気が楽なんだけれど……。

ちなみにこの前、学校では中間テストがあつて、早いものはもう返ってきてるのだが……後藤さんの回答用紙は悲惨なことになっていた。成績は悪いけど授業はまじめに聞いているつてのは、優等生というのだろうか……?

流れを切るためか、今度は伊地知さんの方から質問してきた。

「畔くんとはよく話してるんだよね。どんなことを話すの？」

「うーん……。ネタはその時によつて色々なんですけど、9割方、僕が話すのに後藤さんが相づちなりをしている感じですよ」

「まあぼつちちゃん無口だからねー」

「内心が面白いタイプだと思う」

9割方というか、後藤さんから話しかけてきたのは、今朝の土下座シーンの1回だけだ。記念すべき最初のネタがあれかあ……。やっぱり後藤さんって残念すぎる。

ちなみに話の途中で、いつの間にか後藤さんがフリーズしていて会話終了つてのがお決まりのパターンとなつている。そういう時は気長に待つしかないんだけど……休み時間もそんなに長くないので、待つている間に次の授業が始まっちゃうんだよね。

おかげで交流がなかなか進まない。放課後は友達付き合いつかあつてこつちも忙しいし、後藤さんに構つてばかりもいられない。ファミレスに誘つて話してみた時もあるけど、会話が盛り上がりたらないのは変わりなかつた。2人きりだと間が持たない……。

今度、勉強会にでも誘つてみようかな……。あのテストにはさすがに同情したし、口実としても不自然じゃないだろう。後藤さんがフリーズしている間は、自分の勉強をしていれればいいんだし。

勉強会プランを頭の中で組み立てていると、伊地知さんが待望のネタを放り込んでき

た。

「ところで、この前ぼっちちゃんとお話して、ここでバイトすることに決まったんだけど」

「:!! そうなんですね。大丈夫そうですか?」

「うーん…。正直不安かなあ…。この前はバイトの話しただけで気絶しちゃってたし……」

「あれは傑作だった」

後藤さん気絶したんだ…。原作より重症じゃん。

きつと豚の貯金箱を差し出されるシーンなんかもあつたんだろうな…。あれ中身どれくらい入ってるんだろう? ぜひともミーティングに同席して、調査したかった。

ところでバイトの話が出たってことは、そういうことですよ? 希望を持ってもいいですか?」

「あたしたちもフォローはするけど、畔くんも様子見て、支えてくれるとありがたいなって……」

「……はい、分かりました」

「え、私もするの?」

「リヨウ、あたしに全部押しつけるつもり?」



伊地知さんが山田さんにジト目を向ける。

この流れ、僕をバイトに誘ってくれるわけではなさそうだなあ……。希望ちゃんは儂かった。

バイトを誘われない場合のプランはどうしたものか。こうして呼ばれているから、そんなに関係悪くはないはずなんだけれど…。

「ちなみに畔くんって、バイトしたりしてるの?」

「いえしてません! でも興味はあります!」

「そ、そう……」

やばっ。ちよつと食い気味に反応してしまった。伊地知さんちよつと引いてるわ。

でもこの流れはそういうことだよね!? バイト誘ってくれバイト誘ってくれ誘ってくれ……

「良かったら、畔くんも一緒にここでバイトしない?」

「します! よろしくお願ひします!」

「仕事内容も聞かずに即決した!?! ぼっちちゃんのフォローだけじゃなくて、色々お願ひすると思うんだけど……」

「任せてください。頑張ります!」

テンション高めな僕の様子に、伊地知さんがちよつと戸惑っている……でも、やつとゴールが見えてきたところなんだし、仕方ないよね。

結束バンドとの交流も順調だし、バイトに採用されればもう安泰だろう。後藤さんとの関係はちよつと気になるけど、交流する機会も増えるしなんとかなるはず。

——なんて浮かれていた僕に、浮かない表情の山田さんが水をさしてきた。

「ねえ虹夏」

「うん? どうしたのリヨウ?」

「バイトの話、店長にはしたの?」

「まだしてないけど大丈夫! ぼっちちゃんのこともすぐOKしてくれたし」

「ね、お姉ちゃん」と、伊地知さんが星歌さんに呼びかける。

……この流れ、この会話、なんか見た覚えがあるんだけど。い、嫌な予感が——

「あ?」 雇う気ないけど」

「えっ?」

あ  
び<sup>°</sup>  
や  
あ  
⋮  
⋮  
⋮

## カラカラ頭で踏み出して

バイトを巡った伊地知姉妹の戦争勃発から数分が経過し——既に趨勢は決していた。どちらが勝者かは、うなだれた伊地知虹夏を見れば語るまでもないだろう。

星歌さんの話を要約するとこうなる。

①そもそもバイトの人数は十分足りていて、これ以上増やすのは人件費がかさむ

②仮に採用するなら、まずは面接から

③バンドメンバーの面倒を見るのを、部外者に頼りすぎるな

そもそも後藤さんについてOKしたのも、破格の対応といえる。まじめに面接すればバイト（特に接客系）に受かる可能性は0だろうし…。

それを察した伊地知さん（妹）が、後藤さんがバンドにかかる費用を稼げるようにするために、姉である星歌さんにお願ひした結果が、人柄やスキル等を完全に度外視した採用決定——いわゆるコネ入社だ。

そういうった事情がなく、バンドメンバーですらないのであれば、通常の採用手順を踏

むようにというのは正論なんだろう…。

「そもそも『迷惑かけちゃうかもだけど、あたしがフォローするから』なんて言っただけで、あたしがフオロするから」

「はい…。言いました…。」

「なら安易に一緒に働いてもらおうとしないで、頑張りなよ。バンドメンバーとしてこの先もやっていくなら、人間関係はしっかり構築しておいた方がいいんじゃない？」

「ごめんなさい…。あたしの考えが甘かったです…。」

伊地知姉妹の話し合いはまだ続いているけれど、もはや話し合いというより、一方的なお説教となっている。これはバイトの話は立ち消えだな…。友達として同席するものもこの流れだと遠慮されそうだし、後藤さんの初バイトを見る計画は、もはや実現できそうにない。

いたたまれない空気になっているからか、いつの間にか他の人も離れた席に移動している。いつまで続くんだろう…。なんて思っていたら、山田さんが「ねえ」と話しかけてきた。

「？ はい、なんですか？」

「畔って、好きなバンドとかあるの？」

この空気の中で雑談……だと？ 驚愕して思わず山田さんの顔をまじまじと見てしまいが、なんのプレッシャーも感じていないような表情で見つめてくる。心臓に毛が生えてるのか？

しかし好きなバンドね……原作に出てきたやつ以外は知らないんだけど。結束バンドはまだろくに活動してないし『SICK HACK』は酒のイメージが……。それなら、「SIDEROSやケモノリアなんかが好きです」

「ふーん……どっちも評判いいみたいだね。SIDEROSは新宿FOLTで活動しているみたいだし、そっちの募集は探したの？」

「あ……いやその、実はそんなにバイトしたいわけでもなくて……」

原作に出てきた人気バンドの名前をあげたら、スマホで情報を検索した山田さんにツッコまれてしまった。つい本音を話してしまったけれど……どうしよう、なんて言えばいいかな？

無言で続きを促してくる山田さんに、考えがまとまらないまま口を開いた。

「後藤さんや結束バンドのことを見ていたくて……一緒にバイトできそうってなったら、つい」

「……………」

「お金はまあ、別のバイトでもいいですし、そこまで困っているわけでも……」

「結束バンド目当て……だからこの前、ライブ途中で帰ったの？」

え、この前って結束バンドがライブした日のことだね。なんで途中で帰ったことを知っているんだろう…？

疑問に思った僕の考えを読みとったかのように、山田さんが続きを話した。

「せっかくだから一緒にライブ見ようって、虹夏が探してた」

「……すみません。その、失礼なことを」

「別にいい。途中退場はよくあることだし」

ネットで調べたら途中退場はできるみたいだし、人も多いから別にいいかと思ったんだけど……そんなことになっていたのか。一緒にライブを見る——そんなイベントがあるって知っていれば、絶対残っていたんだけどなあ…。

ライブ日の失敗がさらに発掘されたことにダメージを受けていたら、お説教タイムが終わった伊地知さんが戻ってきた。

~~~~~

(うう……お姉ちゃんにこっぴどく絞られた……)

あたしの考えが甘かったのはよく分かったけど、あんなに厳しくしなくてもいいのに

……なんて思う。まあ、ライブやれて浮かれていたのも事実だし、厳しくされるのはしょうがないのかも。

ツンツンツンなお姉ちゃんのことを考えながら席に戻ったら、畔くんが意気消沈していた。バイトの話なくなっちゃったからかな……悪いことしちゃったよね。

「畔くん、ごめんね。バイトの話なんだけど……」

「はい……。聞こえていたので、大丈夫です」

沈んだ様子で畔くんが答える。うん、ほんとごめん。

リヨウはいつも通りに見えるけど、畔くんは沈んでるし、あたしもちよつと居心地が悪い。このまま今日は解散かな……。いやでも、まだ聞きたいことが……。うん、いつちゃおう！

「ところで畔くん、歌の上手な女の子とか知らないかな？」

「えっ？」

畔くんがギター探しのことを説明する。結束バンドにボーカルを入れたいこと、できればギターが弾けるといいけど、意欲があれば問題ないこと。

話しているうちに場の空気も回復してきたので、ちよつとおしゃべりしてから今日は解散となった。

感傷としては……悪くないかも？　なんとなく心当たりのありそうな反応だったし。

いい子が見つかるといいな。

畔くんが帰った後のこと。

バイトが始まるまで、あたしはリヨウとだべっていた。

「ギタボ探し、うまくいくといいね」

「そうだね」

リヨウがぐでーつとリラックスした様子で答えてくる。こういうった様子は学校の人には見せないから、なんかちよつと不思議な気分になる。優越感…？ なんていうんだらう？

あたしも一緒にぐでーつとしながら、話を続けた。

「リヨウ、畔くんのこと、結構気に入ったの？」

「なんで」

「だって、男の子に名前呼び許すの、珍しいじゃん」

リヨウが顔を向けてくる。

なんとなく、感情の読みにくい目をしている。こういう時のリヨウは何も考えていないことが多いけど……ごくまれに、何か深いことを考えているらしい。

「まあついでだし」

「うん」

「あと……：気に入らないから」

気に入ったのかと思つて聞いたのに、気に入らないつて何だろう——なんて疑問に思
うけど、リヨウはそれ以上話すつもりがないようで、口を閉じたままだった。

ゆつたりと、沈黙の時間が流れる。

色々、お姉ちゃんに言われたことなんかを考えていたら、リヨウが「なに考えてるの
？」と聞いてきた。

「畔くん色々お世話になつてるから、今度お礼にご飯でもおごつてあげようかなつ
て」

「その時は私もついてく」

「リヨウにはおごらないからね？」

不満そうにしているリヨウを置いて、仕事にとりかかる。

お客さんが入り始めたのにあわせて、あたしは笑顔を浮かべるのだった。

くくくく

STARRYからの帰り道。足取りがちよつと軽い。
結局バイトの件はうまくいかなかったけれど……収穫はそこそこあった。

1つは、伊地知さんと山田さんから、名前呼びの許可をもらえたこと。

これからSTARRYで会う機会もあるだろうし、お姉ちゃんと紛らわしいから——
なんていう理由で、虹夏さんが許可をくれて、リヨウさんもついでに……と許可してく
れた。

名前呼びの方が親密になれた気がするし、一歩前進と言つていいだろう。とはいえ虹
夏さんからは全く他意を感じなかったし、リヨウさんの方は……どちらかというと、険
しさのようなものを感じた。フレンドリーというより宣戦布告のような……。

(後藤さんの呼び名についても聞かれたけど、ちよつとなあ……)

“ぼっちちゃん”や“ひとりちゃん”はさすがに恥ずかしいし、“ひとりさん”はな
んかちよつと違う気がする。“ぼっちさん”はまだマシだけれど、今の関係ではなんか
呼びにくい。

当分は後藤さんのままだろう。

2つめの収穫は、STARRYでのバイトについて、新たな情報を得られたこと。

虹夏さんが星歌さんから聞いた話によると、6月の上旬に、新しくバイトの募集をす
るらしい。本来ならその枠に、喜多さんが入るのだろう。

喜多さんの枠だとすると、僕が代わりに入ることで、ストーリーが変わってしまう可
能性があるわけだが……まあそのあたりは、面接を受けてから考えても遅くないかな。
2人とも採用されれば影響は少ないだろうし、喜多さんが落ちるところなんて想像でき
ない。

なににせよ、1日で色々と進展したと思う。

晴れ晴れと浮いた気分のまま、僕は家への帰り道を歩くのだった。

——いや結局、後藤さんの初バイトを見れないのには変わらないじゃん！

優しさも過ぎれば毒となる

「風邪だった？ 長引いちやって大変だったね」

「私ノートとっておいたから、後でコピー渡してあげる」

「あっありがとうございます」

月曜日の朝。

秀華高校、1年2組の教室にて――

「ねえねえ後藤さん、それってギターなの？」

「あつ……そ、そうです」

「ギターいいなあ……！ なんかカッコいいね！」

「えっ？ えへへ……か、カッコいい？ うへへ……」

クラスメイトに話しかけられる後藤ひとりという、僕の常識ではありえない光景が繰り広げられていた。

時間は少し戻り、先週の週末のこと。

僕は、罪悪感に苛まれていた。

罪悪感の内容は「後藤さんが風邪をひくことを分かっていたいながら、放置した」ことである。

後藤さんは初バイトの後、氷風呂などの後遺症で風邪をひく。この展開自体は特に必要ないので、後藤さんにアドバイスをするなりして、風邪をひかなくてすむようにすることも考えていた。

しかし、後藤さんが風邪をひくのは、喜多さんを結束バンドに勧誘する流れに繋がっている。そして、喜多さん勧誘の過程では、今後の後藤さんと喜多さんの関係における土台ともなる要素がいくつも存在する。

また、後藤さんが喜多さんを勧誘する勇気を出すためには、STARRYで一緒に働くことがほぼ必須といえるのだが……それは星歌さんが「今日は人手不足になりそうだから」と提案して実現したことだ。

つまり、別の日に喜多さんをSTARRYに連れて行った場合、原作通りの流れになるか分からない。

以上の理由で、後藤さんの風邪と喜多さん勧誘までについて、僕はなるべくノータツ

チでいくことを決めた。

少しだけ手を加えるとすれば、“喜多さんの噂を僕から後藤さんに伝える” “ライブハウスまで一緒についていき、虹夏さんたちに僕の貢献を印象づける” くらい。

バイト中・バイト後のシーンは……すぐ見たいけれど、無理はしないつもりだ。

ともかく、原作通りの流れに任せた結果、後藤さんは風邪で休むこととなったわけだが……実際に空っぽの席を見ると、ちよつと罪悪感がわいてくる。

普段の死亡芸とかなら気楽に見ていられるのに、不思議なものだ。

そこで、快気祝い（＋謝罪）として菓子折りを買うことを決め、月曜日の朝、登校してきた後藤さんにそれを渡したのだけれど……。

（なんでこんなことに？ 菓子折りを渡すまではいつも通りだったのに……）

後藤さんに励ましの言葉と菓子折りを渡したら、ふにやふにやの軟体動物になった。

これは別におかしくない。よくあることだ。

異常事態はその後に起きた。

クラスメイトの女の子たちが後藤さんに話しかけたのだ。それも1人、2人の話では

ない。既に3人目、これからもっと増えるかもしれない。

コミュニケーションのとり方も上手い。少人数でちよつとした会話をするだけだから、後藤さんも、多少は会話ができているようだ……目は当然のごとく合わせられないし、時にふやけたりもしているが。

(……まあ、悪いことではない、よね?)

なんでこうなったのかはさっぱり分からないけれど、クラスメイトと交流するのは悪いことではないだろう。

予鈴が鳴ったためか、後藤さんが解放された。半分目を回しつつも、ちやほやされて嬉しそうな後藤さんを見て……僕はなぜか、妙な胸騒ぎを感じていた。

くくくく

昼休み。

後藤ひとりとは高校に入学してから初めて、教室でお弁当を食べていた。

彼女は普段、こんな人の多いところで食事をしない。他人の視線が怖いからだ。

無理な行動の代償はストレスとなり、肉体は悲鳴をあげていた。それでも教室にとど

まる理由とは――

(こんなちやほやチャンス、1秒でも逃すわけにはいかない！ も、もしかしたらお弁当のおかず交換とかしちやうかも…… 今日のおかず、もつと豪華にしてもらえば良かったかな……うへへ……)

降つて湧いたりア充生活を満喫するためである。

朝からちやほやされてきたひとりの心は、ふわふわと舞いあがるとともに、さらにちやほやされることを求めている。

それが、肉体があげる悲鳴をかき消していたのだ。

承認欲求モンスターにより体は支配され、脳内では妄想の翼が羽ばたく。

朝は明るく挨拶、友達と談笑、授業中にこっそり手紙を回し、お昼はお弁当と一緒に食べ、放課後はオシャレなカフェを友達と巡る、そんな自分の学校生活……！

おっと、バンド活動も忘れちゃだめだ。放課後は爽やかに別れ、ライブハウスでバイトやライブ……。うん、これでいいこう――と妄想を修整しつつ、次なるイベントを待つひとは、もはや暴走と云つていいほど調子に乗りまくっていた。

なぜ彼女がここまで調子に乗っているのか？

それは今朝、妹の何気ない（毒を含んだ）言葉をきっかけに、「初バイトを乗り越えた自分はもう陰キヤではないのでは？」と思ったことが始まりだった。

“ギターをもつてきて話しかけてもらう作戦”も、陰キヤでなくなった今なら成功するかも……などと考えた後藤ひとりは、期待を胸に学校にきた。

言うまでもないことだが、1回バイトをしただけで陰キヤ脱却できるわけもなく、彼女の考えは出だしから間違っている。

本来なら、そんな幻想は早々に打ち砕かれていたことだろう。しかし――

（休み明けにこんなに優しくしてもらえたのなんて初めて……！ や、やっぱり私もう陰キヤじゃないんだ！ もはや陽キヤ、クラスの人気者……）

現実には幻想を肯定した。

何人もの人に話しかけられ、いたわってもらい、ちやほやされる。ひとりの期待通り――いやそれ以上の状態となったことで、彼女は現実を見失い、暴走したのだ。

なお、後藤ひとりが急に人気者になった原因は、別にある。

もともとひとりがクラスで浮いていたのは、嫌われていたとか、イジメられていたとかではない。情緒不安定でコミュ障な彼女にどう接すればよいのか、周りの人が分から

なかったからだ。

そんな中、1か月以上後藤ひとりへの接し方を試行錯誤し、実演する人物——畔がいた。周りのクラスメイト達はそれを見て、ひとりの性格や接し方を学んだのだ。

ひとりの性格を把握した結果、やばい子だと思つて距離をおく人ももちろんいたわけだが、一部のクラスメイトは話しかける機会をうかがつており……風邪で休んだことをきっかけに、話しかける人が続出したのである。

そんな裏事情を知ることもなく、後藤ひとりの妄想は加速していく。

あまり中身の減つていないお弁当箱の前に、ひたすら話しかけられるのを待つ（自分からはいけない）彼女に、またも話しかける人が現れた。

「ねーねー後藤さん、音楽とかよく聴くの?」

「えあうえ……! きき、聴きますう」

「本当!? ね、今度お気に入りのCDとか持つてきてよ」

「私達もいくつか持つてくるから。見せっこしない?」

「はっはい! ぜ、ぜひ……」

つつかえながらも（ひとりの主観ではスマートに）会話を終え、「良かった〜!」「じゃあまた今度ね」などと言つて離れていく2人を見送る。

今度、今度……とキーワードを頭の中でリフレインさせ、ひとりはお弁当箱に手を伸ばそうとするが……直後に異変に気づいた。

(……あれ？ 体が動かない。手が震えて……?)

——もし、ここにいたのが2年生の後藤ひとりだったら。

彼女は多少緊張することはあれど、ちやほや生活を満喫できたことだろう。

内なる承認欲求を存分に満たそうと、時には自分からアクションを起こすことすらできたかもしれない。

しかし、今の彼女はまだ1年生。ようやく初バイトを乗り越えたばかりで、対人耐性はまだまだとんだない。人としてのスタートラインに立てていない。

一歩踏み出した決意も、内なる敵を克服した経験も、逆境をはね返した勇気も、後藤ひとりの中にはまだ存在しない。

ゆえに、多くの人と話して消耗したうえ、人目の多い教室で食事をするというストレスに、彼女の体が耐えられないのは必然であり——

(あ、これやばい……。め、めまいが……。)
限界を迎えたひとりは、気絶して床に倒れ込んだ。

堅牢なる扉の試練

「じゃあ後藤さん、お大事にね。また何かあつたらいらっしやい」

「あつはい。ありがとうございます……」

保健室の前で、ジャージ姿の少女が頭を下げていた。扉が閉まる音を合図に、顔を上げる。

人気がない廊下に安心感を感じながら、ひとりはゆっくりと歩き始めた。

（保健室で休むことも勧められたけど、先生と2人きりだと緊張する……。教室に戻って、またちやほやしてもらおう……）

そんな考えを抱きながら歩いていると、教室から先生の声が聞こえてきた。

授業中にこうして歩いていると、なんかサボっているような気分になる……。誰かに見つかつた時のことを想像して、急いで戻ろうと早足になった。

早足で歩いたからか、あつという間に教室についた。まだ授業は続いているみたいで、先生の声が聞こえる。

よし、中に入ろうと教室の扉に手を伸ばしたところでーふと、疑問がわいてしまった。

(……どうやって入れればいいんだろう?)

想像してみよう。

まず普通に入ってみる。入った途端、先生やクラスメイトの視線が集中して……うっ吐き気が。これはやめておこうかな。

こっそり入るのはどうだろう? 後ろの扉をそつと開けて潜り込み、自分の席まで……でも誰かに見つかつちやったら、逃げ場のない教室の中で注目を浴びて……。

四方八方から視線が集中するのを想像してしまい、意識が遠のく。この作戦もダメだ。

い、いつそのことハイテンションで突入して、一気に自分の席まで行ってみるとか……そんなの先生に怒られて灰になっちゃう……!

様々なプランを検討したものの、うまくいきそうなアイデアは出てこない。

完熟マンゴーさえあれば……。扉は目の前なのに入れない。

(普段は何気なく通る教室の扉が、授業中というだけで強固な城門になるなんて……)

目の前の扉が重苦しく、巨大な壁に見える。目立ち尽くす私。こんなところ、通れるわけが……

心が折れてしまい、膝をついてうなだれる。あたりが暗闇に包まれていく……

——急に鐘の音が鳴った。

はっ、と意識が浮上する。目の前にあるのは見慣れた教室の扉。さっきの音は授業終りのチャイム……い、今なら中に入れる！

バツと顔をあげて扉に手を伸ばし——たけれど、勝手に扉が開いたのでまた固まってしまった。い、いきなり人が……！

「あ、後藤さん！ 具合はどう？」

「急に倒れたから心配したよ〜」

「あうっ、えっ、あっ……」

いきなり出てきた2人組（お昼に話した相手だ）と目があってしまい、パニック状態になってしまった……。いや、私はもう陽キヤなんだし、このくらいで怯んだりしない！

2人は色々、優しい言葉をかけてくれる……やっぱり労ってもらえるのって嬉しいな。病弱っ子路線でちやほやされるってのもいいかも……

えへへ、と顔が緩むのを感じた。教室に戻ってきて良かったなあ…。

ちやほやされる喜びにひたっていたら、「後藤さん！」という声とともに、いきなり腕を掴まれた……え？

「ごめん、ちよつと来て！」

「えっ、あつ」

そのまま声の主——畔くんに連れ去られる。

なんでこうなってるのか分からない。こんなことなら保健室で寝てれば……というか畔くん私のギターケース持ってない？　そ、それより、

（わ、私のちやほやタイムがあ——!!）

畔くんに連れ去られた先は、5組の教室の前だった。

私にギターケース（やつぱり私のだった）を押し付け、畔くんは教室の中を確認して「よしー」と言っている。意味が分からない。お願いだから説明してほしい…。

困惑したまま俯いていると、畔くんが教室の中を指さして、話し始めた。

「あそこに喜多さん……赤い髪の女の子なんだけど、分かる？」

「あつ、はい」

畔くんが指さした方を見てみると、すぐかわいgirlの子がいた。友達らしき人たちと談笑しているみたい…。

遠目に見てるだけなのに、人気者オーラが漂っているのが分かる。なんかあの子のいる一角だけ明るく見えるような…？

「彼女ギター弾けるんだって。だから結束バンドのギタボにどうかなくて」

「あついいですね」

「だよね。というわけで後藤さん、声かけてきて」

……今なんか信じたくない言葉が聞こえた気がする。呆然として畔くんを見ると……あ、これ本気のやつだ。私があの子を勧誘するの？

いやあんな人の輪の中に入るなんて無理……と一歩下がったら、逃げようとしたのを察知したのかまた腕を掴まれてしまった。こ、こわい…。

「ほ、畔くんがいけば……」

「後藤さんが行かないと意味ないんだって！ ほら僕メンバーじゃないし……」

「せ、せめて心の準備を……明日また」

「今日じゃないと駄目なんだよ！」

「ほら頑張れ！」なんて言つて、畔くんはぐいぐい背中を押してくる。それに抵抗しながら色々と言いつつ訳を並べてみるけど……全然納得してくれそうにない！

今日の畔くんはいつも以上に押しが強い……。なんて思っていると、「ねえ」と声をかけられた。だ、誰……？

「2組の人よね、ここで何してるの？」

喜多さんが目の前にいた。

近くで見るとまた一段とかわいい。圧倒的な陽キャオーラ。クラスでちよつとちやほやされただけで調子に乗つてた私とは格が違う、本物の陽キャ……！

圧倒的な格の差を感じ、太陽に近づいたイカロスの翼のごとく、私のプライドが溶けていく……。

このまま勧誘なんて無理——となった私は、全速力で逃げ出したのだった……

~~~~~

(しまった、焦りすぎたか……)

後藤さんを喜多さんに会わせるところまではうまくいったけれど、喜多さんに気を取られた隙に逃げられてしまった…。

どうする？ 今日ダメだと色々まずいし、放課後に直直すしかないか？ ただ、どうせ放課後は友達と遊ぶ予定入れているらうし、うまくいくかな…。

あ、でも後藤さんの逃げた方向って…と考えながらプランを組み立てていると、気まずそうな顔をした喜多さんに声をかけられた。

「えつと…。畔くん？ 追いかけていいの？」

「あー。そうだね……」

周りを見ると、結構な人がこっちに注目している。あれだけ騒いでいれば当然かな。

この状況なら……出直すより、決めにいった方がよさそうだ。

にっこり笑って、喜多さんに向き直る。嫌な予感を感じ取ったのか、喜多さんが教室に戻ろうとするけれど……もう遅いって。

「後藤さん、喜多さんに用があつてきたんです。ちよつと気が動転して逃げちゃったんだけど」

「そうなのね。それで…？」

「今ちよつとだけ時間もらえませんか？ 後藤さんとお話してほしくて……」

お願いします、と90度近く頭を下げる。オーバーアクション気味だがこれでいい。

誠心誠意頼み込んでいるように見せかけて、周りにそれっぽい空気ができればこつちのもんだ。

……頭を下げ続けてしばらくすると、喜多さんが口を開いた。

「後藤さんの居場所は分かるの？」

「はい。心当たりがあります」

「そう…。分かったわ、案内してくれる？」

クラスの友達に「ちよつと行ってくるね」と言つて手を振ると、喜多さんは歩き出しました。よし、うまくいったな。

喜多さんを先導するように、階段の方に向かう。たぶん、ギターの音色が行き先を教えてくれるだろう。

それにしても、

（周りの空気に流されやすいところ、変わってないなあ……）

喜多さんと僕の出会い、小学校時代まで遡る。

当時の僕は会話の仕方がよくわからなくて、友達も全然できなかつた。あのまま育っていたら、あるいは後藤さんのようにぼつち街道を歩んでいたかもしれない。

そんな時に喜多さんと同じクラスになって、クラスの輪の中に引きずりこまれて……。彼女が「クラスメイト全員と友達になるの！」なんて言っていたのを今でも覚えていて。喜多さんに引つ張られて過ごすのは大変だったけれど、彼女の話し方を参考にしたらおしやべりもできるようになったし、少ないながら友達も作れるようになった。つまり、僕にとって喜多さんは恩人ともいえる相手だ。逆に喜多さんにとっては、数ある昔の友達の中の1人といったところだろうか。

クラスが別になり、学年が上がるにつれて自然と疎遠になり、中学で同じクラスになった時もクラスメイトとしての交流しかなかった。喜多さんもさすがに、中学では男の子と積極的に交流をしたりはしなかったし。

切れてないのが不思議なくらい、細い繋がりだけど……。今回は昔の経験が役に立ったな。

昔を思い出してちよつと懐かしい気持ちに浸っていると、喜多さんが「久しぶりね。なんか懐かしくなっちゃった」と呟いた…。

ちらり、と喜多さんの様子をうかがう。

さっきのセリフ、にこにことした笑顔……。それに隠された冷たさ。うん、ちよつと怒ってるな。周りを扇動して連れ出したのはやり過ぎだったらしい。

幸いそこまで怒ってはなさそうだけれど、ここでスルーしたり開き直ったりすると本気で怒られそうなので、ゴメン——と軽く謝罪しておく。

やっぱりそこまで本気ではなかったようで、謝るとすぐにいつもの笑顔に戻ってくれた。

ちょうどいいタイミングで、ギターの音も聞こえてくる。これぞ新曲：ダブル黒歴史——じゃないな。別の曲名だろうけど、なんだろう…？

喜多さんは後藤さんをロックオンしたらしく、目を輝かせている。これでもう大丈夫かな。

演奏が終わったタイミングで、喜多さんが後藤さんに声をかけた。後藤さんは褒められてふにやふにやになったり、陽キャオーラに焼かれかけたりと忙しそうだ。

時計をみたところ、休み時間はもうそんなに残っていない。早いところ勧誘の話をしてない…。

「あ、何か用事があるのよね。どんな用事？」

「えっあつ…。じ、実は——」

後藤さんがバンドのギター探しをしていることを（超早口で）説明するも、喜多さんは当然OKしない。

断られてうなだれる後藤さんを見かねてか、喜多さんはギターが弾けないことを説明し、ギターの先生になってくれとお願ひし始めた。

褒められるたびに柔らかくなり、先生になってくれと迫られては固まる謎の生命体こと後藤さんが、助けを求めてちらちらこつちを見てくるけれど……ごめん、追い打ちかけるね。

「いいんじゃない？ 前に僕にも教えてくれるって約束したし」

「え、本当!?!」

「えっ……………あつ」

「うん。初ライブの日に約束したんだ。今日の放課後とかなら空いてると思うよ」

「良かった！ バイトの場所って——」

どさくさ紛れにしたものだけど、約束は約束。

絶望して顔面が崩れてきた後藤さんを置いて、喜多さんと話を進めていく。放課後の予定が決まったところで、チャイムが鳴った。休み時間は終わりか。なんとか時間内に話ができたな…。

チャイムの音で喜多さんが慌てて立ち上がり、教室に戻ろうとした——と思ったら、からかい交じりな表情で爆弾を落としてきた。



「噂には聞いていたけど、仲がいいのね！ 畔くん頑張つてね」

そう言い捨てると、喜多さんは今度こそ立ち去っていった。

……噂つてアレしかないよね。あの表情と話し方からすると、からかい半分、恋バナでのウキウキ半分つてところかな。目がきらきらしてたし…。

噂のことを思い出してげんなりする。噂の内容は、僕が後藤さんに言い寄つてるとかいう根も葉もない……いや客観的に見ればそう見えるところがあるのかもしれないけど、実情とは全然異なるものだ。最近まで知らなかったけれど、いつの間にかそんな噂が流れていたらしい。他のクラスにまで届いていたのか…。

喜多さん勧誘はうまくいったのに、最後にケチをつけられてしまったような気分になる…。

「あつあの…。教室に戻らないと……」

「うん…。そうだね、戻ろうか」

「あつはい…。ところで噂つて…?」

ちよつと落ち込んでいたら、いつの間にか復活した後藤さんが声をかけてきた。噂について聞かれたけれど、教える気にならないので無視する。知らないままでいてくれ

…。

無言のまま教室の前まで戻ると、後藤さんが僕の背中にくつついてきた。何があつた？

「扉を開けたとき、その……視線が……」

「え……？ ああ、視線が集中するからか」

授業中の教室に入るのを目立っし、後藤さんには荷が重いよね。

まあ盾にされるくらいいいかと思つて扉を開けようとしたけれど……待てよ？

さつき僕は、後藤さんを半ば強引に教室から連れ出したんだよね。それで授業に遅れて、2人で教室に戻るの？

（噂が加速……。いやそれ以前に、盛大に怒られるやつでは？）

普段は何気なく通過する教室の扉が、何か恐ろしいモノに見えてくる……。

これから起こる苦難を想像して震えながら、僕は扉に触れたのだった。

## 理解不能な感情を求めて

放課後。

高校生3人組が、下北沢駅に到着した。

赤い髪の少女は、やめたバンドの先輩に見つかからないかとあたりを警戒し……  
ピンク髪にジャージの少女は、オシャレな街並みに気後れして縮こまり……

そして唯一の男子生徒、もとい僕は、ちよつと煤けていた。

結局あの後、授業に遅刻した僕と後藤さんは、先生から怒られてしまった。

後藤さんはクラスメイトがとりなしてくれて無罪放免となったのだが……僕のは誰もかばってくれず、授業中の朗読を全部一人でやるといふ罰を課せられた。噂のこともあるし、散々な目にあっている気がする。

(まあ、原作ストーリーは順調に進行してるからいつか……)

なんだかんだストーリーの修正はできたし、その代償と思えば安いものだろう……。たぶん。

下北沢の街中を、僕・喜多さん・後藤さんの順で歩く。行き先がSTARRYだということは、当然喜多さんには秘密にしている。

行き先が逃げたバンドの拠点であること——もつと言えば、後藤さんが所属しているのが自分が元々いた結束バンドだと知ったら、すぐに帰ろうとするはずだし。まあ、仮に逃げようとしたらすぐに取り押さえるつもりだ。

他愛もない雑談をしながら、意外とロクな元幼馴染喜多さんの様子をうかがう。

着々とSTARRYに近づいているからか、どうもすわりの悪さを感じているようだ。STARRYが見えてきたし、そろそろエナドリ抱えた虹夏さんが見えて……こないな。

喜多さんがついに勘づいてしまったのか、後藤さんに「ね、ねえ。そういえば後藤さんが所属しているバンドって——」と尋ねている。やばい、タイムリミットだ。

いつでも捕まえられるように備えつつ、高速で頭を回転させる。なんで虹夏さんがこないんだ？ 時間の問題……お昼の会話……あ、

（後藤さん、パリピバンドの話をしてない！）

原作では勧誘を断られた時、結束バンドをパリピバンドのように話してアピールする

シーンがあるのだけれど……お昼の会話ではあつさり引き下がってしまっていた。パ  
リピバンドの話がなければ、虹夏さんがエナドリを買うはずもない。自発的な勧誘でな  
かった結果が、こんなズレを生んでしまうとは……!

ついに真相を知り、逃げようとする喜多さんのギターケースをガツチリ掴む。ついで  
に後藤さんにも喜多さんを捕まえるように言うが……状況についてこれてないな。主  
人公しつかりしてくれ。

「畔くん!? ちよ、ちよつと放して」

「事情は分かっているから! 謝りにいこうよ、ね!」

「うっ……。で、でも……」

事情を知られたことで逃げる力は弱まっているけれど、まだ油断できない。

後藤さんはおろおろするだけで役に立たなそうだし……僕が説得するしかないのか  
? え、なんて説得すればいいのか分からないんだけど――

「ここで逃げたら、喜多さんのやったことを言いふらすよ」

「うぐうっ……」

脅迫しか思いつかなかった。

喜多さんは観念したみたいだけど……。泣いてるし、すごく悪いことをした気分だ。後

藤さんも心なしか白い目で見ている気がするし、通行人の視線も……

居心地の悪さに耐えきれなかった僕は、早く入ろうと2人を促してSTARRYの中に駆け込んだ。

~~~~~

(……なんか、怒涛のような展開よね)

服を着替えながら、喜多郁代はそう思った。

突然女の子に謝罪されながら逃げられ、昔の友達に嵌められて追いかけることになり、ギターを教えてもらうことになり——出向いた先で先輩たちと再会、謝罪しても気が収まらず、なぜかメイド服に着替えて手伝うことに……

先輩たちにはまだ合わせる顔がないけれど……謝罪の機会を得られたのは良かったと思う。私がいきなりやめたことで、めちやくちやになったのではと心配していたライブの件も、後藤さんのおかげでなんとかなったと知ることができた。

……とはいえ、その状況に至った元凶の1人には、感謝というより複雑な気持ちであるが。

(やっぱり畔くん、私が「逃げたギター」だって分かってたのかしら)

ちよつとずる賢い元幼馴染を思い出す。

畔くんはアドリブで動くことも多いけど、基本的には事前準備をしつかりするタイプだ。ボーカルの勧誘をしようと私に目をつけたのなら、事前に話くらい通してくるはず。それをしなかったのは、詳しい話をすれば断られると分かっていたからかも…。

だいたい畔くんがああ顔になった時点で、嫌な予感はしていたのよね。小さい時、何度あの顔で当番や手伝いとかを押し付けられたことか…。

今度お返ししなきゃね——なんて少女が思った時、ホールでは畔一保が窮地に立たされていた……

~~~~~

(!? い、今なんか嫌な予感が……)

虹夏さんにお説教される中、突然嫌な予感に襲われた。

お説教の内容は……端的に言えば、後藤さんに無理させすぎたという話だ。

後藤さんはお弁当をほとんど食べていない状態で倒れ、教室に戻ってきたら僕に連れ

出されて休み時間はなくなり、放課後もすぐSTARRYにきた。つまりお腹がすいていたわけで…。

お腹が鳴った音をきっかけに、昼間の所業が芋づる式に暴かれた結果…：虹夏さん激おこからのお説教が始まったのである。

「喜多ちゃんを連れてきてくれたのはありがとうだけど、ぼっちちゃんのこともいたわってあげてよ」

「はい。すみませんでした…。」

「謝るのはあたしじゃないでしょ?」

「はい…。後藤さん、大変申し訳ございません…。」

命じられるがまま、食事の後藤さんに謝る。

嵐が過ぎ去るのを待っていると、喜多さんが戻ってきた。これでお説教終わるか…?

「戻りました…。この状況はいつたい?」

「ああ喜多ちゃん。ぼっちちゃんはお昼あまり食べられなかったんだって。畔くんは女の子の扱いについてお説教中だよ」

「へえ…。そうですか」

2人揃って冷たい目を向けてくる。喜多さんは助けにならなさそうだ…。

リョウさんは? と思つて探してみると、後藤さんにお弁当のおかずをたかつてい



た。やっぱりベーストって…。

まだまだ続きそうなお説教ムードにげんなりしていると、意外なところから助け船がきた。

「お前ら、そろそろバイト始まる時間だぞ」

「あ、もうこんな時間！ ほらみんな、バイト始めるよ〜」

「ぼっちはどうするの？ 体調悪いなら休む？」

「あついや…。がんばります」

店長さんの一言で、お説教の嵐はかき消えた。

虹夏さんたちから開放されて一息ついていると、星歌さんが「お前はどうすんの」と聞いてきた。これは…：…手伝うんじやなければ帰れって流れかな。

罪滅ぼしもかねて手伝うことを伝えたが、断られてしまった。人手はもう十分だし、よほど負い目があるとかじやなければ、タダ働きはさせないんだとか…。喜多さんの手伝いを提案したのも、気持ちの整理をつける側面の方が大きそうだ。

星歌さんには「邪魔しないのであればしばらくここにいていいよ。開場前には帰りな」と言われたので、のんびり結束バンドの様子を見させてもらうことにする。

今は後藤さんが“ダメバイトのエレジー”を奏でているシーンだ。なんかふわふわと魂のようなものが昇っていくように見える…。疲れてるのかな？ いや後藤さんだし幽体離脱なんてお手の物とか…。

そろそろ出番だな——と、鞆の中身を確認する。ハンカチとミニタオル、塗り薬……。すぐに取り出せるようにして、その時をまった。

喜多さんの悲鳴が上がる。後藤さんがやけどをしたからだ。

虹夏さんや星歌さんの慌てた声を聞きながら、僕はいち早く、後藤さんに駆け寄った。喜多さんが後藤さんの手を冷やそうとしているのを手伝い、薬やタオルを準備する。こぼれたコーヒーの後始末をしながら、喜多さんたちの会話に耳を傾けた。

「ぼっちちゃん大丈夫？ けがの具合は？」

「あついえ。そんなにひどくないです……」

どうやら後藤さんのやけども大したことないらしい。まあ原作でもギャグ調で流されていたし、重症になることはないだろうと思っていたけど。

喜多さんが後藤さんの手を握っているし、たぶん勧誘もうまくいくだろう。開場までしか居られないなら、もう見どころもないだろうし…。帰ろうかな。

荷物をまとめて帰ろうとしたところで、虹夏さんに「あ、待って！」と呼び止められた。まさかお説教の続き……はないだろうけど、何かあったかな？

振り向くと、虹夏さんは満面の笑みで口を開いた。

「さつきはありがとう！ ぼっちちゃんの手当てしてくれて」

「……いや、あれは喜多さんが」

「でも真つ先に駆け寄ってくれたよね。コーヒーの後始末もしてくれたみたいだし」

真つすぐに感謝を伝えてくる虹夏さんから、目をそらす。

「また今度ね」という声に当たり障りのない返答を返して、僕はSTARRYを後にした。

——目を閉じて、前世の記憶を思い出す。

前世の自分は、ぼざろの物語がとても好きで、音楽に感動し、グッズも大量に買っていた。

アニメを見ている時の感情は楽しさで満ちていて——その感情が、僕には理解できない。

面白くないわけじゃない。ギャグは見ていて面白いし、ライブシーンもすごいと思う。

でも前世の自分が感じていたような“熱”が、僕には感じられない。

前世の自分は、後藤さんのどこに、そんな魅力を感じていたんだろう…？

…変なことを考えていたら、いつの間にか眠っていたらしい。

自室のベッドの上で、目を覚ました。

人に優しくするのは、それを見せて他人によく思われるため。菓子折りも、薬を用意したのも、その方がよく思われそうだからという打算込みでのこと。罪悪感や心配がないわけじゃないけれど、それだけなら僕は動かなかっただろう。

だから虹夏さんみたいに真つすぐな目で見られると、なんだか逃げたくなってしまう…。

後藤さんの行動は面白い。

結束バンドのみんなもかわいし、性格も一部を除いていい子ばかり。一緒に過ごす時間は楽しくて…でも実のところ、全力で応援しているわけではない。

ごろり、と体の向きを変え、スマホを手に取る。

虹夏さんから《喜多ちゃんが結束バンドに加入しました!》なんてメッセージが届いていたので、祝福のメッセージを送っておいた。

(僕のようなつまらない人間でも、結束バンドと関わる中で、何かを得られるのかな…?)

窓の外を見ながら、そんなことを考える。

窓の外の風景は真っ暗で、わずかな建物の灯りだけが、その暗闇を彩っていた。

## 閑話 6月上旬の3ページ

〔E p 1. ぼっちちゃんの名前〕

STARRYでの合わせ練習の日。

結束バンドの4人が休憩中に雑談していた時のこと……

「え、ぼっち学校に友達できたの？」

「あつはい。最近、何人か話しかけてくれるようになって……」

「すごいじゃん！ 良かったね〜」

風邪をひいて休んで以来、時々学校の人と話せるようになった後藤ひとり。

倒れて保健室に運ばれたこともあり、初日ほど多くの人がかかるわけではないが、それでも（畔一保以外に）誰とも話さず1日を終わることはなくなった。もつとも、教室で食事をするにはあれから一切なかったが…。

虹夏や喜多がひとりの快拳を祝う中、山田は一人だけ浮かない表情をしていた。異変に気付いた虹夏が問いかけると、山田は重々しい口調で、ある命題をなげかけた。

「ぼつちがぼつちじゃなくなったら、もうぼつちとは呼べないのでは？」

——ひとりと虹夏に戦慄が走る。

確かにそうかも知れない。ぼつちという名前はひとりぼつちからきたのであり、つまりひとりぼつちでなくなつたからにはもはや別の名前が相応しいのかも…？

そしてこの命題を解決すべく、虹夏が音頭をとつた。

「よし！ じゃあぼつちちゃんの新しいあだ名を考えよう〜！」

「楽しそうですね！ 賛成です！」

虹夏の音頭に対して、ノリのいい喜多が追従する。山田は掛け声などはあげないものの、話に参加する様子を見せていた。

ただ1人だけ思考の迷宮に取り残されているひとりを除いて、3人の白熱した議論が始まり――

「あつあのー！」

後藤主役ひとりの発言によって中断された。

3人の視線が集中する。その視線に気おされながらも、ひとりはずたどしく、自分の気持ちを口にし始めた。

「そ、その……。できれば〝ぼっち〟のままでもいいなって……」

「ええ!? あたしたちの考えた名前、微妙だった?」

虹夏があげた疑問の声に、ひとりは首を何度も横に振って、答えた。

「は、初めてのあだ名だし、結束バンドでの思い出があるから……」

ひとりの言葉に、スタジオが静まり返る。

あつけにとられた様子の虹夏だったが、やがて優しい表情に変わった。

(そっか……。ぼっちちゃんにとってここは……)

結束バンドを、そんなに大切に思ってくれていることが嬉しくて、心がぼかぼかする。

温かな気持ちで〝ぼっちちゃん〟を見つめていた虹夏だったが、見つめているうちに彼女の様子がおかしくなっていくのに気がついた。

ぼそぼそとしたつぶやき、だらしなく緩んだ表情。

内容こそ分からないものの、一人の世界に入り込んでいるのは確実に分かる。たぶんインタビューで名前ネタを披露する妄想でもしてるんだろうな……と思うと、心の温度



がぬるくなっていった。

冷めていく心に氷水を浴びせるかのように、リヨウと喜多ちゃんの話が耳に入る。

「犬は名前を変えると混乱するらしい」

「せ、先輩。後藤さんはペットじゃないですよ…？」

色々台無しだなあ……と思うも、ツッコむ元氣すら出てこない。

呆れまじりの虹夏の声を合図に、また楽器の音が鳴り始めた――

## 【E p 2. 感謝とお返し】

6月のある日。

畔一保は、とあるカフェで軽食をとっていた。

発端は虹夏さんから《一緒にどこかで食事しない？ 日頃の感謝つてことで奢らせて

ほしいな》とロインがきたことである。

結局STARRYでバイトをしてないから金欠気味だし、虹夏さんと交流を深めるのは良さそうなので、ありがたく誘いにのったわけなのだが…。

(なんでリヨウさんもいるんだろう…)

なぜか山田リヨウもついてきていた。

いやどうせタダ飯狙いなのは読めるんだけれど…。こっちは当然奢る気はないし、虹夏さんには何度も釘をさされているのに、全く動じる気配がない。

喜多さんのベースを買って、金欠になつてはるはずなのに…。高めのメニューを躊躇なく頼み、平然とした様子でいる。

「リヨウ、本当に大丈夫なの？ 給料日はまだ先だよ？」

「大丈夫。あてがあるから」

「……………」

今「あてがあるから」って言った時、こっちを見なかつたか？

どうにも不気味というか、嫌な予感がするんだけれど…。

食事をしながら、虹夏さんやリヨウさんと雑談をする。特別に話したいことがあるわけではないらしく、話題はころころ変わっていった。休日の過ごし方、後藤さんの様子、星歌さんの愚痴など…。

ちようどいいから、ギターについてアピールしようと話題に出したのは失敗だったな。リヨウさんが滅茶苦茶食いついてきて、山のようにおすすめの練習法や本を紹介された…。そんな真剣にやるつもりはないんだけれど。

食事を終え、色々おしゃべりして……話がとぎれたところでお開きとなった。

僕の分の会計は虹夏さんが持つてくれるので、あとはリヨウさんの分なただけけれど……どうするつもりだろうか？

様子をうかがったけれど、財布を出すそぶりも見せない。虹夏さんが支払いを要求すると、

「じゃあ畔、私の分よろしく」

「なんで僕が払うんですか？」

リヨウさんの言葉で、臨戦態勢に入る。なぜ僕が山田さんの分を奢らないといけないんだ？

空気が重くなり、バチバチと火花が鳴る。虹夏さんが山田さんを止めているのに、全く譲る気がなさそうだ。なぜか嫌な予感が強まっていく。こいつ、何を考えて――

「喜多から魔法の呪文を聞いている」

「え、喜多ちゃん？」

「路上、涙、言いふらす……だって」

……リヨウさんの言葉に、天を仰いだ。おしゃれなカフェの天井に、喜多さんの顔が

うかぶ。

“そういえば子供の時、喜多さんに手伝いを体よく任せたりしたら、決まってその後”  
お返し”があつたんだっけ。苦手な遊びに付き合わされたり、おやつを献上させられたり…。

もはやこれまでか、と財布を取り出した。

「謹んで払わせていただきます……」

「うむ、よきにはからえ」

「な、なんかごめんね」

申し訳なさそうな虹夏さんの声を最後に、食事は終わった。後で喜多さんに謝っておこう…。これ以上リョウさんにたかられるわけにはいかない。

虹夏さんが多めに出してくれたとはいえ、財布はちよつと軽くなった…。

【E p 3. 開店前のふたり】

私がSTARRYの扉を開けると、店長が書類を読んでいた。

「おはようございます…。あれ、店長なに見てるんですか？」

「おはよう。新しいバイト候補の履歴書」

そういえばこの前バイトやめた子達がいきましたね。まあノルマ代さばけるようになったから辞めるっていうのは、悪い話ではないのかな。

店長がずいぶんと熱心に見てるのが気になって、私もちよつと覗いてみると…。うーん、相変わらず下北沢高校の生徒がぼつぼつと。近いのもあるんだろうけど、たぶん結東バンドの2人目当てでしようね。進学校じゃなければもつと増えてたかも。

このあたりはほぼ落ちそうだな……と思いつながら履歴書を見ていたら、気になる名前ものを見つけた。

「あ、喜多ちゃんに畔くんも受けるんですね」

「ん、まあね」

どうでもよさそうに店長は答えるけど……視線は正直ですね。さつきからずっとそれ見てるじゃないですか。

まあ喜多ちゃんは結東バンドのメンバーだし、仕事や人柄も問題なさそうだから受かるとして…。問題は畔くんの方かな。性格とかはあまりよく分からないし、履歴書は……高校生にしてはよく書けてるけど、ちよつと薄っぺらいような…？

書類を読む店長を眺めていると、いきなり視線がこつちに向いた。

「って勝手に見るな！ あつちいつてろ」

「はーい」

クスクスと笑いながら、警戒する猫のようになった店長から離れる。  
虹夏ちゃんたちの行く末を思いながら、今日の仕事の準備にとりかかった。

## 移り変わる空模様

一通り挨拶をすませ、促されるのを待って、席につく。

目の前には星歌さん。書類とパソコンがテーブルに置かれている。

今日はSTARRYでの面接日。バイトの面接なんて初めてだし、緊張するんだけど…。

「今日はよろしくね！ 畔くん」

……なんで虹夏さんは星歌さんの隣にいるんだろう？

僕の疑問の視線を理解したのか、虹夏さんは笑って答えた。

「ちよつと気になっちゃって。店長に無理言っただけで同席させてもらったんだ。邪魔するつもりはないから」

「どうする？ 気になるならあっち行かせるけど」

「……いえ、大丈夫です」

ホールの片隅で、星歌さん・虹夏さんと向き合う。

虹夏さんが同席したがる理由はよく分からないけれど、虹夏さんがいることはプラスに働きそうだし、この方が緩い雰囲気が進みそうだからありがたい。

星歌さんは妹に甘いし、あっさり採用が決まるパターンかもしれないな。うん、やっぱり先に『結束バンド』と交流を深めるのはいい作戦だった。

妹に邪魔しないよう釘を刺すと、星歌さんがあらためて僕を見る。

面接が始まった――

――面接が始まって数分。

予想通りというべきか、大した内容は聞かれない。

志望動機は「結束バンドを手伝いたい」「文化祭実行委員として機材やライブ準備に関心がある」といった内容を履歴書に書いておいたし、ギターについても話のネタとして活用できた。

指の皮の硬さもアピールできた。毎日30分は弦に触れるようにしていたから、それなりのものにはなっているはずだ。腕前の方は最近全然成長しないし、そのうち喜多さんに抜かされそうな気がするけれど……。まあそれは別にいい。



少し緩めの雰囲気の中、いつも通りの表情の星歌さんが口を開く。

「ま、あらかた虹夏たちから聞いていた通りか」

星歌さんは一言つぶやくと、目を閉じて考え事を始めた……

もう質問は終わりだろうか。この感じなら合格できそうかな？ 虹夏さんも最初は

硬めの笑顔だったのが、今はだいぶリラックスしているようだし……ちよつと気を緩め  
ても大丈夫そうだ。

「お前、好きなバンドってあんの？」

しばらくして目を開けた星歌さんから追加の質問がくるも、内容はもう雑談に近い。

結末バンドと答えると、星歌さんは呆れたような顔で「そういうのじゃなくて、よく

CD聴いてるとか、ライブ見に行くとか」と補足してきた。そういうことなら、

「SIDEROSや、ケモノリアとかは好きです」

「SIDEROSか。ちよつと意外なところではあるが……」

僕の答えに目を細めた星歌さんは、続けて何個も質問を飛ばしてきた。ライブに行つたことがあるか、好きな曲は、どんなところが好きか……

原作知識を参考に答えられるところは答えてみたけど、曲名とかはど忘れとかで誤魔化すしかなかった……。結構深掘りしてくるけど、これって面接の一貫かな？ だとした

ら結構ヤバイ…?」

虹夏さんがちよつと不安そうな様子を見せる中、質問を終えた星歌さんが、また目を閉じた。

次の言葉は何だろう? 合格、不合格、結果は後日…:それともまだ質問が続くのか? ドキドキしながら待ち続け、やがて星歌さんが発した言葉は――

~~~~~

「なるほどね…。だいたい分かった」

面接が終わりそうな気配に、あたしは背筋を伸ばした。後半ちよつと良くなかったし、落ちたらフォローしてあげないと。

そして、お姉ちゃんの次の言葉は――

「虹夏、次のライブはいつするつもりなの?」

「えっ?」

なぜかあたしの方に鋒先を向けてきた。

バイトの面接は? って気になるけど、お姉ちゃんの顔は真剣で、聞き返せる雰囲気じゃない…。えっと、ノルマ代とか曲の制作時間とか考えると…:

「そろそろノルマ代たまるし、8月にしようかな」

「ふーん……。一応確認だけど、ただでライブさせる気はないからな」

「ん？ チケット代なら払うって……」

あたしの反応が気に入らなかつたのか、お姉ちゃんの目が険しくなる。

戸惑うあたしに対して、お姉ちゃんはこう突きつけてきた。

お金がたまって、実力が伴わなければライブに出すつもりはない。

7月末にオーディションをするから、それまで練習しておけ。

……せつかく喜多ちゃんも再加入して、これからだーって時に水を差されちゃった。ついお姉ちゃんをにらんでしまうけど、当然のことだし何も言えない……。

むくれるあたしの視線を全く意に返さずに、お姉ちゃんは畔くんに「7月末は予定空けときな」なんて言ってる。

これってオーディションライブ見にきていいって意味だね。バイトの話はどこにいったの？

「ねえお姉ちゃん、結局バイトについてはどうなの？」

「ああ、それね……」

あたしの言葉に対して、お姉ちゃんは珍しく言いよどむ。畔くんも居ずまいを正しているけど、この態度からすると…。

「ギターの練習はよくやってるみたいだけど、その先がぼんやりしてる。バンド組んでライブしたいってわけでもなさそうだし」

「機材などへの興味にしたって、この前好きにしているっていいって言った時、目で追っていたのは虹夏たちの方。目の前に私がいるのに、何も聞こうとしなかったよね」

「好きなバンドの話も含めて、あまり真剣に向き合っているようには見えない。ライブもろくに見たことないなら、ライブハウスにこだわる必要はないだろ」

——想像以上のフルボッコだった。

お姉ちゃんの駄目出しの嵐に、畔くんは黙って俯くしかなくて…。畔くんの気持ちを思うと、ちよつといたたまれなくなってしまう。

つい視線をそらしてしまふと、いつの間にかホールにいたりヨウと目があった。リョウは何も言わず、足早に歩きだす…。あいつ雰囲気を感じて逃げたな。

「接客のバイトなら他にいくらでもあるし、虹夏たちを手助けしたいだけなら、ここでバイトする必要はない…。話はこれで終わり」

「……今日はありがとうございました。失礼します」

リヨウが消えるのと同時に、お姉ちゃんの話は終わった。

話が終わった瞬間、畔くんは足早に出て行ってしまふ。あたしは畔くんを呼び止めようとして——なんて言えいいのか分からなくて、声をかけられなかった。

畔くんが出ていったあと、あたしはふらふらと椅子に座りこんだ。

考えるのは、さっきお姉ちゃんが言ったことについて。

（あたし……畔くんのこと、何も分かってなかった）

畔くんとぼっちちゃんの関係も、なんでギターを練習しているのかも、結束バンドのことをどう思っているのかも……。お姉ちゃんの指摘したことだって、気づける余地はいくらでもあったはずなのに、全然考えもしなかった。

初ライブの日からあたし^{結束バンド}たちのことを色々助けてくれて、そのうち仲良くなれた気がしてたけど……そもそも畔くんはどうしてそうしてくれたんだろう？ 友達の所属するバンドだから応援している、本当にそれだけなんだろうか？

……あと気になるのが、ぼっちちゃんとの関係だ。

まだ短い付き合いだけど、やっぱりあの2人の距離感はおかしい。ぼっちちゃんが内向的っただけじゃなくて、畔くんからぼっちちゃんへの接し方にも妙な違和感があるよ

うな…？

畔くんに対して様々な疑問が湧きあがってきて…：あたしはそれを、いったん追い出した。

パンツと頬をたたいて、気持ちを切り替えようとする。気になるところは多いけど、お姉ちゃんがオーデイションに呼ぶなら、悪い人つてことはないはず。まだ一ヶ月足らずの関係なんだし、これから向き合っていけばいい。

それよりも、あたしには結束バンドのリーダーとして、やらなきゃいけないことがある。オーデイションという目標に向けて、みんなを引っ張っていかないと。

今もスタジオ部屋で練習をしているぼっちちゃんと喜多ちゃんに、変な顔を見せるわけにはいかないよね。手鏡で顔を確認して…：うん、大丈夫。いつものあたしだ。

心配そうに見てくるお姉ちゃんに対してニヤリと笑って、3人が待つスタジオ部屋に向かう。

オーデイションの件、みんなに伝えるのはいつ頃にしようかな？ リヨウはともかく、ぼっちちゃんと喜多ちゃんにプレッシャーは与えたくない。今日だって喜多ちゃんの息抜きをしようと思ってたんだし、もうちょつと時期をみて…。

意気込んで訪れたスタジオ部屋で。

高速で首振りをする2人を撮影して楽しむリョウに、雷を落としたりちやっただけど
……あたしは悪くないと思う。

思い出の詰まった1枚を

バイトの面接から数日後。

あれからSTARRYには行っていない。

喜多さんや後藤さんとギターの練習をするのも、スタジオまでは同行せず、学校にいらる間だけになっている。ギターの練習そのものはまだ続けているけれど……そろそろ潮時かもしれない。

(ギターもまた、これまでの趣味と同じ……か)

今まで色々な趣味を試してみたけれど、結局はいつも同じ。何カ月もしないうちに飽きて、やめてしまう。モチベーションが続かない。

星歌さんに言われた通りだ。僕はギターを弾いた先に、何かをする未来を想像できない。星歌さんはダメな大人扱いされることもあるけれど、後藤さんの実力を見抜いていたように、鋭い観察眼を持っているのだろう。僕が用意した建前なんて、簡単に壊されてしまった。

学校で2人と一緒に練習しているのと、ぼぎろの曲を再現したいという目標があるから、まだギターは続けていられる…。でもいつまでこの思いは持つのだろうか？ 腕前は一向に上がらず、かといってたくさん練習する気にもならない。これは、もう…。

心に暗い予感が広がるのを感じながら、ベッドから這い出る。掛け布団がまとわりついて鬱陶しかった。

部屋の片隅にある収納ボックスの中には、僕が今までやってきて……もうやめてしまった趣味の品がたくさんしまわれている。

僕はその中からカメラを取り出し、明日持つていく鞆に入れた。

次の日。

虹夏さんから呼ばれた僕は、下北沢の駅前にいた。

今日やることは他でもない、結束バンドのアー写撮影だ。本当はその前にバンドミーティングがあったはずだけれど、呼ばれなかった…。まあバンドメンバーじゃないから、参加できなかったのはしょうがない。

アー写撮影会だつて呼ばれるかどうか微妙なところだと思うけれど……これは虹夏

さんの気づかいと思った方がいいのかな。面接以来よくロインを送ってくれていたし、今日会った時も僕の顔色を気にしていたし。

虹夏さんの真意はどうあれ、せっかくお呼ばれたんだ。楽しんでいこう。

カメラ係に徹すればそう違和感のない立ち位置でいられると思うし、写真を撮るのはわりと好きな方だ。趣味としては撮りたいものがなくなつて辞めてしまったけれど、結束バンドのみんなが被写体ならまだ楽しめるかもしれない。

さて、アー写撮影会での見どころといえば……

まずは土下座する後藤さん、各スポットでの撮影、バグり散らかす下北沢のツチノコあたりかな。

パンツだけは絶対に撮らないようにしよう。そんなことが起きればどんな目で見られるか……。特に喜多さんには、あの噂まで知られているのだし。

もう後藤さん以外は集まったから、第一の見どころまではあと少しかな。

この後の撮影の準備をしていると、虹夏さんが話しかけてきた。

「あれ？ 畔くんカメラ持ってきてくれたの？」

「はい。せっかくなので」

「結構良さそうやつ。良く買えたね」

高そうなもののセンサーを搭載しているのか？ カメラの値段を察したりヨウさんの言葉には、笑ってごまかしておいた。

このカメラは自分のお小遣いで買ったものではない。撮影の趣味はそこそこ長持ちしていたから、それを見た親が奮発してくれたんだ。それなのに、僕は結局無駄にしてしまつて……

（いや、ネガティブになつちや駄目だ。今日のイベントは明るい系、明るい雰囲気でないか）

ブンブン頭を振つて、弱気な心を追い出していく。

おかしいな。前は場の雰囲気にあわせて行動したり、ポジティブに考えることが自然にできていたのに……。なぜか思考がネガティブな方向に寄つていつてしまう。店長さんの言葉で、心が弱っているのかな……？

——自分のことで精一杯だった僕は、虹夏さんの心配そうな眼差しにも気づかないでいた。

~~~~~

「階段、フェンス、植物の前……あとは公園に、良さげな壁。定番どころはこんなところだね」

「良さそうな場所があったら、どんどん撮っていきましょうね!」

ぼっちちゃんも合流し(誠意の証として土下座されるハプニングはあったけど)、無事にアー写撮影の旅が始まった。

明るい喜多ちゃんと一緒にみんなを先導しながら、あたしはちよつと別のことも考えていた。それは、

(やっぱり畔くんって、あたしが思っていたようなタイプじゃないな)

畔くんについて。この前お姉ちゃんの話聞いてから色々考えて、今日も様子を見ていたんだけど……畔くんの性格は、あたしの思っていたのとはちよつと違う気がする。

社交的で周りの人を引っ張っていくタイプなのかと思っていたけど、よく思い返せば一歩引いた場所にいることが多かったし、内向的な性格をしている。カツアゲ疑惑から強引にこられた時の印象に引きずられていて、性格を正しく掴めてなかったのかな……? 今日歩き方なんか、結構分かりやすい。喜多ちゃんはあたしの隣にいて、畔くんがいるのはぼっちちゃんと同じ、最後尾。

今までは頑張って明るく振舞っていただけで、本当はぼっちちゃんと似た性格なのか

も。さつきも暗いオーラを放ち始めたと思ったら、突然首を振り始めるし…。

奇行が多くて、あまり言葉にはしてくれないけど、態度から分かりやすいぼっちちゃん。  
ん。

一見普通で、コミュニケーションもとれるけど、何を考えているのか分からない畔くん。  
ん。

対照的な2人なのに、なぜか似ているように思ってしまう。

畔くんの内心は、どうすれば分かるようになるのかな？ 以前食事に誘っておしゃべりした時なんかも、思えば自分のことはあまり話してくれなかったし…。あたしの方は色々話したけど、畔くんの休日の様子とか、ギターの話以外何も聞けなかった…。

いやあれはリヨウのせいかな？ 突然めんどくさいスイツチ入りおつて…。

ちよつとため息をつきそうになってしまい、慌ててそれを押し殺した。

危ない危ない。悩んでいるのが表にでないようにしないと…。喜多ちゃんに心配させちやいそうだし、写真にでちゃったら台無しだもんね。

よし、切り替えていこう——撮影スポットを見つけた喜多ちゃんに駆け寄って、あたしはみんなを呼び集めた。

それから、リヨウが途中で古着を見始めたり——良さげな壁を見つけたぼっちちゃん  
が、ふらふらと離れていきそうなのを呼び止めたり——イソスタの話になったらぼっち  
ちゃんが壊れたり——なぜか畔くんがジャンプの指導を始めた——とまあ、色々あつ  
たけれど。

アー写撮影もいよいよ大詰め。構想も固まって、最後の1枚を撮ろうとしていた。

「それじゃ行きますよ。3、2、1……！」

パシヤリ、と音が響くのに合わせて、みんなで手を繋いでジャンプする。

撮れた写真を見せてもらうと……うん、いい写真だ！ ぼっちちゃんの顔は暗めだけ  
ど、それも含めてみんなの個性が出てるし、明るい青春の雰囲気伝わってくる。

みんなもこの写真で良さそうなので、この写真をアー写にするということだけで決定し  
た。畔くんもリフレッシュできたみたいだし、いい1日になったな。

今日撮った写真のデータをあたしのスマホに送ってもらって……あ、もう1つやりた  
いことが。

「ねえ、畔くんもあたしたちと一緒に写真撮ろうよ！」

「……え？ いいんですか？」

「うん！ 喜多ちゃん、自撮り棒持ってない？」

せつかく1日カメラマンしてもらったのに、畔くんが入った写真は1枚も撮ってないからね。

喜多ちゃんに自撮り棒を持ってないか聞いてみると、やっぱり持っていた。イソスタの投稿頻度からして、喜多ちゃんなら絶対持ち歩いてるだろうなと思ったよ。

自撮り棒を借りて、写真を撮ろうとすると――

「あれ、リヨウは？」

「いつの間にかいなくなってますね……」

「えー……」

リヨウがいなくなっていた。あいつ、本当に自由だな。

今からロインで呼び戻したら……面倒ぐさがってこないだろうな。既読無視か、通知に気づかなかつたと嘘をつかれるのが関の山か。

呆れたため息をついても、状況は変わらない。せつかく5人一緒の写真を撮ろうと思っただのに……

「どうせなら5人一緒の時に撮りたいし、また今度にしようか」

「うーん……。そうですね、またにしましょう」

「……分かりました。じゃあ今日はもう終わりですかね？」

また5人揃う機会もあるだろうし、今度でいいか——なんて考えて。

あたしたち4人は、それぞれ別々に帰路についた。

~~~~~

リヨウさんに新曲の歌詞を見てもらってから、数日後のお昼休み。

私と畔くんは、学校の小部屋でギターを弾いていた。

この部屋は教室から離れていて、周りは理科室とかだから、授業中以外はあまり人が寄りつかない。お昼休みとか、スタジオ部屋が使えない日なんかは、ここで練習をすることになっていた。（先生に話を通すのは喜多さんがやってくれた）

今日のお昼は喜多さんが来られないらしく、私と畔くんの2人だけ。

喜多さんがいるとにぎやかな練習になるけれど、畔くんしかいない時は、黙々とギターを鳴らすだけの時間が続く。たまに少し話をすることもあるけど、基本的には家にいるのと変わらない。

（クラスで仲良くしてくれる子からは、狭い部屋で一緒なんて大丈夫？　なんて言わ

れるけど)

最近はずんぐんと一緒にいて苦痛に感じることもないから、2人だけでいてもあまり問題は無い。前はすごく苦手なタイプだったけれど、虹夏ちゃんたちとバンドを組んで、私の世界が広がっていくにつれて……苦手意識はなくなっていた。

そう答えたなら、なぜか男の人の危険性みたいな話をされたんだけど……。私みたいな芋娘がそういう対象として見られるはずもないし、気にしすぎじゃないかな。

それに畔くんが私に向けてる感情は、恋愛とか、浮ついた感じのものじゃない。私が虹夏ちゃんたちに感じているような、ちよつと温かい気持ちになれるものでもない。

畔くんの弾くギターの音や、たまに見れるようになった目の奥から伝わってくる感情は……私のよく知っているものだ。なんでそんな感情を私に向けてくるのかは、ぜんぜん分からないけれど……。

——少し前から気づいていて、気になっていた疑問。

普段の私なら、それを口にしたりはしなかっただろう。そんなことを訊くなんておかしいし、思い過ぎしかなくかだと考えて、終わりにしていたはずだった。

でも最近夜もあまり寝てなかったからか……頭のねじが緩んでいたのかもしれない。絶対に口に出すはずがない、出すべきではないことを。

私はずい、訊いてしまった。

「あの……畔くんは、どうして私に——」

心に置かれた。パンドラの箱

喜多ちゃんと同じクラスになって、クラスの輪の中に引きずりこまれて……

あの頃は毎日楽しかった。

喜多ちゃんに引つ張られて過ごすのは大変だったけれど、おかげで色々な人と遊ぶことができて、僕の世界はちよつとだけ広がった。

喜多ちゃんはクラスメイトとの遊びに僕を誘うだけじゃなくて、僕のやりたいたいことも否定しないで付きあってくれた。

当時の僕は絵を描くことが好きで、その辺の風景や動物、喜多ちゃんとかをよく描いていた。喜多ちゃんの色々な表情を見たくて、わざと下の名前で呼んで怒らせたり、周りの人を誘導して困らせてみたりと……色々やっていた。

今にして思えば嫌われてもおかしくなかったし、実際に何度か仕返しされたけれど……僕のどこを気に入ったのか、喜多ちゃんは僕とよく遊んでくれていた。

他のクラスメイトと個別に遊ぶことはあまりなかったけれど、喜多ちゃんと一緒にい

る時が一番楽しかったし、あまり気にしていなかった。

3年生になったとき、喜多ちやんとクラスが分かれた。

クラスが分かれてからも、喜多ちやんと僕はよく遊んでいた、

クラスメイトとはあまり話が合わなかったけれど、喜多ちやんに予定がある日は絵を描いていればよかったし、一人で過ごす時間も苦しくはなかった。

その結果どうなるかなんて、考えもしないで。

——かわいい学校の人気者な女の子。

——地味であまり話もしない男の子。

そんな2人が一緒に過ごす、特に女の子から男の子の方に関わってくるとなれば、結果は必然だったのかもしれない。

始めは悪口を言われるだけだった。

次は持ち物を隠されたり、机に落書きされたり、ふざけた様子で蹴られるようになった。

スケッチブックもなくなった。何枚か絵が破り取られて、ゴミ箱に捨てられているの

が見つかった。

先生は何もしてくれなかった。

喜多ちゃんは何とかしてくれようとしたけれど、クラスが違えばやれることも少なくて……さらには彼女まで、陰口を言われているのを聞いた。

僕は結局、転校することになった。

僕が転校してから、喜多ちゃんの周りは落ち着いたらしい。

新しい学校では、いじめられなくなかった。

だから、喜多ちゃんのように過ごすようにした。

相手にあわせて楽しそうに相づちをうち、毎日毎日おしゃべりをして、時には強く、人を引っ張っていく。

おしゃべりについていくために、ゲームやアニメをよく見るようにした。少ないけれど、友達もできた。

女の子とは、あまり仲良くしないようにした。

喜多ちゃんは時折、僕の家まで来てくれたけれど……。学年が上がるにつれて、それもなくなくなっていった。

中学校に上がってから、僕と喜多さんの関係は変わらなかった。

もうお互いの家に行くことはなくて、クラスが一緒になった時も、クラスメイトとしての交流しかなかった。

僕は喜多さんのような生活が板について……それでもクラスの中にはなれなかった。あるいはそれが、僕の限界だったのかもしれない。

趣味は全然見つからなくて、話すことはゲームやアニメの話ばかり。1つの作品にはまることはなかったけれど、ゲームやアニメは新作がどんどん出てくるから、話すネタには困らなかった。

関係が変わらないまま、中学校を卒業して……

僕は「後藤ひとり」に出会った。

——毎日6時間ギターを練習して、気づいたら中学生生活が終わっていた。

前世の自分を通して知った、彼女の人生の1ページ。自虐ネタとして書かれていた話だけ、これはとんでもないことだ。

16時に家に帰ったとして、練習、食事、風呂、宿題……妹に遊んでとせがまれることもあつただろう。テレビを見るとか他のことをする余裕もなく、それでも寝るのが0時過ぎになるのは、珍しくなかつたはずだ。

そんな生活を3年間。迷うことはなかつたのだろうか？ 嫌になつたりしなかつたのか？

ギターを弾ければモテモテになれるかもだなんて、ありきたりな動機のように聞いて——その衝動はとてつもなく強い。

そんな彼女のことを、前世の自分は素直に応援していた。

そして僕は、後藤さんのことを——

「——どうして私に、嫉妬してるんですか？」

嫉妬。

そう、嫉妬心だ。

僕にあるのは借り物の個性で、何を趣味にしても続けることができない。

だから独特な個性と、それを認めてくれる仲間。さらに1つのことをやり遂げられる、強い意思をもつ後藤さんのことを、羨んでいた。

本当はすごい人だと知っていた。素直にギターの師事を仰ぐ方法だって、いくらでもあった。

でもそれをせずに、ただの奇行が多いクラスメイトとして扱った。本当はフォローなんて必要ないのに、彼女を助けるポジションに立ちたかった。

そうすることで、輝いていく彼女と同じようになりたかった。

……なんて醜い感情だろうか。

後藤さんの成功は彼女の資質と努力がもたらしたもののなのに、大した努力もせずに相乗りして、自分を満たそうとするなんて…。

ギターを始めたのも打算だけじゃなくて、これで彼女のようになれるかも、なんて身の程知らずな期待があったからだ。

毎日何時間もギターにそそぐ情熱も、それを楽しいと思う心もなかったくせに。

知ってしまった自分の心が、たまらなく嫌になる。

長い沈黙に耐えかねたのか。後藤さんは落ち着かない様子で、視線を彷徨わせていた。。。

けれど……分かったことは、もう一つある。

僕は後藤さんのことを尊敬している。

その長所を尊いと、好ましいと思っている。彼女の積んできた努力が報われることを願っている。

たくさん努力してきた過去を知っているから。

人と話すことが苦手なのに、クラスメイトと頑張つて交流しようとする姿を見ているから。

羨ましいと思う心とは別に、後藤さんに対する憧れが、輝いていてほしいと思う気持ちだが、僕の中に確かにあった。心の整理がついたことで、それに気づくことができた。

前世の僕のように純粋な気持ちではないけれど……これでやっと、後藤さんのことを応援できる。

「後藤さんは——」

~~~~~

(ああもう私のバカバカバカ！　なんであんなこと言っちゃったの：!?)

どんなに後悔しても、言葉はもう口から出たあとで…。

ぼろつとでた私の言葉を最後に、畔くんがギターを弾く手は止まっていた。かといって何か話すこともなく、ただ沈黙だけが続いていた。

(私に嫉妬する人なんているわけないのに。変なことを言われて気を悪くしたのかな…?)

顔色をうかがうものの、無表情な畔くんからは怒りも何も読み取れない。

薄暗い物置が、さらに暗くなったように感じられて。普通なら落ち着くはずなのに、心臓は嫌な音をたてるばかり。ひたすら助けを求めるも、誰かがくることはなく、ギタ男くんすら出てこない…。

しーん……と静まりかえった部屋にいるのが、とても気まずい。と、とりあえず何か言わないと……でも何をどう言えばいいの…？

「後藤さんは……」

「はっはいー」

「将来の夢ってある?」

「えっ……? えつと……」

私が迷っている間に畔くんが復活した。てつきり怒るかなと思っていたのに、将来の夢って……なんでそんな話になったんだろう?

もしかして、聞かなかったことにしてくれたのかな…?

「やっぱりバンドマンになるの?」

「はい。売れっこバンドマンになってちや……世界平和を伝えたいな、と」

「……うん、後藤さんらしいね」

うっかり出そうになった本音を誤魔化すと、畔くんはちよつと楽しそうに笑った。

み、見抜かれた…? それとも、1回しかライブしてないへボギタリストが何いつてんのって思われてる?

疑心からられて狼狽える私に、畔くんは言った。

「なれるよ、絶対」

「……えっ?」

「後藤さんなら、結束バンドなら大丈夫」

先のことなんて分かるはずもないのに、何の根拠もないはずなのに……畔くんの言葉からは、強い確信が伝わってきた。

戸惑う私の前で、畔くんはギターをケースにしまい始めた。あつ時間が、私も片付けなないと。

「あのさ、後藤さん」

「……? な、なんですか?」

「考えたんだけど、僕は今日で」

練習にくるのは最後にするから。

畔くんの言葉を聞いた、私の手が止まる。最後、最後つて……もう、ギターやめちゃうの?」

「喜多さんにも伝えておいて」なんて言い残して立ち去ろうとする畔くんの背中が、初めてあつた日の喜多さんと重なって——私は思わず、声を張り上げていた。

~~~~~

「あつあの!!」

突然背後からした大声に、思わず振り向いてしまう。

声の主は半ば俯いたまま、それでも確かに、僕を見ていた。

「あの…。ギター、やめちゃうんですか？」

「……………」

「せっかく弾けるようになったのに…。ずっと弾かないでいると、また弾けるようになるまで大変ですし、いつ今はあまり弾く気分になれなくても、ちよつとずつでも続けていけば……………」

リアルでは初めて見る、後藤さんの真剣な目。

前髪に隠されてなお、強い意思が感じられて…。目をそらしたいのに、離せなくて

……………

やっぱり、後藤さんはすごいな。

強くて、輝いていて…。

これからもつともつと、輝いていくのだろう。

でもそれは……………今の僕には眩しすぎる。

「ありがとう」

「なにか……え？」

「でもいいんだ。僕は自分で演奏するより」

結束バンド
他の人の演奏を聴く方が好きだから。

そう続けた僕の言葉に、後藤さんは言葉を失い……

それから教室に戻るまで、僕らの視線は交わらなかった。

幻のような一瞬の雷鳴

【本編】

ギターを辞める宣言をして数日後。

畔は学校から帰ってすぐにベッドに寝転がり、どんよりと曇った空を見上げていた。

あの日、虹夏さんからロインがきた。

内容は、結束バンドの新曲……その歌詞がついに完成したこと。そして、オーディションのことをみんなに話したこと。原作よりちよつと早く、彼女たちは動き始めた。

そのうち曲も完成して、オーディション、初ライブ……結束バンドの歩みが、ここから始まる。

転がり始めた岩は、もう止まらない。

僕がいなくても、いなくなつたとしても……

曇り空から視線を外して、スマホに届いたメッセージを見た。

《オーデイション30日だけど、予定大丈夫かな?》 単なる予定の確認でしかないそれに、なかなか返信できないでいる。既読無視になっているから、虹夏さんは心配しているかも…。

(オーデイションライブは見たい。けれど、)

その時、僕は平常心でいられるのだろうか?

プラスの感情が伝わるのは問題ない。けれど後藤さんに気づかれてしまったように、嫌な感情まで伝わってしまったら…。そうなれば、今の関係は続けられないだろう。

関係が壊れてしまうのが怖くて、でもライブを見にいきたい欲望も捨てられなくて…。

そもそもこんな自分が、オーデイションライブを見る権利があるのだろうか、なんて考えまで浮かぶ。星歌さんはどうして、僕のことを誘ってくれたんだろう? 音楽に對する関心が薄いことは見抜かれていたのに…。

ぐちゃぐちゃの思考では何も結論を出せずに、ただ時間が流れていくばかり。

思考をリセットしようと、お気に入りの動画を再生した。とたんにスマホから流れる、ギターの音色…。

不思議と惹かれるその演奏に引き込まれることで、雑念がなくなっていく。

——何曲か再生して、心が落ち着いた頃。

動画を止める。深呼吸して、弱気な自分を心の奥に閉じ込める。

前向きな考えでいくなら、ライブを見に行くべきだ。そう思って、ロインにメッセー
ジを打ち込んだ時……その音に気づいた。

扉をノックする音。

母親だろうと、何も考えず返事をして……。でもドアの前にいたのは、

——喜多さんだった。

くくくく

畔くんが転校してから、私の周りは嘘のように元に戻った。

何事もなかったかのような周囲の様子に気が悪くて、でもそこから飛び出していく
勇気はなくて……。周りの目を気にして、畔くんの家にも行かなかった。

ほとぼりが冷めた頃、こっそり畔くんに会いにいつて……。

でもその時には、もう私の幼馴染はいなかった。

無機質になった部屋。他人行儀な話し方。

久しぶりだからと持つて行った遊び道具も、一緒に食べようと思っていたお菓子もかばんから取り出せないまま。何を話したのかもわからず、ただ呆然と帰宅したことだけを覚えている。

諦めきれずに何度も訪ねて、でも元の関係には戻れなくて…。

もう終わったのだと諦めたのは、いつ頃だったっけ。

畔くんのことを忘れることにして、中学校でもただのクラスメイトとして接して…：

「……そんなところかな。私と畔くんの話は」

「あつその…。すみません、軽々しく聞くことじゃ……」

「ううん、いいの。集中してなかった私が悪いんだし」

STARRYでの練習中、後藤さんに集中できていないのを見抜かれて…。

今まで誰にも話せなかったことを話してしまったのは、私の心の弱さのせいかな、後藤さんの人柄のおかげか。あるいは、バンドという特別なつながりがあるからなのか。

後藤さんをあまり困らせないように、笑顔をつくって言う。

「オーディションのこともあるし、畔くんのことより、練習頑張らないとね！」

「あつはい」

ギターを手に取る。

メトロノームにあわせて、一定のリズムで音を鳴らししていく。私を導くように、後藤さんのギターの音色が加わって——それにもう一人加わることがないことを、残念に思ってしまった。

鈍い音を立てて、ピックが弦に弾かれた。

当て方を間違えたそれは、反動で私の手から滑り落ちる。床に落ちたピックを拾い上げて……そのまま私の手は、止まってしまった。

(ダメね……。今日の私)

畔くんがギターを辞めたと聞いてから、全然集中できていない。

せつかく後藤さんに練習に付き合ってもらっているのに、目標に向かって頑張りたいの。

なんでこんなにシヨックを受けちゃってるんだろう？

期待しちやったのかな。後藤さんと会った日、私を嵌めて困らせてきたり、私の感情を的確に読み取ったり……昔に戻れたみたいだったから。

繋がりかけた絆が再び切れてしまったことへの動揺が、ギターを弾く手を乱れさせる。こんな調子では練習にならない。

後藤さんはギターを弾く手を止めて、心配そうな目でこつちを見ている。せめて彼女の負担にならないようにと、今日は練習を切り上げることにした。

「ごめんね後藤さん……。やっぱり、ちよつと無理そう」

「あついえ……」

「明日にはいつも通りだから！ 心配しないでね」

ギターをケースにしまつて、荷物をまとめて。

帰ろうとする私を、後藤さんが引きとめた……オドオドとした声で、何かを秘めた瞳で。

——弾くのが無理そうなら、聴いていきませんか？

後藤さんが奏でる、ギターの音色。

私に合わせてスローペースで弾かれる練習曲は、滑らかでお手本のように綺麗だった。

こうして聴いていると、後藤さんは結構うまいと思うのだけど…。なんで伊地知先輩にはへたつっぱ扱いされてるんだらう？

私の疑問をよそに、演奏は終盤にさしかかる。後藤さんは一瞬だけ私を見て……目を閉じた。

曲が変わる。

スローペースからハイペースに。

練習用の曲から、聞いたことがない曲に。いや、

(この曲、どこかで聞いたことがあるような……?)

ソロギターでは初めてだけど、去年ヒットしたドラマの主題歌だと思う。

あのドラマはたしか、悩みを抱えた主人公が、それを振り切つて走り出すシーンが話題になって……

曲がサビ部分に突入し、全身に稲妻が走つたような衝撃が走る。

激しくかき鳴らされる旋律から伝わってくる、後藤さんの感情。走り出せと、強く背中を押してくる。普段の様子とは全く異なる後藤さんの演奏に、私は完全に引き込まれ

て――

気がついたら、演奏が終わっていた。

拍手することすら忘れていた私を、後藤さんの視線が射貫く。

「喜多さんと睥くんって……ちよつと似てます」

「え……？」

「何かを誤魔化すときの仕草とか……。あつあとは食べ方とか……」

ふらふらと迷うように視線が揺れて……

ゆつくりと、言葉が紡がれていく。

「き、きつとそれは……。2人が一緒に育ってきた証で……」

「……………」

「だから喜多さんの幼馴染も、どつどこかにまだいるんじゃないかと……。たぶん……」

頼りなく締められた、後藤さんのお話。

後藤さんはすつかりいつも通りの様子で、まるでさつききの時間が幻だったかのようだけれど……私の胸に宿った灯が、それを否定する。

衝動のまま、私は立ち上がった。

そのままスタジオの出口へ駆け出して——最後に振り返って、とびっきりの笑顔で宣

言した。

「ありがとう。私、行ってくるね！」

日が傾きはじめた街中を走り抜けて、見覚えのある家の前に立つ。

乱れた服と髪を整えて、深呼吸して……意を決して、チャイムを鳴らした。

久しぶりにお会いした畔くんのお母さんは、記憶よりちよつとお年を召されていて。案内やお茶出しをお断りして、畔くんの部屋に向かった。

ドアをコンコン、とノックする。

了承の声を聞いて、私は畔くんの部屋に踏み込んだ。

つないだ手 離さないで

僕の部屋に喜多さんが来なくなったのは、何がきっかけだったのだろうか。

よく使っていたミニテーブルを片付けたことか。

喜多“さん”と呼んだことなのか。

あるいは、僕に愛想がつきたのか……

もう二度と、喜多さんが訪れることはないだろうと思っていた。

けれど今、僕の部屋には喜多さんがいる。真剣な目で、僕を見ている。

直に座ってもらうのは悪いのでクッションを渡して、埃をかぶったテーブルを使うのは諦めて。なるべく居心地のよいようにと配慮はしたけれど……。

それでも喜多さんを迎えられるような部屋じゃないから、なんか恥ずかしい。居心地の悪さに耐えながら、僕は喜多さんの前に座った。

くくくく

「それで…。今日はどうしたの？」

目の前に座る畔くんの雰囲気は、かなり硬い。

たぶん、ギターを辞めることについて聞きにきたって分かってるのね。このままいつても何も話してくれないと確信して、いったん別の話題を挟むことにした。

「あのね、オーデイションのことなんだけど」

「えっ？」

「畔くんも見にくるかもって伊地知先輩に聞いたけど、来られそう？」

「……うん。さっき、虹夏さんに返事しておいたよ」

「そうなのね！ 楽しみだわ！」

明るく答えて、場を盛り上げていく。

そのまま先輩たちの話、学校の話といった共通の話題に繋げていけば、畔くんの緊張は徐々にとけていった。小学校の頃は話が続かなかったけれど、今は全然違う。心の底からではないかもしれないけど、お互い楽しく会話ができている。これなら大丈夫。

この違いはなんでだろう？ なんて疑問が生まれて、それをすぐに追いやった。

そんなことより、そろそろ本題に入らないと。後藤さんとのうわさについての話で悶えている畔くんに、切り込んだ——

「あのね、ギターを辞めるって聞いたんだけど……どうして？」

——どうして辞めちゃうの？

——どうして直接言ってくれなかったの？

——どうしてそんなに苦しんでいるの？

色々な疑問を一言に込めて。ピタリと動きを止める畔くんを、じつと見つめた。

普通ならこんなの伝わりっこない。でもきつと、私の幼馴染なら理解わかってくれるはず。

……どちらも何も話さない時間が、ひたすらに続く。

時計の針の音だけがコチコチと鳴って、たまに家の前を通る車の音がして…。

畔くんは視線を彷徨わせながら、時折つばを飲み込んでいて……それでも適当なことを言っただけ、誤魔化しはしなかった。

何分か、何十分か…。

どれくらい時間が経ったのか分からなくなった頃、ようやく畔くんは話してくれた。

あるギタリストのお話を——

そのギタリストは、最初はひとりぼっちでした。誰かと一緒に演奏したくても、組んでくれる人はいませんでした。

けれど、そんな彼をある人が拾い上げてくれて、彼はその人とバンドを組むことができました。

彼は演奏以外はダメダメでしたが、ギターに関してはとびつきの素質をもっていました。バンドがピンチになった時、彼はヒーローとなつてバンドを救い、逆に彼が困ったときは、バンドのみんなが助けてくれました。

彼の世界は広がって行って、やがてバンドは他の人々からも認められるようになりました——

一見関係なさそうな、畔くんのお話。

それを私は、黙って聞いていた。関係ない話で煙に巻いているわけじゃないって、確信していたから。

「僕がギターを始めたのは、色々打算もあるけど……その人に憧れたからなんだ。」

「そうなのね。じゃあどうして……？」

「……その人と僕は全然違うって、気づいちちゃったから」

そうつぶやく畔くんは、完全に諦めた目をしていて……。その昏い瞳に、何も言えなくなる。

「その人が特別になれたのは、才能や運だけじゃなくて、何よりもひたすら努力してきたからなんだ。僕にはそれができない。時間を忘れるほど、ギターに夢中になることもない」

「……………」

「そんな自分がつまらない人間に思えて……。頑張っている人を見ると、時々つらくなるんだ」

そこまで話すと、畔くんは窓の方を見た。

視線の先には夕陽が輝いていて……。彼はじつと、それを見つめていた。

畔くんの話には不明瞭な部分も、共感できない部分もあって……。せつかく話してくれただのに、私には全部理解することができなかった。

頑張っている人を見るとつらくなるって、どういう気持ちか想像しようとしても、うまくいかない。頑張っている人がいたら、一緒に頑張るか応援するものよね……？

理解することができないのもどかしい。

けど、全く理解できないってわけじゃない。分かる部分もあった。

——先輩に対する憧れでギターを始めた。後藤さんの演奏に魅せられた。

——特別な取り柄のない自分自身、何の変哲もない人生。それをつまらないと思っていた。

もしも、私が結束バンドに入れていなかったら…。

結束バンドの募集を見た時に飛びつかなかったら、どうなっていただろう？ 後藤さんが引きとめてくれなかったら、私はもうバンド活動をすることはなかったはずで…。あるいは、畔くんと似たような気持ちになっていたのかな…？

気づけば随分と考え込んでいたらしい。いつの間にか畔くんは、こちらに視線を戻していた。

考え事をしていたことを謝って、私の考えを話そうとした矢先。畔くんが頭を下げてきた。

「ごめん」

「え…？」

「こんな思いを知られたくなくて…。ギターを辞めるって言ったら問い詰められそうで……」

でも直接言わないのは不誠実だった。ごめんなさい。そう言つて再び、頭を下げる。そんな畔くんを見て……私の目から、涙が出てきた。

(ああ……後藤さんの言つたとおりだ)

ちよつとずるいところも。ちゃんと私の想いを汲み取つてくれるところも…。

私はよく知つている。やつぱり変わつてなどいかなかった。

私の幼馴染は、ちゃんとここにいた。

お互いに傷ついていたのかもしれない。

転校前のことに触れずらくて、離れてしまった距離に戸惑つて。

ボタンを掛け違えてしまったけど、きつとこれなら、元通りの関係になれる。

ハンカチで涙を拭つて、前を向く。

慌てた様子の幼馴染の様子がおかしくて、笑いがこぼれた。自分から泣かせようとしてきたこともあるくせに、私が本当に悲しい気分の時はいつもおろおろしてるんだから。

「ねえ、畔くん」

「えっ? な、なに?」

「一緒に来てほしいの。ちよつと付き合つてくれる?」

さつき浮かんだ私の考え。

それを話すべき場所は、ここじゃない。

直感が示す場所に、私は畔くんを引っ張っていった。

幼い頃にそうしていたように、弟みたいな彼の手を握って——

くくくく

喜多さんに手を引かれるのは、いつ以来だろう？

抵抗しようと思えばできたはずで、でも真つすぐ進む彼女を止められない。

彼女に引かれるままに歩き続けて、たどり着いたのは近所の小さな公園だった。

(くくく)は、昔よく遊んでいた……)

急に人の目が怖くなる。

誰かに見られたら喜多さんの評判が下がってしまうと思つて、繋いでいた手を離そうとした。それを咎めるかのように、手を握る力が強くなる。

そのまま強く手を引かれて、ベンチに座らされた。意図してか、偶然か……木の陰に

隠れるようになって、ようやく息がつけるようになった。

喜多さんはベンチにハンカチを敷いて、その上に座った。

夕暮れ時とはいえもう遅めの時間。公園に他の人の気配はない。赤く染まった空を見上げて、喜多さんは話し始めた。

「さっきの話だけど…。つまり畔くんは、ギターに真剣に打ち込めないのが心苦しいのよね？」

「……………うん、そうだね」

「なら、ギターにこだわらなくてもいいんじゃないかしら」

喜多さんの言葉に、疑問が浮かぶ。てつきり引きとめられるのかと思ったのに、むしろ「やめてもいい」だなんて…。

ある予感がして息がつまる。腰が浮きそうになって、繋がれた手が僕を引きとめた。空から視線を戻して、喜多さんは僕の目を見る。

「私、畔くんが夢中でできること、知ってるわよ」

「あつ…。ま……………」

喜多さんが何を言いたいのか、理解してしまう。

体が震えて、心臓がうるさいほどに音を立てて…………でもその声は容赦なく、僕の耳に

届いた。

「畔くん、もう絵は描かないの？」

それは、かつて転校前にもされた質問で――

当時の僕はひどく取り乱して、逃げ出してしまった。

それからそのことを訊かれることはなかったのに、何年もたって同じ質問をされるなんて……。

「スケッチブックをボロボロにされて、ショックだったのはよく分かるわ」

「……………」

「絵のことで馬鹿にされたのも知ってる。けどね、私は――」

もう一度、畔くんの描いた絵がみたいの。

そう言ってくれることが嬉しくて、喜多さんの真摯な目に魅せられて……でもどうしても、震えが止まらない。

また絵を描いて、同じことが起きたらどうしよう？

あの日以来スケッチブックを開くこともできなくて、きつと腕は錆びついている。不安と言いつつ僕が僕の心にあふれていって、それは口からもこぼれ落ちた。

「……無理、だよ」

「……！」

「また前のようになっちゃうかもしれない……。それに今更……」

ここまでしてくれたのに、それでも勇気を出せない自分が情けない。

喜多さんに合わせる顔がなくて、俯いてしまった。

地面を見つめる僕を置いて、喜多さんが立ち上がる。そのまま歩き去る音が聞こえて

……。今度こそ見捨てられたかと絶望した時、その音は止まった。

「ねえ、覚えてる?」

「……?」

「ここにジャングルジムがあったんだけど、前に撤去されちゃったの」

顔を上げる。喜多さんが立っている場所には、確かに以前はジャングルジムがあつて

……。今はよく分からない遊具が置かれていた。

あらためて公園を見渡すと、遊具の形や色は、記憶にある姿から少し変わっている。

喜多さんは昔の思い出話をしながら公園の中を一回りして、僕の前に戻ってきた。

「公園の様子が変わったように、学校も人も前とは違う。だから、そんなに悲観的にならないで」

「でも……」

「それにもし、学校で受け入れられなくても大丈夫」

喜多さんが僕の両手を掴んで、立ち上がらせる。

その目に不安の色は全くなくて……。絶対に大丈夫だという、確信が感じられた。

「もう畔くんの居場所は、学校だけじゃない。結束バンドがあるし、絵はSNSだけでアップしてもいい」

「……………」

「だから、もう一度だけでもいいから……。描いてみせて」

——キラキラとした瞳を、じつと見つめる。

その輝きがちよつと眩しくて、でも目をそらす気にはなれなかった。

「僕はギター辞めちゃったし、結束バンドのメンバーじゃないよ？」

「友達として支えるのに、バンドメンバーじゃなきゃダメ、なんてことないわよ」

そう言い切る彼女の言葉に、体が軽くなったような気がして……

いつの間にか、体の震えは止まっていた。学校で見せるなんてとても無理だけど、喜多さんに見せるだけなら……。

「分かったよ……。ちよつとだけ、頑張ってみる」

「うん！ 楽しみにしてるね！」

その瞬間の彼女の笑顔は、まるで太陽のようで……。色々と直視できずに、目をそらしてしまふ。

「もう遅いし帰ろう」なんて言っつて、彼女の手を引いて歩き出した。驚いた声が聞こえたけれど、それを気づつかう余裕はなかった。

顔が熱い。伝わる手の温かさが恥ずかしくて、でもそれを離したくない。

今が夕暮れ時で本当に良かった。そうでなければ、僕の顔は見られたものじゃなかっただろう。

子供の頃ほど純粋ではなくて、でもその頃よりもずっと強い想い。

「久しぶりだしあまり期待しないでね」とか軽口をたたきながら、僕は必死にその感情を鎮めていた。

喜多さんの荷物を部屋から持ってきて、彼女を見送ったあと。

僕はふらふらと、ベッドに倒れこんだ。ごろごろ転がって、気を紛らわす。窓の外を見ていると、夕焼けは少しずつ薄くなっていって…。やがて空の向こうに、一番星が輝いた。

オーディションライブ

畔が絵を再び描き始めてから数週間。

結束バンドの面々がオーディションに向けて練習を重ねる中、畔はひたすら絵の練習をしていた。

窓から見える風景、ギターなどの小物、自宅近くにいる動物……

放課後は即帰宅、期末テストの対策もせず、遊びの誘いもすべて断って……。今までやれなかつた時間を取り戻すかのように、ひたすら時間をつぎこんだ結果——

(これもイマイチ、ダメ、ボツ……)

失敗した絵でスケッチブックが埋まるのは、もう何度目だろうか。

部屋の隅に積まれたノートを数えようかと思つて、やつぱりやめた。そんなことを気にしている時間はない。明日は結束バンドのオーディション……久しぶりに、喜多さんと会う日なのだから。

期限を切られたわけじゃない、約束しているわけでもない。

それでも早く、喜多さんにいい絵を見せたい。結束バンドの出発に間に合わせたい。ここで踏み出せなければ、置いていかれるような……そんな気がしてしまう。

焦りと疲れで思考が鈍くなるのを感じて、いったん休憩をとることにした。

自室の扉を開けると、外には母親が用意してくれた夜食が置かれていた。恒例となっているそれをいただいて、リフレッシュしようとする。

冷めてもおおいしくいただけるように、胃に負担がかからないように。作り手の愛情が感じられる料리가、体にしみわたる。

急な生活スタイルの変化、成績の下落。叱られるかと思いきや、その気配はなく……。そつと見守ってくれる家族の姿勢が、今の僕にはとてもありがたかった。

喜多さんの期待に応えたい。家族の支えを無駄にしたくない。

そんな思いを乗せて、鉛筆が紙の上をすべる。その音は明け方近くまで続き……
それでも、満足のいく絵は描けなかった。

翌朝。

午後のオーディションに向けて、出発の準備をする。

寝癖を直す。変に心配をかけないように、目の下のクマを化粧で隠してもらい、身だしなみをチェックして……。スケッチブックをどうするか、考えた。

数週間の練習は、着実に実を結んでいる。

線はぶれていないし、構図や焦点なども勉強して、絵に取り入れられている。ネットで高評価を得ている絵と比べても、そんなに見劣りはしていないだろう。

けれど、見れば見るほど物足りない。

吐き気に耐えながら見返した、昔のスケッチブック。そこに描かれた絵は今よりずっと拙いのに、そちらの方がいい絵だと感じてしまう。

今の絵の方がずっとうまいはずなのに、昔の絵の方が輝いてみえる。

自分で納得できていないのに、喜多さんに見せるのは早いかもしれない。絵を見せた時に、もしもがっかりした顔をされたら……。そうなれば、立ち直れないだろう。

でも、やる気がないようにも思われたくない。この前は弱い部分を見られてしまったけれど、少しはしっかりしていると場所を見せたい。

もう今更なのに、仮病で休むことまで考えて……。なけなしのプライドが、最後に勝つ

た。

描きかけのスケッチブックを鞆の中に入れる。本当に見せられるかは分からない。いざとなって日和るかもしれない。

けれど出かける前に諦めたりは、したくなかった。

畔がSTARRYに着いたのは、14時ちようど。

扉を開けた途端、星歌さんに睨まれる。促されるまま、星歌さんの隣に座った。

ステージにはまだ誰もいないが、来ていないということはないだろう。奥で練習なりしているはずだ。

……なんかやたら見られている気がして、落ち着かない。久しぶりにSTARRYにきたから気まずいし、誰かと待ち合わせてくれば良かったかな…？

自分が演奏するわけでもないのに、緊張して息がつまりそうになる。

オーディションはうまくいくって分かっているのに、なぜか不安になってしまった。隣に座る人のため息が大きく聞こえて、びくつと体が震えた。

——ドン、と音を立てて、目の前に何かが置かれる。

置かれたものは、何の変哲もない紙パック入りのお茶で…。意味の分からない状況に、思考が止まった。

「飲みな」

「あ……えっ?」

「ほら、一気に飲め」

星歌さんが、お茶を飲むように圧をかけてくる。

反対側に座るPAさんにも視線を送るが、にこにこことほほ笑んでいるだけで、助けくれそうにない。仕方なく、言われたとおりにした…。

お茶の味が口に広がる。一気に飲み干して息をつくど、さつとゴミを回収された。

「ったく…。ライブ見にきたんだから、もつと楽しそうな顔しなよ」

「あんまりお客さんが緊張していると、ステージに立つ方もやりにくくなりますよ」

「あつ…。すみません」

PAさんの言葉で、星歌さんの行動の真意を察した。

おそらくさっきの僕は、すごく緊張しているのが顔に出ていたんだろう。結束バンドのみんなに、心配をかけてしまいかねないほどに…。

素直ではないけれど、星歌さんはなんだかんだ妹に甘い。おかげでちよつと気が紛れて、僕はその時を、静かに待つことができた。

オーデイションの時間となり、結束バンドがステージに入ってくる。

虹夏さんは軽く手を振ってくれたけれど、その動きはぎこちない。みんな黙々とセツティングをしていて、緊張感が伝わってきた。

セツティングが終わり、演奏者が前を向く。

オーデイションライブの見どころは、サビに入るあたりから。後藤さんが一歩踏み出して、演奏のギアが一段階上がる瞬間だ。

それを分かっていたのに、僕の視線は後藤さんに向いていなかった。

くくくく

ここに立つまでに、色々なことがあった。

憧れと勢いで結束バンドに加入して、結局ギターが弾けなくて逃げ出してしまった。

畔くんと後藤さんが逃げた私を連れ戻してくれて、先輩たちが優しく受け入れてくれた。た。

ギターだと思っていたものがまさかのベースで、あらためてギターを練習することになった。リョウ先輩にギターを貸してもらって、後藤さんに先生をしてもらって…。

色々な人に迷惑をかけて、色々な人に支えてもらった。

そして今、こうしてステージに立てていることが……。みんなと一緒に過ごすご日々が、とても楽しい。

この先、失敗することがあるかもしれない。普通の人生を送るなら経験しなくてもいい、そんな苦勞をすることになるかもしれない。

それでも私は、後悔しないように生きていきたい。

踏み出さなかったことを、精一杯やらなかったことを後悔することだけは、したくない。

「じゃあ、『ギターと孤独と蒼い惑星』って曲、やりまーす!」

準備を終えて前を向くと、客席にいる畔くんと視線が交わった。

今日は結束バンドのためのライブだけど……。畔くんにとつても、良いライブにしたいな。

先輩たちや後藤さんと目を合わせ、呼吸を合わせる。

シンバルの音を合図にして、私たちのライブが始まった。

~~~~~

ジャンジャンという音とともに、イントロが始まる。

華やかな音の集まりが、畔の耳に響いた。4つの音が交じり合って、たった3人だけしかない観客の体を揺らした。

歌が始まるのと同時に、ギターの音が止む。リズム隊の演奏だけを支えに、喜多さんの歌声が響く。

やがて後藤さんのギターが加わって、喜多さんもギターボーカルとして働くパートに入った。

喜多さんの視線は手元にいきがちで、どうみても余裕はない。

……無理もないことだ。ギターをまともに練習し始めてから2ヶ月足らず。曲の速度についていくので精一杯だろう。

ああ、でもそんな演奏が――

(喜多さん、とつても輝いてる……)

技術的なことなど問題ではない。

どこまでもまっすぐに。迷わず全力で進もうとする姿勢が、彼女の歌と演奏から伝

わってきた。

一歩踏み出した先の世界、その輝きが見えて。背中を押されているような、そんな感覚を覚える。

ひたむきに前に進もうとする彼女を、3人が支える。サビの部分に入ってもその構図は変わらず、4人の輝きがステージを埋め尽くしていく。

あふれるくらいの輝きを見て、僕の胸の奥に、何かが生まれた。

歌が終わる。演奏が終わる。

余韻を残すようにそれぞれの楽器から音が響いて、やがて静寂が訪れた。

今にして思えば……。ライブで感動したのは、本当に楽しいと思っただけは初めてだったかもしれない。

マンゴー仮面を入れた3人でのライブは楽しかったけれど、あの楽しさは結束バンドの仲間になれたかのような高揚感と、後藤さんの奇行を楽しんでいただけで……。演奏はちっとも心に響いていなかった。

ライブが終わっても、心の中に生まれた“何か”は消えない。

それに突き動かされるまま、スケッチブックを取り出した。紙の上に線を描く。

自分の見た輝きを写し取るかのように、きらめきを紙の上に残していく。描いて、描いて、描いて……ようやく最後の線を引き終えた。

——描き終えた瞬間、周りの音が戻ってくる。

「あ、戻ってきたのかな？」

「あつそうみたいですわね……」

「物販で売れば……。いや、Tシャツにプリントして」

「ほらそこ、金勘定始めないの。せっかくだいい絵なのに……」

いつの間にか、結束バンドのみんなに囲まれていた。急な変化についていけなくて、混乱してしまう。

絵を描いているところを見られたと、パニックを起こす暇もない。今いる場所と、オーディションライブが終わった直後だったことを思い出すまで、結構な時間がかかった。

……あらためて、自分の描いた絵を見る。

ライブの様子を描いた一枚。まだ色塗りもしていないけれど、そこには確かな輝きがあった。子供の頃の絵と同じような、あるいはそれ以上の輝きが…。

——視界がにじむ。絵に涙がこぼれないように、乱暴に目を拭った。

虹夏さんが慌てて心配する声をかけてくれて、それに大丈夫だと答えた。実際に心配される必要なんて、まるでないのだから。

描いた絵を、正面にいる人に渡す。赤い髪をもつ、大切な幼馴染に…。

口角が上がる。まるで子供の頃に戻ったような気分で、自慢げに問いかけた。

「この絵、どう？」

「うん、——」

そして喜多さんは、答えてくれた。

花が咲いたような、眩しい太陽のような、満面の笑顔で。

「——とってもいい絵だと思っわ！」



## 見守る星、箱の中の満月

畔を初めて見た時に思ったことは、「なんか妙なやつがいるな」だった。

虹夏たちの初ライブ。なぜかダンボール箱に入ったやつがいて、会場は困惑ムード。ダンボール箱の中身は臨時で連れてきたギタリストなんだろうが、人選ミスとしか思えなかった。演奏はバラバラ、会場もいまいち盛り上がりならず…。お通夜になってないだけマシといった状況。

——そんな中で、一人だけ妙に楽しそうにしてるやつがいた。

見かけない顔。ギターケースを持っているが、出演予定のバンドにはいなかったはず。

飛び入りでもするつもりなのかと思ったが、その気配もない。周りと違ってやたら楽しそうにしている様子は、いやに目を引いた。

結局、虹夏たちのライブは微妙なまま終わり…。

そいつは虹夏たちのライブの後、さっさと帰っていった。

リヨウからの報告によると、そいつ——畔はぼっちちゃんと一緒に、虹夏が連れてきたらしい。

最初は珍しく虹夏が警戒した様子を見せていたが、最後には打ち解けていたんだとか。打ち解けるあまり、虹夏は軽々しく手を握ったらしく……これはまあいいか。

リヨウは虹夏との距離感を心配していたようだけど、ライブを見ていた時の様子からすると、どうもそうは思えなかった。視線がいついていたのは主にぼっちちゃんの方で、あとはステージ全体を見るくらい。

妙などころはあるが心配する必要はないと判断して、その日は終わったよ。

次に畔を見かけたのは数日後。

虹夏が呼んだらしく、STARRYの一角で話をしていた。話の内容は……まあぼっちちゃん関連だったな。学校での様子とかを話してたよ。

——ああ、悪口とかじゃないよ。まあちよつと初バイトの日が心配になったけど、なんだかんだよく働いてくれてるし……甘い？　そ、そんなことねあって…。

それよりさ、その時虹夏があいつを勝手にバイトに入れようとしたんだよ。

ちよつと調子に乗っているのかと思ってきたお説教したんだけど……今にして思えば、無意識に感じていたのかもな。畔のやつが、何かを抱えていることに…。

抱えてる内容？ さあ、なんだろうね。

面接の時だつてそこまで聞かなかつたし…。ただまあ、色々と歪なのは分かつたよ。音楽関係への関心をアピールするのに、いまいちリサーチもしていない。

結束バンドを支えたいと言いながら、あいつらの音楽を見ていない。

じゃあ女目当てで近づいてるのかと思えば、いまいち距離を縮めようとしていない。呼ばれなければこない、その程度でしかない。

友達を応援するだけにしてはいやに意欲的で、それでいて妙に腰が引けた態度。色々と中途半端で、何がしたいのかよく分からなかつた。

だからまあ、見極める機会を作りたかつたんだよね。

——あいつらのライブを見て、どんな反応をするのか。

虹夏たちのオーディションライブは、色々と課題はあれど、十分に光る内容が感じられた。

特に終盤のぼっちちゃんはリョウ並みだった。チームプレイの経験不足で実力を出

せていないみただけど、もったいないな…。

「——ギター2人、下向きすぎ。ベースは自分の世界に入りすぎ…。で、」

一通り虹夏たちへのアドバイスを言った後、言葉を切る。

畔のやつに感想を聞こうと横を見ると……一心不乱に何かをかいていた。何してんだ、こいつ？

「ねえ、何してんの？」

「……………」

「…………おーい、聞こえてる？」

声をかけても全然反応がない。駄目だな、こりや。

感想を聞くのはあきらめて、虹夏たちに視線を戻す。ずいぶん表情が固いし、早く伝えてやるか。

「まあお前らがどんなバンドかは分かったから。ライブの日まで練習頑張りな」

「はい…。ありがとうござい……？ えっと、ライブの日って……つまり合格ってこと？」

「あ？ そう言ってるんだろ」

「いや分かりにくいよ！ みんな、ライブできるって！」

虹夏の言葉を起点に、一気に表情が明るくなる結束バンド。

喜多がぼつちちゃんに飛びついたりしていているのを眺めて、私は頬杖をついた。まだまだこれからだつてのに、浮かれすぎだつての…。

まあ今日くらい喜んでいてもいいか——なんて考えながら、隣に視線を移した。畔は相変わらず何かを描き続けていて、周りの様子に気づいていないらしい。

異様な状況に気づいたのか、虹夏たちも集まってきた。

ぼつちちゃんは喜多に支えられている。どうやら安心したら、腰が抜けてしまったらしい。頑張った反動かもしれないな…。

私はもういいし、椅子に座らせてあげた。

「お姉ちゃんなんか優しくくない…？」ねえ、畔くんはどうしちゃったの？」

「なんかさつきからこの調子なんだよ」

「……これ、私たちだよね」

「本当だ！ さつきのライブかな？」

畔の絵を見て、虹夏たちが騒ぎだす。リヨウも珍しく興味を示しているようだ。

……まあ無理もないか。絵は門外漢な私だけど、それでもこの絵が並じやないのは分かる。

ライブの様子を絵で伝えるのは難しい。

映像なら音も動きもあるが、写真や絵にそれはない。だからアー写撮影なんかは、背景や小道具、ポーズとかで雰囲気を出していくもんだ。

それをこいつは、鉛筆の線だけで表現している。

ライブの熱気そのまま伝わってくるような、印象的な絵。このままフライヤーに載せてもいいくらいだ。

(……いや、やっぱりアー写として使うのはなしだな。美化されすぎてる)

いい絵なのは確かだが、忠実とは言い難いか。これを期待して客がきたら、実物とのギャップでがっかりするだろう。

特にギタボは補正かけすぎだな。ぼっちちゃんもこんなに鋭い雰囲気じゃないし、そもそも虹夏は位置的に見えてないはず。想像で補ったのか……？

(まあでも、これで懸念は消えたかな……)

結局どんなやつなのか、いまいち分からない部分はあるが……これなら心配しなくてもいいだろう。

虹夏たちのライブで、こいつは間違いない結束バンドのファンになった。周りの影響とか、単に友達を手伝うってだけじゃない——本物のファンに。

その場の空気や一体感、ノリなんかで変わる突発的に変わる演奏。単に音楽を聴くだけじゃなくて、そういった魅力もライブにはある。

絵を描くのはかなり独特な楽しみ方だけど、まあこういうのもありだろう。

絵の感想を言い合っている虹夏たちから離れて、適当な席でパソコンを開いた。

来月のライブスケジュールを正式に出して、結束バンド用のチケットを印刷する。ぼっちちゃんへかける言葉や、あの絵を譲ってもらう方法なんかを考えながら——私はキーボードを叩いていた。

~~~~~

「よし、それじゃあ畔くんも入れて写真とろう！」

虹夏ちゃんのかげ声で流れが変わる。だめだ、なかなか言い出せない…。

ライブチケットを握りしめて、次こそ言えるようにシミュレーションを始めた。

(さりげなく、自然に言うんだ…。ライブ気に入ってくれたみたいだし、買ってくれる

はず！)

チケットノルマの5枚目。これさえ売ればあとは家族の分だけ。他の人が言い出す前に売っちゃわないと…。

リヨウさんが撮影料として畔くんからお金を巻き上げようとして、虹夏ちゃんにハリセンでひっぱたかれる。スパーン、といい音がホールに響いた。

「構図はどうする？ 5人横並びで入るかな？」

「前2人、後ろ3人でいいんじゃないですか？ 私撮影するので前にいきますよ」

「そうだね。畔くんは前と後ろ、どっちがいい？」

「えっ………前をお願いします」

喜多ちゃんが自撮り棒を使って、スマホを上に掲げた。

私もスマホの方を見て……ちよつと視線をそらしてしまう。し、仕方ないよね。撮られるって思うと緊張するし、カメラって人の目みたいだし…。

パシヤリと軽快な音を立てて、本日2回目のフラッシュがたかれる。

写真の寸評をしている喜多さんたちに気づかれないように、畔くんの袖を引っ張った。

怪訝そうな表情で振り向いた畔くんに、チケットを差し出す。

大丈夫、シミュレーション通りにやればうまくいく。「今度のライブのチケットがあるんですが、買ってくれませんか？」って言えばいいだけ……

「こっ……あ……かつ……」

「え、こわかった…？——いや違うか。チケット買ってってこと？」

「(コクコクコク)」

小声すぎて聞こえなかつたみたいだけど、なんとか意思は伝わった。

目をつぶって頭を下げたまま、震える腕でひたすらチケットを差し出す。お願いします、どうか買ってください——

どれだけ時間が経っただろうか。ほんの数秒だった気もするし、1分以上かかったような気もする。

ついに私の手からチケットが取り除かれて、かわりに紙とコインが置かれた。目を開けて確認しても間違いない。チケットがお金に変わって…？

……気づいたら、虹夏ちゃんたちもこつちを見ていた。

虹夏ちゃんは「やっぱり気のせいかな……」ってがっかりした顔をしているし、喜多さんも苦笑してる…。恥ずかしい、どこかに隠れたい…。

手近なゴミ箱に入り込もうとすると、虹夏ちゃんに羽交い絞めされた。

「ぼっちゃん落ち着いて!? 誰も責めてないから、ね?」

「あつ抜け駆けしてすみません……」

「ぼっちゃんだけ買ってもらうのはずるい。私の分も買って」

「いや、2枚以上買う必要は……。というか5枚全部差し出さないでください」

「リヨウは空気読めや! 喜多ちゃんお願い、手伝って!」

ひとしきり騒いでようやく落ち着いた私は、虹夏ちゃんと喜多さんに謝罪した。

リヨウさんは結局お断りされたみたいだけど、言うほど気にしていないみたいだし

……。2人も笑って許してくれたから、これで一件落着……。かな?

このバンドに入れてもらえて良かったと、あらためて思う。

これから結束バンドのみんなと人気者になろう! 残り4枚のチケットも、家族4人

でまかなえるし順風満帆——4“人“?

(あれ、ジミヘンって人じゃないよね……。犬は人数にカウントされるの? それにS

TARRYってペットOKかな?)

父、母、妹、犬……4本柱の1つにひびが入る。

追い打ちをかけるかのように、店長さんが声をかけてきた。

「ぼっちゃん、ちよつといい?」

「えっ、あつうえ？ な、なんでしようか…？」

「いやその…。お前のこと、ずっと見てるからな」

店長さんの言葉が、私の中でこだまする。ずっと見てる…。私を!! 　なんで——まさか監視!?

演奏で調子に乗ってたから？ それともさつき抜け駆けしようとしたこと…?

店長さんに聞き返すなんて当然できなくて、私はただ震えることしかできなかつた…。

くくくく

くくく

バンドメンバー4人のものとは別に、新たに畔くんもいれてつくられたロイングループ。

初めてそこに投稿された写真には、満面の笑みの虹夏ちゃんと喜多さん、いつも通りのリョウウさん、目をそらしながらピースする私と、嬉しそうだけども目が泳いでいる畔くんが写っていた。

ちよつとだけ、親近感がわく。

押し入れの中でほほえみながら、今日の写真を保存した。

4人で撮った写真、5人で撮った写真……。両方とも、なくならないように――